



圓光大師行狀圖羽異替頁

第廿世廿二世廿三

其十



圓光大師行狀畫圖翼贊卷三十

事義

傳本第三十



○功德院ハ
東塔西谷ニ
アリ
○皇覺ハ從
五位下左衛
門佐基後三
男東塔南谷
習生坊ニ住ス
又坂下杉生
ニ住セリ

上人の師範功德院乃肥後阿闍梨皇圓ハ叡山杖
生法橋皇覺ハ弟子として顯密の碩才なりき。まづ家
まはしく思惟としく自身ハ機を設けしむるに
このびたやすく生死をおへし。つらたびく
生をあたえたる免ん隔生即忘して定て佛法を
見するへし。今たましく人身をうくといへども
眼らくハ二佛ハ中間よりしてたを生死ノ輪廻
せんて紙をうと長命ハ報紙得て慈尊の出世

○笠原莊ハ
秦原郡也櫻
池ト名ケシ縁
三國傳記云

よありんりハ命ながきまれ地りすぎたるハ
なり我の如くは大地の身をうくへ但大海ハ金
翅鳥の思あち池よすまんと思ひて遠江國笠原
庄よはるの池と云池あちこれ所の領家よ
申うけて放文をさち命終乃とき水紙ふひ掌
れ中に入てをさちなり其後雨ふは風ふり
ばらに彼池よらに水まらち大波立て池中
の塵まぐひ悉くくひあぐ諸人耳目を驚まし
よ彼所より領家に志し申た里々れん
それ日時を勘へらるに彼閻梨命終れ日時よ
ぞあち々は當時よ至るゆく志のたる夜ハ池

よ振鈴れ音まごゆたごと申はくは代ハ
か家ためあちかこや侍人

○師範ハ第四卷ニ注シ又閻梨ノ室ニ入給フコト第三卷ニ見ユ○碩オハ大
オナリ○隔生即忘トハ生ヲ改メ前生ノ事ヲ忘ルヲ云ナリ天台釋義
六云名字觀行隔生即忘或不念○二佛ノ中間ハ釋迦已滅彌勒未
生ヲ云○止觀ニ云戒緩乘急值佛世者是以龍鬼等惡身感長壽
之報而以願力故值佛世也於入中天上帝佛僧爲善也蛇ハヒト
和訓セリ日本ノ俗蛇ヲ音ニシヤト呼ラハ大龍ノ事トス日本紀ニ大蛇
ト書テヤカチヲ口ナトヨメリ一書ニ大集須彌藏經說一象龍
二蛇龍三蝦蟆龍四馬龍五魚龍其中難陀跋難陀龍王一切蛇
龍王也ト蛇ノ登テ辰ニ成ト云ハ蛇ノ龍ニ成テアルコト龍門ノ魚ハ登
テ魚龍トコフナラメ抄トクチナハノ命長キコト古今著聞ニ現證ヲ
出シテ瓦屋ノ釘ニ閉ラレタル蛇ノ六十餘年ニテ死サリキトイヘリ海
龍王經云龍王白佛言我從劫初正住大海從栴樓秦佛大海之
中妻子甚少今者海龍眷屬繁多頌疏第十云故世尊言大龍有
八謂難陀等皆住一劫而能持大地○金翅鳥ハ其翅金色ニシテ兩
翅相去コト三百三十六里文ト三界義云三百三十六方四千里龍

○忠雅公ハ
權中納言忠
宗卿之二男
母公參議家保
卿之女行安
三年八月十
日從一位六
政大臣

ヲ取テ食トス。長阿含增上阿含等ノ經ニ出テタリ。近クハ名義集ニア
リ。○領家ハ領知セラル、屋形ナリ。九卷傳ニ花山院太政大臣忠雅公ノ
領ナリ。祕傳抄ニ母御前ノ所領ナリト。○放文ハ今ノ賣券狀也。界券
又ハ券契トモ云。一書ニ所存アリトテ沙金百兩アタヘ永代ノハナキ文
ヲ取テトアリ。○命終ノトキ水ヲコヒテ等。一書ニ嘉應元年六月十三
日ノ夜半トイヘリ。九卷傳ニ逝去ノ後花山院殿ニ參リテ案内申サレシ
ヲ閣梨ハ已ニ逝去ノ人ナリ。イカテ此ニ來ヘキヤ。人々カヘラソトアリケレ
ハ重テシカクノ由申サレケレハ出向テ對面セラルサテ彼池ヲ申預テ座ヲ
起ト見程ニヤカテ見エス。リヌ。幾程ノ日數ヲ經サルニ笠原ノ菟耳洪水
大浪ノ事ヲ申入ケルガ。フノ時日ヲ勘ルニ閣梨彼池ヲ申請テ罷出ルオ
リナリケリ。委事ハ彼家ノ記ニアリ。書ト云。○鈴公密器ナリ。振ハコレヲフ
ルナリ。一書ニ七八箇年ノ後上人門弟子四五輩ヲ召具シテ。彼池ニ
下リ給テ彌陀經念佛シ給ケレハ鱗オヒ肉イタキテ水上ニ浮タシラ
本身ニ復シ給ヘトアリケレハ行法ノ體ヲ現シテ。又浮給フト。按スルニ大師
彼池ニ下リ給ヒシ事ハ村民ノ口實今ニ傳ヘテ時ニ六字ノ寶號ヲ書テ
人々ニ賜ガリシヲ當時モ傳持シテ當國上馬濱松ノ南西傳寺淨土宗
寄宿之地。今寺ニ在トナシ。又參河名号トイヘルモ此ツ井テニアフハシケル
トナシ申アヘリ。其餘ノ奇特ハ諸家ノ傳記ニ記サレシ十六門記ニモ只

水面一町計トシ注セラル。當時彼處ノ村民祭禮ヲ營テ供物ヲ唐
櫃合ニ入テ池中ニ浮フ。サテ遠ニ流行テ自ツカラ水底ニキコメケルハ
毎年ノ事トカヤ申侍ル

上人の強々るハ。智惠ありて。生死のおぼろまこと
と欲志あり。道心ありて。慈尊にありん事。祇祓よく
し。いへとも。よ。れき畜趣れ生感感せしこと。志
う。や。ぎ。浄土此法門を志し。ざるゆへなり。源
空そのころ此法をたづひえたり。ま。の。信不信
を。く。ち。と。げ。さ。げ。も。申。れ。ま。の。極樂に往生後ハ
十方の國土心よ任て。經行ト。一切の諸佛思に隨て
供養と。何ぞ必し。も。ひ。さ。し。も。穢土に處する
と。祇祓ぐらんや。彼閣梨く。る。に。後佛に出世を期

して。よ。は。く。り。池。よ。す。と。後。人。と。い。う。ま。わ。ざ。た。り。と。と。行。く。ま。さ。家。

畫圖

○阿彌陀經云其土衆生常以清旦各以衣祴盛衆妙華供養他方十萬億佛淨土論云彼於一切世界無餘照諸佛大衆無餘廣大無量供養恭敬讚嘆諸佛如來功德

○妙覺寺ハ或云此寺古横川ニアリコト今ハ滅ビシメト
○淨心房ハ大原問答縁起云妙覺寺聖人覺行僧都若此ハ歟

妙覺寺に淨心房とてさうさひぢぢあり此道心ゆきまのりて寺門を出て念佛を行すあり常々人よこえたり歸依する人雲霞れし五十ぐらりにて他果くろに臨終散こつらるる人こそれをあやしそし妙覺寺の上人ごにを往生せし況や餘人をやと申あひくは上人

聞給ていささか虚假の行者よてやあつらんこ。信くれ々々其後四十九日此佛事に上人を請しそしちまらして唱導すと自來此所化どもあひまりて種々の捧物をあげりて常隨此弟子衣箱を取出て此の先師年來此所持物ありしはとて御布施奉れ件乃箱よは布の衣袴乃尋常けりて布れ七條の袈裟衣たぐひよ十二門乃戒儀をまゝくわさめんより々々上人信くれあつは日來深宣り申はるるこゝんぐたぐいばり々々とこれひぢぢぢき虚假の人たりきり。此所持物をさうに徳たぐて人よたうとてれ

て戒師よなる人とおもふ心よくをこれひきりし
この殆ど我も人それ不審哉ひききたり

畫圖

○人死シテ此界ヨリ冥界ニ移ルヲ他界ト云ナリ。觀經云捨身他世生
諸佛前悲華經云即便捨身來生我界東鑑十五。稻毛三郎重成
妻於武藏國他界サレハ諸人ニ通用ス。當時ハ高貴ノ人ノ死ニ限リテ云
リ。一書ニ公方或攝家清花ノ死ヲ云ト○コトサラトテハ御布施オホカ
ルヘキ中ニ是コソ先師ノ法物ナレハコトニ似合シケレトテナリ○袴トハ
指貫ナトノ類ナルニヤ。尋常ハヨソツ子ニテケレカラヌナリ。第十卷ニ注
シヌ○十二門ノ戒儀ハ妙樂大師ノ製作圖頓戒ノ軌則也○ユレキハ
イレクシキナリ。又勝レタル意モアリ。第七卷ニ注シヌ

治承四年十二月廿八日。本三位中将重衡卿。又
平相國此命よりわけて南都をせせり。とき東大
寺に火より里一のけ。大伽藍忽り灰燼と成
り。其後元暦元年二月七日。谷合戦。彼

○治承四年
高倉院即位
十二年也
○重衡卿ハ
平相國清盛
公之五男。母
八贈左大臣平
時信卿之女

也將いげざられて都へのぼり。大略を
らき。さもよくれ。あち。後生菩提の事。汝申
あせんをめで。その請あるを我も上人おりて
對面して。戒をばせしめ。念佛に
し。く。教導あり。これたび。生きたる。と
れ。り。る。は。一度上人の見。糸。入。魚。き。ゆ。へ
よ。く。侍。り。る。る。と。て。う。ぎ。り。た。く。収。申。ら。せ。ら。わ。
受戒に布施とにほ。く。双紙箱を取出て。上人
乃前より。をきて申。せ。れ。る。ハ。御要た。へ
き物より。ハ。侍。り。し。を。御目ら。り。き。所。よ。を。せ
強て。う。い。ハ。重衡の餘波。を。御覽。し。且。ハ。思。食

也。治承五年
五月廿六日
左近衛權中
將三還任。嘉應
三年。任權中。將。今
年。二月。服解
。從三位。叙ス
壽永二年。正
月七日。正。三
位。元暦元年
二月七日。明
石浦三景時
家國等。三。庸
元
○元暦元年ハ
後鳥羽院即
位元年也

出衆んたびよ。と人々の志を感じて。けり。出
申は。と人々の志を感じて。けり。出
終よ。と人

畫圖

○東大寺炎上ノ事。東鑑平家物語盛衰記ヲ始トシテ處々ニ散在セリ。此寺ノ始終ノ興廢粗第十八卷ニ注シヌ。百練抄治承四年云東大寺者聖武天皇天平八年始造。同十五年造畢。孝謙天皇天平勝寶四年四月乙酉大佛開眼。造畢以後至于今年天曆四百三十八年始逢此災。○灰火過爲灰。熾熾ハイトヨメリ。熾熾ハ火餘熾。日本紀ニハ二字ニテモエク井ト訓ス。六代論ニ宗廟焚爲灰熾宮室變爲秦藪ト○盛衰記ニ熾ヲ使ニテ黒谷ノ菴室ヘカクト申サレタリケレハト。平家物語ニハ黒谷ノ法然房ヲ請シテ對面アリ。上人戒ナト説テトアリ。戒ナトサツケトハ九卷傳及盛衰記ニ授戒ノ時。タサニク教訓ノ御詞トモアリ。○今一度トアレハ平生ノ會合知ヌヘキナリ。父入道モ重盛ノ吹舉ニテ清水寺説戒ノツ井テ。上人ノ教化ニアハレタル由一書ニ注シタリ。○九卷傳ニイカニシテカ都ニテムツヒ給シ人ノ許ニ雙紙宮ヲ取ワ

○左傳晉重耳對楚子曰其波及晉者君之餘也

○行隆朝臣
心中納言顯時
卿ノ長男母ハ
右少辨有業
ノ女也父顯時
卿ハ中山中納
言ト号シ行隆
卿ハ華室ト稱
ヤリ或説ニ元
曆二年十二

ス給事ノアリケルヲ入御ノ事モヤトテ送りツカハシケリ。折節ウレシク覺エテトアリ。松陰ノ礎大佛殿ニカハリシ鏡ナト入タル箱ナルヘシ。現ハ今尚洛東知恩寺ニ殘テ前南禪寺長老月舟其銘ヲ記セラル。是平家ノ奇玩ナリ。トツ。勢觀房源智上人ハ平相國ノ曾孫又房舍聖教悉上人ノ付屬ヲ受ラレケレ。彼地ニ傳ハリテ重寶ノ一トナレリ。又鎌倉ノ光明寺ニモアリトイヘリ。○御要公要用ノ二字本邦ノ書記通用セリ。第八卷ニ注シヌ。○餘波ハ左傳ノ莊公三見エタリ。又名殘トモカケリ。東大寺造管れたために大勸進の聖乃沙法傳
多に上人其撰よあり終よ々然し。右大辨
行隆朝臣を御使よて大勸進職たるへさよ。
法皇 後白河 乃御氣色あり々家よ上人申され
々々。山門の交衆汝のたて林泉に幽栖を志め侍
々々。志の佛道を修。偏よ念佛を行せんた
めねり。勸進代職よ居せば劇務萬端よ

月廿九日右
大辨テト、按
三治承五年造
東大寺奉行
ノ時右大辨ナ
リキ

て素意そいをおぼえしておしやすまさしめられしるに、
行隆朝臣ゆきたか其志そのこころの堅固けんこあるに、
由よし返奏へんそうして、
醍醐たいごの後のち、
職しやくヲし補おぎなへし、
職しやくヲし補おぎなへし、

○行隆朝臣、東大寺造營ノ奉行ナレハ御使ニモ參ラレケルナリ。治承五年三月三日事始アリシニ行隆朝臣先年八幡ノ寶前ニ參籠アリケルカ、菩薩夢ニ告給ハク大佛殿ノ事始ノ奉行ノ時モツヘシトテ、
給ヒシト覺エテサメテ後枕上ニ實ノ笏アリケリ終ニ今日奉行ト成タリキ盛衰ト今此御使ハ治承四年ノ暮ノ事ニヤ盛衰記ノ次第如此吉記治承五年三月十七日紀云今曉右中辨兼光朝臣院別當權右中辨光雅朝臣家司藏人左少辨行隆等下向南都云為實檢典福寺燒失也。行隆便可實檢東大寺云同年六月廿六日左

大臣參議藤原定能卿參著、仗座藏人左少辨藤原行隆來仰、大臣云可定申造東大寺事者、次大臣召大外記清原賴業被仰可進造東大寺雜事、勘文之由、頃之進之、即付藏人辨被奏、次召同辨被仰可勘申造東大寺日時之由、即日時勘文二通寺一通、
可草進造東大寺知識詔書之由、內記即進書州次大臣以內辨、內覽奏聞、次返給於內記、今進清書詔以內辨、內覽奏聞、及給之後、召中務權少輔藤原伊經給之、次召賴業被仰可進造東寺、除目之由、即少外記俊景進、除目權少外記有通置、視於參議前、
此間大臣以官人觸藏人辨云、造寺造佛任人早可承之、有暫同辨奉任人折紙於大臣、次大臣令參議書造寺造佛除目、
藤原行隆兼判官中原基康次官主典次參議書畢奉大臣大臣以藏人辨、內覽奏聞、此日時入次職事返下大臣、大臣以同辨被下日時辨於陣服下大夫史次召式部丞藤原範賴給召名、其後大臣以下退出

造東大寺知識詔書

詔朕以幼齡忝纘聖緒、唯依宗廟之保護、偏思社稷之安全、自若大和國添上郡建大伽藍、安十六丈金銅、盧遮那佛像、蓋感聖武

天皇天平年中發菩薩大願所鑄造也棟薨棟半天光明起滿月
諸之和漢敢無比方而去年窮冬不慮有火四百餘歲之華構空
化灰燼三十二相之金姿悉交燈火

禪定仙院忽聞斯緯惻憫于懷任礎石於舊製採山木以致造營
撰鎔範於良工東國銅以欲修補獻願之趣尤足隨喜夫有天下
之富者朕也有天下之勢者朕也以此富勢將助禪倉亦答本願
聖靈之義志互唱大善知識之勸進上自王侯相將下及饑僮皂
隸每日三拜盧遮那佛各當存念乎自造盧遮那佛像也昔聖武
天皇志淡兼濟誠切利生內祈神道外勸法界緣編之命華廣大
之願緬可尋舊規可追古跡雖一粒半錢雖寸鐵尺木施與者世
世生々在々所々必依妙力長保景福彼泰山無嫌投壤故慶起
雲之峰巨海不厭細流故激浮天之浪況乎時臨澆漓俗非淳素
共勵興立之思同結菩提之因今在此時已興此善幸遇斯之勸
進者豈非民之良緣哉然則率土之濱霑慈雨以佇美旨普天之
下滌惠風以同栗陸五畿七道諸國等司因斯事莫令侵擾百姓
布告遐邇邇俾知朕意主者施行

治承五年六月廿六日

○林泉幽栖八松ノ林アトヲ隱シ谷ノ泉ナカレ清クニテカスカナルスニカ

ヲ云ナリ。杜甫詩ニ興發日林泉。又ハ編性合幽栖ト。○劇務萬端ハセ
ハクシキツトメヨロツニ多カラントナリ。白氏文集十四職勤務劇ト。○辭
ハ却不受也。素イナトヨメリ日本紀等。○舉申ハ推舉シ申ヘキトナリ。書
言故事ニ未薦舉曰尚借吹嘘之力。杜詩ニ願借吹嘘送上天。又吹舉
トモ書リ。曹子建力雜詩ニ何意騰舉吹我入雲中ト。○俊乘房ハ上ノ
醍醐ノ禪徒ニテ真言行者ナリ。第四十三卷ニ見エタリ。盛衰記ノ
文勢此時醍醐ニオハセト聞エタリ。又此一段ノ始終彼記ト全同也
リ。○東鑑五云。爰法皇勅重源上人曰。訪本願往躡唱高卑知識
課梓匠而令勒成風業代檀主而可終不日功之由者上人奉命
旨云

俊乘房伴勢太神宮にきて此願を成就とて
く。その瑞相を示し給へと祈請し給ふに。三七日
れ曉うらましむめり。唐將衣束したる貴
女。方寸れ玉液授給ぬと思へし。けり見れん彼玉
の。よ袖れよよあり。重源とまは得て大よ悦ひ

珍秘と。其後天下響のびて應じて財寶心
よほむせむれん。程なく金銅の本尊。そののびて
さきまありて。よりにたり。重衡御れ上人よ進す
所の鏡を結縁ためて送らるり。くれく佛を鑄
りて。あつる。爐たけに。入りに。飛出ては。あよむ
あいに。あり。を。不思議れ事とて申あひ。を。大佛
殿正面の柱よ。歩川にて。傳ら。彼鏡より。て
なん。傳らる。

畫圖

○トト口メルハ眠ノ字ウツハ。現ノ字ナリ。東鑑五ノ註。太神宮致造寺祈
念。依風宮。瞻親得。二顆寶珠。為當寺。重寶在。勅封藏。一書云。造營
功畢。大佛。右蓮華實。下被納。本尊。右方也。古今著聞云。二ノ寶珠ヲ
兩宮ノ御前ニ感得セラレシヲ。一ハ御室ニ有ケリ。一ハ卿ノ二品ノモトニ
タリテ待ケルトフト。又多賀明神ニ詣テ。延命長壽ヲ祈リケル。越
シニ。一枚給ハリケルト。夢ミテ。升延トアル物。二枚ヲ得ケル。四十ノ命ヲ
ノハリテ。八十ニテ。終ヲ取給フト。ナン申傳ヘタリ。伊勢名所拾遺集
下云。天覺寺ハ二見ノ郷郡ニアリ。内宮一祢宜荒木田。成長建立
地也。文治二年ノ春ノ比。俊乘房重源上人。東大寺造營ノ靈夢ヲ
蒙リ。兩大神宮ニ大般若經各一部奉納セララル。外宮ノ宿坊ハ常明寺
本内宮ノ宿坊ハ天覺寺。貴僧六十口。雜人七百餘輩。五箇日天覺
寺ニ逗留。成長神主饗應セララル。其内一日二見ノ浦ノ風景ヲ見トテ。
僧侶等小童相伴テ遊興ノ和歌左ニ備フ

二見トハタレカイヒケン万代ニメカレセシキ浦ノケシキヲ
時鳥二見ノ松ニカタラヘハイト、心ノトニルウラカナ
オモシロク見ユル二見ノ浦ハカナ岩戸ヲアケシ昔ナラ子ト
名ニ高キ二見ノ浦ヲ詠ハ心コトハオオハサリケリ
二見瀉天ノ岩戸ヲ明クレニ詠テ世ヲハ過ソシヌヘキ
ナカムレハ心モ涼シ神風ヤ二見ノ浦ノ松ノ村立
○珍秘ハ珍敬秘藏ナリ。○金銅ハ銅鐵ノ上ニ粉泥ヲヌリテ。金色ニシ
タルナリ。第十六卷ニ注シヌ。釋書ノ重源傳云。十餘歲建久六年春三
月落慶。按スルニ治承五年事始盛衰記等ニテ建久六年ニ至テ十年ニ滿タ

リ。此後建永元年秋九月勅建仁寺策西主幹事。文永六年勅東
福寺圓爾主書釋ト。爐ヲ飛出ル等ノ奇瑞始終一ニアラス。續古事談
帝王編年記等ニ委曲ナリ。盛衰記ニ四種ノ瑞相ヲ舉ル中ニ此鏡ノ事
其隨一ナリ。今文ト同シ。○彼鏡永祿十年十月十日。松永彈正カ
兵火ニカ、リテ大殿一時ニ煙トナリケレハ鏡モ一タ失セニケリ。九卷
傳ニ坤ノ柱ニトアリ

壽永元曆げんル。源平の乱ごうよりりて命汝都鄙
よろしいちふその其數を志し。つ。こいにい後家坊無縁
汝慈悲じいをたままここ。つつ後世ごれれここ。つつ後救ごの
ここめめに興福寺東大寺とうより始はて道俗貴賤きを
ととめて七日にち大念佛だいを修しゆ。つつにその比ひまま
ふふ人ひといいままご念佛ごのいいままご事ことを志しらら。つつて
勸いめめにいららふふををれれととけけららりりももききんん。後家房

これ事こと汝に歎なげて人の信しんを勸すすめんたために建けん久きう二年
此こ比ひと人を請まねドましてまつり。大佛殿だいのいいままご半
作さくなりなり々々る軒のき下したよよて。入唐にっぽう乃時渡なり一奉ほうれる
觀經くわんの曼陀羅まん。つつびびよ浄土五祖じゆれ影えいを供養く
一。又浄土じゆれ三部經さん汝講かうををららせせををららるるに南都なん
三論法さん相さうれ碩学できををららくあつつままりる中ちゆうよよ大
衆二百餘じゆう人ををののくくももつつに腹はら巻まき汝に著ちやくして高
座ざののままハハふふたたまま居いるる。自宗じれ義ぎを問とうけく
訛ひ謬めうああハハ耻辱ちぢう汝にああつつへへんと。支度し一いたたりる
うう上じやう人にんままのの三論法さん相さうれ深義しんををららへへ次じよ浄土じゆ
宗しゆの秘蹟ひををここややりりに釋しやく一い終しゆうくく。未代みのの九く丈じやう出

○已講理真
公種姓行業
未考

離の要法ハ口稱念佛よまじくハたなり。まじく念佛
をまじくらんこそかぬハ無間地獄よ墮てハ萬
大劫苦受へまじく。觀佛經の説よまじくして説
後を説く。二百餘人の大衆よまじくしてまじく隨喜
渴仰まじくハたなり。東大寺乃一和尚觀明房
れ已講理真。まじくに説よまじくしてハ旬のよまじく
まじくたえてる事ハ偏よ此事ハまじくんためれり
らそ悦申々る。はてそのはるてよ。大台圓頓の十
戒を解説一終よ。吾ハ大乘戒。これ寺ハ小乘
戒とのべ終々終ん。大衆存外の氣色こそれり
まじくれども。當寺れ古老乃中に。兼日よ靈夢を
志先す。まじくあり々る。説よまじくだらて披露一々り
はらて。斟酌一々り。まじくや。衆徒をのく口説用
て別事をまじり々り

畫圖

○後漢明帝
ノ時摩騰ノ姉
子。五通菩薩
圖寫ノ曼陀羅
ヲ持テ。支那ニ
來ル。未幾賣
變相。西還後
隋朝有明憲
從高齊道長
得騰之姊本
時ニ北齊畫工
曹仲達ト云者
アリ。傳模茲圖
自是普模廣
行。善導大師

○イミシキハ美ノ字ナリ。第十卷ニ注ス。○觀經ノ曼陀羅ハ善導所
圖ノ變相三百堵新修ト云ノ轉寫ニシテ即是重源ノ將來ト云。洛東
知恩院ノ重寶タリ。○淨土五祖ノ影第六卷ニ見ユ。○腹卷ハ書云神
功皇后ヨリ初レリ。是ハ背後ニテ合スル分具足ナリ。肩ト腰トニ引合セ
ノ緒アリト脚立ト云物。彼時ニ始ニリテ武内ノ臣造之トソ。○訛謬
ノ字ハ禮記ノ大傳五ニ紙繆ニ作レリ。注ニ舛戾也ト理ニソムキタル云
ナリ。訛音紕義同。謬音繆差誤也。今作訛謬義相差ハス。○支度ハ
用意ノ義ナリ。第二卷ニ注レヌ。○祕蹟ハ方クレテ知カクキ奧義ナリ。蹟
ハラキ口トヨメリ。易繫辭上云。亘天下之至蹟而不可惡也。又云探蹟
索隱。鈞深致遠。程子云。蹟深遠也。○觀佛經第二卷云。汝等先世
邪見疑師。無戒虛受。信施以此因緣。墮餓鬼地獄。八萬歲受苦
等。乃至廣說。觀念法門ノ終要集ノ下卷群疑論ノ第七ニ具ナリ。粗第

手ノ本ヲ寫シ
給トシ

廿五卷ニ注シヌ○渴仰分ハキテ水ヲ飲カ如ク多クキテ信ヲ起スト也
大論一ナトニ見エタリ楞嚴云渴仰者思渴瞻仰潘安仁カ西
征賦云如渴如飢心翹勤以仰止注ニ如渴如飢者思賢入而仰止
之ト○吾山上天台山大師ノ舊住ナリ釋書云大同元年十一月
廿三日傳教大師於止觀院藥師像前率數百人授圓頓菩薩大
戒是傳大戒之始也傳弘仁十年三月奏乞建大戒壇南
諸師沮之十有一年二月述作顯戒論及緣起反詰彼失南寺衆
無敢問議者十有三年六月四日寂十有一日藤冬嗣捧圓戒允
許之詔來傳教十四年四月十四日於根本中堂始行大乘菩薩
戒羯磨義真爲和上時受者一十四人義真傳官班記時天長太
上皇欲營菩薩戒壇慈覺著顯揚大戒論助發聖意慈覺光定法
師奏乞建戒壇遂先師素意天長五年勅許大乘戒壇于時始立
三國傳教宗後得建定之力居多光定言ト云ノ大乘戒ト公梵網ノ
說相圓頓菩薩ノ大戒ナリ此寺ト東大寺ナリ天平勝寶五年正
月鑑真和尚來朝四月勅於東大寺建戒壇聖武上皇登壇受戒
靈福等舊住僧徒八十人重受釋書資言トコロノ戒ハ權大乘菩薩
戒ナリ是四分ノ所說聲聞ノ儀相ヲ專ニスガレハ持スルトコロノ心行大
ナレト王守ル所ノ戒相ハ小乘四分ノ律儀ナリ是故二山家ノ諸師ハ

戒相ニ約シテ下シテ小乗ト云奪テイハナリ南寺ノ碩德ハ心行ニ
就テ稱シテ大乘ト云自貴メハナリ良ニ大小權實古今互ニ抑揚シヌ
今大師ノ御一言大衆存外ノ氣色アル今ニ始ヌ立破ノ道ナルニヤ
上人屋よりゆく波事とく強ハばらりれども我
國此風俗ノ隨ク法門ノよせてハどうくたひ
をのへられどもよや或ハ門弟此中より志
をける波申はくえ或ハてけりか書付強へるを
没後ノ披露ノ一々

春

はへし地ぬえをある波をうけへる
ゆるゆるのわたりる阿さう波えり

○此歌朝日ノサレ出ルニ霞ノカカリタル幽玄ナル景氣ヲ詠タヘリ意ハ

サヘラレヌ光トハ十二光佛ノ中ノ無導光ヲヨメル也○ヲレナヘテトハ萬葉集ニ押並ハ雲御抄云イツレトワカヌ也○歌ノコト口總シテハ彌陀ノ光明ノ德ヲ詠シ別シテハ無導光ノコトヲ詠ルナリ無導トハ憬興疏曰人法無能障者故無導也トモノ字ニテ礙ラルハ光ハ世間ノ日月等ノ光ナリ導テモ導ラレヌハ佛光ナルヲ山谷ヲ覆フコトクニ此佛光ヲモ隔カホニ霞ノ立ト無心ノ霞ニ心ヲ付テ無導光ヲ詠ル景氣無比類歟彼煙霞之幽趣見トコロサルトモ云ヘキ也

夏

わさハかきけりけりいりあひいさ
こころはけりけりいりあひいさ

○此歌新後拾遺集十八釋教ニカケヌ間ソナキトアリ○唯トハ海篇曰獨也又專辭○アフレトハ逢コト用古今集物名カクハカリアフレノレニナル人ヲイカハツラレトオモハサルヘキ人メユヘノチニアフヒノハルケクハワカツラキニヤオモヒナサレシ○心ノツマトハ心ノ端也葵ハ御簾ナトノ端ニカクル物ナレハナリ拾遺夏大中臣能宣キノフニテ餘所ニ思ヒシアヤ草今日我宿ノツマトニルカナ金葉夏春宮大夫公實玉江一ヤケフノアマヲ引ツラニカケル宿ノツマトニルハ此歌宿ノツマトハ軒端ナリ物ノハレツツト云ヲ妻女ニヨソヘテ云ル也今大師ノ歌モ此義ニ依レリ○此歌一説ニ賀茂ノ河原屋ニテ賀茂ノ祭ヲ見テ詠給ヘル歌ナリ知恩寺傳説集ニ釋教ノ部ニ入傳ニ四季歌トスル撰者ノ作為歟サアラハ傳説モサアラシ歟是賀茂祭ノ葵ニヨソヘテ佛ニイツカ逢ント見佛ヲ願ヒカケヌ日ソナキト念々捨ノ意樂ヲ兼テ詠給フ也大師祭ヲ見タニフニツケテモ常修ノ志願ヲ述給ナルヘシ

妹

阿弥随佛よろいさふれさよいさ
秋の梢れさよいさ

○此歌ミツカラ深心ノ相ヲ紅葉ニ比レテヨミ給ヘリ○ソムルトハ信樂ノ深キライフ一朝一夕ノ信心ニアラス年久シク本願ニ歸シ日ヲ逐テ染習スル義也○色ニイテハトハ内心ノ信樂ノ外相ニアラハル義也シノフレト色ニ出ニケリ我戀ハノ類ナリ拾遺集中納言敦忠身ニシテ思フ心ノ年フレハツ井ニ色ニモ出ヌヘキカナ○秋ノ梢トハ深心ノ分齊ヲ千入ノ紅葉ニタトヘテヨミ給ヘリ○ナラマシナルヘシ也マシハ應ノ字ナリ○歌ノコトハ秋ノ

葉ニ露モ時雨モ夜晝間ナク時ナク降カリテ紅葉スルコトク。淡ク本願ヲ信シ給フ心ノ色ノ若シ色ニ顯レ出ルモノナラハ此秋ノ梢ノコトクナラント紅葉ノ景氣ニヨソヘテ一心信樂ノコトヲ詠給フ也。尤季ノ歌ナレハ時節ノ景氣ニナラヘテ淡心ノ音ヲ述給フナルヘシ

冬

雪れうらに佛の御名を唱まじし

はをたるとはとやうきまゑぬ

○此歌ハ佛名會ノ詠也○雪ノウチニトハ衆罪如霜露ナトノ文ニヨソヘテ或霜或露或雪ニ罪ヲ比シテ詠セリ○御名トハ如シ三千佛名經拾遺集貫之。年ノウチニ積レル罪ハカキクラレフル白雪ト共ニ消ナシ拾遺愚草。年暮テ佛ノ御名ヲ聞時ハ積レル罪モ殘アラシ○積レル罪ソトハ大師自無始已來ノ造罪懺悔ノ辭也○ヤカテ消トハヤカテトハ程モナク即時ニ罪障ノ消滅スルヲ云ナリ消スルハ消ハル義ナリ佛名會ハ諸宗通用シテ每歲臘月ニ修之又受戒ノ前或ハ犯戒ノ後修此佛名○佛名興起ハ續日本紀三代實錄帝王編年紀公事根源等ニ載タリ之。又年中行事歌合曰判詞關白良基佛名ハ十九日二十一日ニテ三箇日ノ間

三世ノ諸佛ノ御名ヲ唱テ六根ノ罪ヲ懺悔シ侍ル心ナリ。寶龜五年十二月ヨリハシニ承和ノ比ハ年コトニアリ。貞觀ノ比カトヨ一萬三千佛ヲ畫圖ニテハ諸國ヘクハラセ給フヨシ國史ノ記ニ見ラヨシ侍リシイト有難事也○歌ノコトハ雪ノウチトハ時節ヲイヒ又罪ニヨソヘ佛ノ御名ハ三千佛名ヲ唱フ積レル罪トハ無始已來ノ罪障今悉ク懺悔ノカヲモテ三業清淨トナルヲ云ゾレヤカテ消ルトハ云ナリ。大師佛名會ヲ修シ又カハル詠ヲモテシ給フナルヘシ

冬 佛法捨身命と云へる事

うらそゑのよけれゆら乃戀りたよ

あふよい身ををばりしやいと恋

○假染ノ色トハ實ニハナキアヤマリテ執スルヲカリノ色トハテ也。又色ノユカリトイハシタメノ詞ナリ。經曰愛欲莫甚於色。色之為欲其大無外。毛詩序疏曰女有美色男子悅之。故經文通謂女為色。○ユカリトハ縁ノ字ナリ。其愛縁ヲ云○戀ニタニトハ榻嶋曉筆記云タニト云ハサヘト云ニオナシ云。サヘト云ニハアタノ義アリ。今ノ歌ノ戀ニタニトハサヘト云ハ口也○アフトハ男女打トケテ相見ル事ナリ○惜ヤハスルハ戀ニ身ヲモ惜ミハセヌ也。古

○智論云。五欲不久。尚如假借。又云。欲樂無實。如夢所得

今集戀二友則命ヤ公何ソハ露ノアタモノヲアフニシカハオシカラナクニ○
歌ノコロハ題ニテ明ナリ。ハカナキ男女ノ戀路ニモ身ヲ捨テ契ルソカシニシテ
ケニクシキ菩提ノタメニ露ノ命ヲオシニヤトノス、メナリ

勝尾寺よて

柴の戸ヲあけとまきく淑白雲紙

いひしとさきれとよりこれとぞ

○此歌玉葉集ニ入タリ。大師勝尾寺ノ西谷ノ艸菴ニテノ歌ナリ○柴ノ
戸トハ山家ナリ○歌ノコロハ平生ハ徒ニ明暮カハル白雲ヲノミ見ルイツカ
往生ノ時イタリテ紫ノ雲ノ迎ヲ見ント也。臨終ノ瑞雲ヲ平生ノ白雲ニ
ヨソヘテイツカ紫雲ノカハルヲ見ント思召ヤリテ詠給フ也。尤山家ノ幽邃
ナル景氣ヲナカメ。朝暮ノ專念ナルニツケテモ紫ノ雲ノ夕ベヲ思ヒ出テ讀給
フナルヘシ

極樂往生此行業ハ餘の行をさすを以て

た本願此念佛を以てしへ」と云ふは

あまの佛といふより外いはの因也

たのむのこゝろをあらわす

○此歌夫木集第卅四釋教部ニ載タリ。心ハ前書ニ明ラカナリ○イフ
ヨリ外トハ稱名念佛ノ外ノ餘行。又助業ヲモ云ナリ。ホカトハ餘ノ字ナルベシ。
日本紀ニ自餘ト書テコノホカト訓セリ。詞書ニモ餘行トアリ○津ノ國トハ
難波トイハシ枕詞ナリ○難波トハアシカルトイハシ料也。何カノコトモト云テ
難波ニヨソヘテイヘリ。諸ノ往生ノ雜行ヲサス也○アシカリヌヘシトハ正ク制
止ノ詞ナリ。念佛ハカノ佛ノ本願ノ行ナレハ決定往生ノ正業ニシテ亦修シヤ
ス。其外ノ行ハ修シカタクシテ正業ニアラス。其ヲ修スレハ往生モ不定ナルガ
ユヘテアシカリヌヘシトナリ。津國ハ蘆ノ名所ナレハ蘆ニヨリテ蘆ヲ惡ト秀句
ニイヘリ。新千載集前僧正玄圓ヨシアシト人ニ語ルナ難波汚コト浦ニスルア
トノレハサヲ○九卷傳ニ此詠ト同時ニ名利ハ生死ノキツナニ途ノ鐵網ニ
懸稱名ハ往生ノツバサ九品ノ蓮臺ニ登ルト云句アリ。並是讚州ニテ西忍
力館ニ入御ノ時ノ事トソ。又或説ニ此歌ハ後白河法皇與上人日想
觀修セラレシ時。天王寺ノ西門ノ西ノ岸ニ新別所トテ一字ノ堂四面ヲ
建立シ給フ。其堂ノ西ノ小壁大師御筆ニ名號アソヒテ。其傍ニ此歌ヲ書給フ
ト云○此歌ノコロハ唯往生極樂ノタメニ餘行ヲサナカラサシオキテ一向

ニ正定業ノ稱名ヲ用ユヘシトナリ。其稱名モ。但ナニトナク本願ヲウチ信シテ。決定往生セント思ヒテ。申外ニ別ノ子細ナキナリ。大師云。念佛ハ。多ク風情モナシ。只申ヨリ外ノ事ナシト。導師ノ廢立助正。傍正ノ三義。只正修ヲモテ專トス。是佛ノ本願ニ順スルカ故ナリ。末代時機相應ノ行ナレハ。偏ニ稱名ノ一行ヲ修スルヲモテヨシトストナリ。

極樂へはとてんてとていってやと
夕のをいりよのいりやいりきまびら

○此歌夫木集釋教ニ載之。第二句ツトメテトクトトアリ。○ツトメテトハ。勤修ナリ。早朝ノ心ヲ兼タリ。源氏伊勢物語ナト。夜ノトノ井過テ朝タニ歸ルツトメテナト云ニ。晨字。夙字ナリ。拾遺集。仙慶法師。極樂ハ。ルケキ程ト聞シカト。ツトメテイタル所ナリケリ。是ヲ本歌トシ給ト見エタリ。此歌千載集ニ。空也。上人ノ歌トアリ。袋草子ニ。千觀内供トアリ。是モ勤修早朝ヲ兼タル歌也。新古今集。慈鎮說御法キクノ白露夜ハ置テ。ツトメテ消シトヲシテ思フ。是ハ晨字。勤字兼テ詠ル歌也。○出タハトハ。發心又發足ナリ。極樂ニテト心サスハ。遙ナル旅路ナレハ。早朝ヨリ思立テ。修行ノ足ヲハコトナリ。○身ノヲハリトハ。終焉ノ時ヲ云。六百番歌合。隆信朝臣。命サヘ身ノヲハリニヤ成ヌラシケ。フクラスヘキ心地コソセ子。○歌ノコハ。極樂へ往生セント思ハ。早く心ヲ發シテ。專修ニ念佛ヲ勤ヨトナリ。相續無間ニ修行セハ。臨終正念ニシテ。極樂ニ往生セント也。

ははらばらとてんてとていってやと
夕のをいりよのいりやいりきまびら

○ウツセミトハ。文選ニ。蟬蛻万葉ニ。虛蟬。為家抄云。三義アリ。一。空蟬ニ。小蟬ニ。遷蟬。○遷蟬トハ。日本紀云。此夏ヨリ秋へ遷ル義ナリ。空ノ文字ヲウツト讀事ハ。文選云。盜舜ハ。曾州。空人ナリト。顯昭抄云。ウツセミトハ。蟬ノモヌケヲ云也。虛蟬ト書テ。ムナシキ由ニ詠也。ムナシトハ。生テハカナク滅スル意也。ウツセミト讀テ。鳴ヨシヲ詠ル古歌ア。マタ侍リ。ヌケカラヲウツセミトイヘト。ムナク成ヘケレハ。鳴時ヲモウツセミト詠ナラハ。シタリト心得ヘシトアリ。又ハ雲御抄ニ。ウツセミハ。蟬ノ總名也ト。○モヌケトハ。河海ニ。蟪ノ字也。源氏ニ。空蟬ノ身ヲカヘテケル木ノ本ニ。猶人カラヲナツカレキカナ。詞ニヤラオキ出テス。シナルヒトヘヒトツキテスヘリ出ニケリトアリ。是ハモヌケテ。身ヲ餘所ヘウツシタル云也。元照觀經疏云。所感聖境。故歡喜形留神往。有リ如蟬蛻。云。是ハ歡喜往生ノ文ヲ釋シテ。形ヲ留テ。心ノモヌケ往ヲ云也。是ハ臨終ノ時ヲ云。今大師ノ歌ハ。平生ヲ云也。○歌ノコハ。只遷蟬ト空蟬トヲ相兼テ詠リ。勿論觀心ヲモテ。心ヲ西方ニウツスニハ。非ス。唯稱名ヲ唱テ。心ニ專ラ西方ヲ

念スレハツカラ極樂ニ心ノ移ルハカリナルヲ西ニウツセミト云カケ給フ也
○モヌケハテタル聲トハ口稱三昧ニナリテ唱レハ妄念モ異念モ忘レハテ、唱
ル所ノ稱名ノ聲モ心モラツカラ清キヲス、シトハ云ナルヘレ、シトハ涼ノ字
清ノ字也。又極樂ヲ涼シキ道トモイヘリ。此歌又秀逸ノ聞エ普レ世人
吟味スルニ堪タリ

光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨此心

月影のいづれぬ里のいづれを
たしむる人のいづれを

○新後撰集
大江頼重光
明遍照十方
世界ノコ、ロヲ
草ノ原光待ト
ハ露ニヨソ月モワ
キテハ影ヤトシ
ケレ

○此歌續千載集ニ入レリ。是ハ貫之ノ歌ニカツミレトウトクモ有カテ月影
ノイタラス里モアラシト思ヘトアル詞ヲトルナルヘシ。○ナカハトハ後撰集。讀人
不知。月影ハオナシ光ノ秋ノ夜ヲワキテ見ユル心ナリケリ。○歌ノコ、ロハ上ノ句
ハ光明遍照十方世界。下ノ句ハ念佛衆生攝取不捨。上ノ句ハ十方世界
ノ念不念ノ者及ニ禽獸草木ニ至ルマテ照ストナリ。下ノ句ハ普ク照ストイヘトモ
唯念佛ノ者ヲ照ストイヘリ。ナカハルハ念佛スル人ヲ云也。念ト不念ト差
別ナケレトモ本願ノ故ニ相應シテ念佛ノ者ヲ照シ給フトナリ。觀念法門
云。但有專念阿彌陀佛衆生。彼佛心光常照是人攝護不捨。總不
論照攝餘雜業行者。心ニツストハ稱名ヲ修行スル者ヲ常恆ニ護念シ給
フヲ心ニストハ云ナリ。弥陀ヲ恭敬シ讚歎スルハ三縁ノ義アリ。三縁トハ一ニ
親縁ニ近縁ニ増上縁也。其義疏記ニアリ可知。新千載集耀光上
入親縁ノコ、ロヲ詠ル。弥陀タノ念ノウチニ隔ナキ。佛ハサラニ身ヲモハナレ
ス。此義ヲモテ見ニ又心光護念ノ意ト見モ一義也。弥陀ノ光益ハ至ラヌ
所ナケレトモ稱名ヲ修スル人ヲ護念シ給フトナリ。此歌又秀逸也。尤堪能
ノレワザ也

三心此中の至誠心乃ん哉

往生いづれにやとあはれとあはれん

たしむる人のいづれを

○此歌題ノ心ヲ能ク見テ心得ヘキ也。○世ニヤスケレトハ自連所問經及
大經下ニ云。易往而無人云。○誠ノ心トハ經ノ至誠心ナリ。疏ニ至者真
誠者實ト釋シ給ヘリ。夫木鈔ニ或人三心ヲイカ、心得ヘキトテハ幡ニ
祈請申ケルニ夢ニシメシ給ケル御歌。極樂ヘユカント思フ心ニテ。南無阿彌陀
佛トイフツ三心。○歌ノコ、ロハ淨土往生ノ行ハ易行易修ニシテヤス。ト念佛
ノ一行ニテ彼極樂ニ生ル也。行住坐臥ニ唱フ稱名ニテ未斷惑凡夫報土ニ往

生スルコトハ偏ニ佛力不可思議ノ妙術也。カ、ル易行ヲ頼メズ、頼メドモ誠ノ心ナクテ、浮漫ニ思フ人、虚假ノモノハ不可往生也。ソレヲ誠ノ心ナクテ、コソセ子トハ教示シタラフ也。是称名者ノ一大事、淨土ノ故實也。至誠心ニ任シテ念佛ヲ修スヘキ也。

睡眠すいみん時十念じゅうねんを唱となへ〜と云事こと後のち

阿弥陀佛あみだぶつと十聲じゅうせい唱となへ〜と云事こと後のち

ヤウキニ打ソヘテ、十度ノ御名ヲ唱ツルカナ

○山家集西行。夢サムハ鐘ノヒ、キニ打ソヘテ、十度ノ御名ヲ唱ツルカナ

○此題睡眠ノ時ノ十念トハ觀睡ノ十念也。即引丈與ニ出ス。○十聲トハ禮讚ノ意。阿彌陀佛觀音勢至諸菩薩清淨大海衆ト十度唱ヲ云。今ハ唯佛號ヲ十度称スル也。○トトロニトハ秘抄ニ暫しばらく寢ト書タレハレハニイヌル也。○ナカキ子フリトハ生死長夜ニ沈淪スル也。拾玉集しやくぎく厭離百首阿弥陀佛ト十度唱ヘテトトロニヤカテトコトノ夢トコソナレ。○ナリモコソスレトハ治定ニタル詞也。トトロニハ必スナカキ子フリトナラシコトヲ多トシツケテイフナルヘシ。○サレハ善導ノ教ニヨリテ大師睡眠ノ十念ヲ唱給フ。慈鎮和尚モ此教ヲウケ給フ故ニ師弟同シ風體ニ詠合給フ。イト有カタキ事こと。往い往い讚さん云。若入觀及睡眠時應發此願若坐若立一心合掌正面向西十聲

称阿弥陀佛觀音勢至諸菩薩清淨大海衆竟已下。○歌ノコトハ上句ハ此睡時十念ノ意ヲ述給フ也。下ノ句ハ勸示也。西方さいほう要訣ようけつ曰世事之大莫越なほ生死。一息不來便すなはち屬後世。一念差錯便墮輪回りんかい。云若人ニタリニ睡臥スル内ニ息絶いきトハ必定ニテ生なま成なり長夜ニ沈没しんぼくシ流轉りゅうてんシナント也。是自責ニテ又他ヲ教示し或觀或睡眠ノ時必ス此十念ヲ修セヨト也。

上人じゆんじんてりり書付かきつけ給へりやう

小松こまつれまゝ紙かみとてころりて

無量壽むりやうじゆ佛ぶつのしりへんをさそりまひ

○此歌一説ニ小松殿ニテ詠給フト也。小松殿ハ平家物語長門ニ六波羅東大道ヲ隔へだルる山槐さんかい記きニ治承三年六月廿一日戊申入道内府所惱猶重なやま。云法皇密々有臨幸彼亭小松。○千トセフルトハ嵩山記曰有大松樹或百歲或千歲其精變為青牛せうぎう為なま伏ふ龜かめ採食さいじく其實得長生也。抱朴子曰松樹之三千歲者其皮中有聚脂狀如龍形名曰飛節芝王策記曰千歲松樹四邊披起上杪不長望而視之有如やう偃蓋えんがい其中有物或如青牛或如黃犬或如青羊入服壽皆万歲。○小松ノモトハ小松殿ノ山莊ヲ云老タル松ヲモ小松ト云老タル松ヲ小松

○夫木道經
神代ヨリ才
ソメケニ小松原
幾千世經ヌ
知人ソナキ

ト詠ル證歌。古今集。梓弓。磯邊ノ小松誰世ニカ。万代カ子テ。種ヲミケケ。此歌ハ或入曰。梓本。人丸トアリ。○千年ト無量トハ。數量相對ノ格也。千載集。對松爭齒。入道前關白太政大臣。千トセフ。尾上ノ小松ウツレ植テ。万代一テノ友トコソ見ス。松ヲ君ニ比シ。家ニヨソヘ。祝ヒ詠ル作例。多ク集ニ見エタリ。古今集。素性。万代ヲ。松ニウ君ヲ祝ヒツル。千トセノ陰ニエニト思ヘハ。○歌ノコ、口、千トセフル小松ト。小松殿ヲ祝ヒテ云ヘリ。其小松ノモトヲ住家トシテ居給ヘ。松ノ千トセフルト云名ニヨソヘテ。彼無量壽ト云御名ヲモヨソヘテ。ツ井ノ迎ヲ待給フト也。常恒ニ弥陀ヲ唱念シ給ヘ。折ニフレ物ニツケテモ。弥陀ノコトヲノミ詠出給フナルヘシ

ねぼつとれたまごういひもんこやうとん
そらとせらぬらたうまのり枝

○從高松向
東至子松行
程可四里

○此歌夫木鈔ニ載之。○オホツカナトハ。万葉集鬱悒。又不審。○サ、フトハ。柱字也。柱ハ。腫與切音主。支也。撐也。○子松高松ハ。順和名第九云。讚岐國那珂郡子松。古萬山田郡高松。多加夫。念佛ノ法門ハ。機ハ。愚惡ノ凡夫ヲ本トシ行ハ。一念十念ヲモ攝ス。然ニ機ハ。凡夫ヲ本トシ行ハ。劣ナルニ似タレトモ。又聖人ヲ兼ヌレハ。龍樹天親モ尚願生ス。行ハ。一念十念。卑劣ニ似タレトモ。須臾ニ報國ニ入り頓ニ無生ヲ證ス。是高キニ非スヤ。サレハ。聖道ノ法門ノ高キニモ。ヲサクヲトルニシケレハ。誰カイヒケント。子松高松ニシテ詠ニ給フナルヘシ

池のあふれんよ似たりあり
しつらすしじとけしめんたむれい

○此歌續後拾遺集ニ入テ題シラストアリ。但シ我心池水ニヨソ似タリケレ濁リス。ムコト。定ナクシテトアリ。一説ニ是賀茂ノ河原屋ニテ庭上ノ池水ヲ見テ詠ストアリ。知恩寺傳説。○歌ノコ、口、只。大師曰。欲界散地ニ生ラウクルモノ。心ヲ散亂セサラシヤ。煩惱具足ノ凡夫。イカテカ妄念ヲ留ムヘキ。其條ハ源空モカラ及ヒ候ハスト云。今ノ詠濁リ清トハ。心ヲ水ニ譬テ時々刻々妄念雜起シテ且發リ且止ヲ濁リス。ト定ナキト詠給フ也。ノノ心トハ。自身ヲ指テ他ヲ教示シ給フ歌也

ひちたていまの思ひいんあふれん
勢いあふれんよ似たりあり

○此歌新千載集ニ入テ題不知トアリ。又夫木鈔ニモ載之。是ハ各留半座乘華葉待我閻浮同行人ト云文ノコ、口、ヲ詠給ヘリ。生レテハトハ。淨土

二生レテハト也○フル里トハ穢土ヲ故郷ト云ナリ。穢土ヲ故郷ト詠ルコト多ク集ニ見エタリ。續拾遺。忙々六道無定趣ノ意ヲ蓮生法師。六ノ道ヲルシ定メヌ物ユヘニ。タガ故郷トイヒハシメナシ。○契トハ曉筆記云。契約ノ心也。歌ノ題モ契ト云ハ。多クハ此コト也。云。今大師ノ詠モ契トハ契約也。○マコトハ。論語學而篇ニ。與朋友交不信乎。又外典ニ。君子交淡如水。又君子契如蘭ナトイハ。此世ノ約タニ如此。況於出世真友乎。○歌ノコトハ。要文ノ心ニテ分明也。極樂ニ生テ。閻浮提ニ契リシ友ノ實ノ志ヲ思ヒ出テ。淨土ノ蓮臺ヲ半座殘テ來ルヲ待シトナリ。

阿弥陀佛と申しつゝわをばはらめよて

浄土の莊嚴スるそとうた

○此歌夫木鈔釋教載之。○アミタフト申トハ。大師ハ日課六万遍弥陀經三卷ヲ修シ給ヒシカ終焉三年前ヨリ彌陀經三卷ヲ止テ称名七万遍トシ給フ也。○計トハ上人曰。念佛ハ。タク風情モナシ。唯申ヨリ外ノ事ナレト。又曰。念佛ニアラスハ生死ヲ離ルヘカラス。念佛ニアラスハ極樂ヘ生ルヘカラスモ也。此計ト云詞ハ餘行又助業ヲモ簡異スルノ詞也。唯称名ノ一行ヲノミ專ラ修行シ給フヲ云也。○勤トハ稱名ヲ云也。顯密勤修ノ法ニ依テ依正ノ莊嚴ヲ現スルコト種々ノ法アリ。依繁畧之。九卷傳ニ。三昧發得ノ御歌トテ此歌ヲ載ラレタリ。三昧發得并ニ依正之勝相拜見ノ事此傳ノ第七ト第三十七トニ載ラレタルカ如シ。○淨土ノ莊嚴トハ依正ノ二十九種等ナリ。○ウレシキトハ經曰。見彼國土極妙樂事心歡喜故云。大師モ莊嚴見佛ニテ歡喜シ給フト也。歌ノ意ハ上ノ註ニ分明也。此外大師ノ詠九卷傳十二問答等ノ中ニ少々有之。十卷傳ニ上人御童形ニテ皇圓ノ室ニ侍リ給ヒ早ク出家ノ本意ヲ遂ハヤト思召サル。カクテ六月中ノ申ノ日ト云ニ日吉ノ社ニ通夜シテ此事ヲ祈給トテ和クル。神ノ光ノ影ミチテ秋ニカハラヌ短夜ノ月。又社頭夏月ト云コトヲトテシメノウキ月晴ヌレハ夏ノ夜モ秋ヲツタノム珠ノ玉垣。大師ノ御歌此外定テ若干首アルヘケレトモ傳ヘ漏セルナラシ。

元久二年十二月八日 源宣

圓光大師行狀畫圖翼贊卷三十一

事義

傳本第三十一



上人の勸化一朝よそら四海よをよりぶさるるよ門
 弟れ中に專修に名返り本願よ事返よせて放
 逸乃よご返りすまのおほりたること此よより
 て南都北嶺の衆徒念佛れ興行をさぐらん上人の
 化導を障導せんといひ去御門院の御宇門徒ハ
 あやまちを師範よおほせて蜂起するよりきこ
 えかごをたはとれくく居らんよりほかに
 えん久元年の冬れ比山門大講堂の庭よ三塔會

○土御門院
 八人皇八十
 三代諱蘇仁
 後鳥羽院第
 一御子也御
 母在子号承
 明門院内大
 臣正一位源
 通親公之養

翼贊 卷三十一

子實法印能
國之女也

○大僧正真
性公後白川

院孫王三條
宮以仁王第

一子母公氏
部大輔忠成

ノ女白雲前大
僧正ノ入室明

雲大僧正承
仁親王等ノ

弟子契仲阿
闍梨灌頂ノ

弟子慈鎮前
大僧正重受

建仁三年八
月廿八日任

座主年三十
七鵬升一第

六十七世
○長兼卿本

名頼房父從
二位權中納

言長方卿母
少納言通憲

女也元久元
年四月十二

日轉左中辨
補藏人頭承

元三年四月
十六日任權

中納言建保
二年二月八

日出家法名
覺河

合して專修念佛を停止すべからず。座主大

僧正 真性 訖申々々

畫圖

○三長記云元久三年私云改元建永元年二月卅日辛巳晴今朝源空上人一弟二人為弘通念佛依謗諸佛諸教被勘罪名宣下中宮權大夫了其狀如此

元久三年二月卅日 宣旨

沙門行空忽立一念往生之義故勸十戒毀犯之業恣謗餘佛願違失念佛行沙門遵西稱專修毀破餘教任雅執遏妨衆善宜令明法博士勘申件二人罪名

藏人頭左中辨藤原長兼 奉

件兩人遵西者安樂房也。行空者法本房也。於行空者殊依不當源空上人放一弟了

五師申云源空佛法怨敵也。子細度々言上了其身並弟子安樂成覺住蓮法本等可被行罪科私云五師者興福寺之僧徒也

○上人相從門下トモカララ門徒門人論徒弟行事トイフ○蜂起ハ本作謹起史記ノ項羽本紀東方朔傳ナトナリ。注ニ如淳ハ謹起猶言

蜂起也。衆蠢飛起交橫若牛言其多也。索隱曰凡物之橫為牛亂飛テ四方ニハビコルヲ云又漢書高祖紀ニ盜賊鋒起注ニ或作蜂起後漢書光武紀ニ盜賊鋒起注ニ言賊鋒銳競起或作蜂喻多也○大講

堂及ニ塔ノ事寺院ノ中ニ見ユ當時此會合ヲ老若ノ集會ト名テ大事ニ臨ム時庭上ニ立談スルナリ古ハ三千ノ衆徒會合シテ破タル袈裟ニテ

頭ヲ裹ミ入堂棧トテ三尺許ナルヲ面々ニ突小石一ツヲ持テ尻懸並居テ弟子ニモ同宿ニモ聞シラレヌ様ニモテナシ鼻ヲ押ハ聲ヲツクリカヘテ

サテ新訟ノ趣キヲ僉議セシトナリ。後白河法皇ノ御前ニテ攝津ノ豎者豪雲ト云者ノ子レケルナト盛衰記ニ具ニ見エタリ○梁書云便

可自今停止○座主記云僧正真性建仁三年癸亥八月廿八日任座主年卅七臘卅一十一月廿二日轉大僧正元久二年十一月

廿八日辭座主建永元年十月十六日辭大僧正寬喜二年六月十四日於城興寺入滅九卷傳ソノ時ノ座主ハ真性宮ノ大僧正ナリト

上人此事波聞知てすゝめてハ衆徒の禁爵陶をや

とめ。とりぞきてハ弟子乃僻見をいひあらん

ためんよ。上人の門徒をあらめて七箇條の事を

あつて起請をたう。宿老あつらもぐら八十餘人
をえつひく連署せしめん。おぐ後證よそたふとれ
つら座主僧正よ進せらる。件起請文云

○九卷傳ニ新申ニヨリテ座主大僧正ヨリ。上人ニ御尋アルニ付テ。上人
起請文ヲ進セラル。其詞云トアテ。下ノ近目風聞等ト云狀ヲアケテ。
其次ニ七箇條ヲウラス。狀ノ文體今少委ニク。條目又文ヲ具ニセリ。交
名ハ畧之トアテ注セス。漢語燈ニ。狀及七箇條其文具ナリ。連署ノ交
名ハ粗傳文ニ同シ。○書經五子之歌ニ鬱陶乎予心。孟子離婁篇ニ鬱
陶思君焉。注云。思之甚。而氣不得伸也。氣ノ屈シテイキトホル云也。
鬱憤ナト云ニ同意ナリ。○僻見ハ僻ハ偏僻邪僻ナリ。邪見偏執ト云ニ
同意ナリ。○七箇條ノ正本嗟峨ノ二尊院ニアリ。此中ニ記スル所大ニ畧
セラル。但ツノ要ヲトハナリ。此條箇ノ趣面々違背スヘカラスト誓ハレケ
レハ起請文ト名ツクルナリ。惠心僧都四十一箇ノ起請ニ見ユナト云。此
類ナリ。神佛ニ家三國通用シテ。此事アル事。近クハ盛衰抄ナト。諸文
ヲ載タリ。慈慧僧正女難ヲカウフリテ起請文アリ。事十訓抄ニ見エ
タリ。○八十餘人。九卷傳云。連判之門人七十五人。同。傳漢語燈

録ニ八十五人。今傳ニ尊院ノ正本百八十五人ヲ記セリ。ハノ傳等或ハ
初日ヨリ一日二日ノ集會ヲ注セルナラン。日ヲ經テ追テ集來リケレ。都
テ百八十餘人ニ及フト聞エタリ。或ハ百ノ字脱セル歟。此傳ノ交名都テ計
ルニ八十八人アリ。○連署ハ下學集ニ連書ノ義也。韻會ニ署ハ書也。國語
ニ位之表也ト。人ノ名書ホドクニ次第シテ書連ヌルヲ云ナリ。白氏文集五
ニ差肩承詔旨。連署進封章ト

あまのひをすぐ門人念佛れ上人等にほぐ

○古ハ隱者ヲ呼テ總シテ上人ト云。抄。盛。囊。就中此頃ノ書記ノ中ニ往々
ナリ。若釋ノ人中妙好人人中上々人ト云ニ依ハ念佛ノ上人ナラ譚アリ
一いよぶ一句れ文義をうらむんずして真言止觀
を破し。餘の佛菩薩を謗する。こと。後。停止して
此事

一無智れ身をえらして有智れ人よ對し。別解別行の
輩にあひて。このとて諍論をいす事。を。停

止とるべき事

一別解別行のり人々對して愚癡偏執此心を正して本業を棄置せりと稱してあれらにこれを正さるべき事

一念佛門のりを正して戒行なりと号してを了らざる酒食肉淫すべからざる律儀を正し法を

造悪を正してこれ正して此の事法停止すべき事

一いふは是非をわきまざる癡人聖教を正して此師説法を正して正法を正して

此の愚人を迷乱するに法停止すべき事

一愚鈍れ身を正して唱導を正して正法を正して種々邪法を正して無智れ道俗法教

化して事を停止すべき事

一いふは佛敎よあはるる邪法を正して正法を正して師範の説と号するに法停止とるべき事

元久元年 甲子十一月七日沙門源宣 在判

○唱導ハ説法ノ導師ナリ第十七卷ニ注シヌ于時人皇八十三代土御門院之御宇上人年七十二也正本八年号月日ヲ一行ニ書シテ御名ヲ闕シテ月日ノ下ニ書ス支名ノ次第モ横ニ連署シテ一軸ノ卷物ナリ名ノ傍ニ冠書シテ日々ノ人数ヲ差別ス初日七日ニ信空感聖等

ゆりまてくゆくいづれのみをうたね
ふしひさゆきまをうたね
一帯のまをうたね
こころのまをうたね

ヲ上首トシテ。都テ五十人ナリ。次日八日ニハ。主碑玄耀澄西等ヲ首トシテ。凡六十人ナリ。最後九日ニハ。蓮慶上信等ヲ始トシテ。計ルニ七十二人ナリ。總シテ三日ヲ合スレハ。都テ一百八十五人ニ至レリ。傳文ハ。堅ニ次第シテ。イマ夕日別ノ人數ヲ差別セス。又彼此ノ支名ヲノ次第位署雜亂セリ

信空	感聖	尊西	證空	源智
行西	聖蓮	見佛	道直	導西
寂西	宗慶	西縁	親蓮	幸西
住蓮	西意	佛心	源蓮	源雲
攸西	生阿	安照	如進	導空
昌西	道也	遵西	義蓮	安蓮
導源	證阿	念西	行首	尊淨
歸西	行空	道感	西觀	尊成
禪忍	学西	玄耀	澄西	六阿
西住	實光	覺妙	西入	圓智
導衆	尊佛	蓮惠	源海	安西
教芳	詣西	祥圓	辨西	空仁
示蓮	念生	尊蓮	尊忍	業西
仰善	忍西	住阿	鏡西	仙空
惟西	好西	祥寂	戒心	顯願
佛真	西尊	良信	綿空	善蓮
蓮生	阿日	静西	度阿	成願
覺信	自阿	願西		

○信空漢語燈注云。法蓮房下注準之。○感聖錄云。感西定生房
○尊西錄云。相縁房○證空錄云。善慧房○源智錄云。勢觀房○

○行隆卿ハ
中山中納言
顯時卿ノ長男
母ハ右少辨有
兼ノ女也或説
寛曆二年十
二月廿九日
右大辨ニテト
按スニ浴承五
年造東大寺
奉行ノ時右大
辨ナリキ

見佛録云大和入道○導豆録云玄教房○導西録云教光房○
寂西録云眞阿彌陀佛○宗慶大系圖云式部大夫宗光男右衛
門佐有信孫宗慶得業光空上人源空上人弟子也○西縁録云
西縁近衛入道○親蓮宗派云信蓮隆寛弟子○幸西録云成覺
房○西意録云善寂房拾遺古徳傳云善緯房西意攝津國ニ於テ
誅ス佐々木判官沙汰○佛心或宗派云覺明房弟子○源蓮録
云信願房○欣西録云唯願房○導空或宗派云道空善惠房孫
弟奥州伊達一族也又正信房弟子有同名○導西録云安樂房
○安蓮録云如願房○行空私云法本房歟○學西録云此大ニ玄
耀等ノ五人ヲ列ス○導衆録云心性房○尊佛已上七日ノ集會也
○玄耀正本ニ冠書シテ八日トアリ○澄西拾遺古徳傳ニ禪光房
澄西伯耆國ニ流サルト○蓮惠録云證法房○空仁往生院四十八
日別時結衆ニ空忍相模三十八トアリ○戒心或宗派云覺明房弟
子私云右京大夫入道歟○緯空私云善信房歟○阿日或宗派
云隆寛律師弟子○蓮生録云法力熊谷○覺信録云尊性房
連署此交名かくれし。執筆右大辨行隆
息法蓮房信宣也

○諸人ノ名字ヲ注記シタルヲ交名ト云ナリ○法蓮房ノ傳第四十三
卷ニ見ユ凡此交名三日ヲ經テ記ス來ルニ隨ヒ名告ニ任セテ注シケレハニ
ヤ正本ノ交名一ノ手ノ執筆ニアラスザレバ制誡ノ條々ハ信空執筆セラレ
交名ヲ連署スル事ハ人々ノ自筆或ハ當座ノ傍人無筆ノ人ニ代テ書レト
見エタリ正本ノ交名文字筆畫ノ正シカラサルカ律々ナルハ是故ナルヘシ
或宗派云於ニ尊院制條御製作信空湛空等於上人御前同心
之趣各以自筆録法名書九卷傳ニ彼正文ステ二月輪殿ニ進シラカル
ト云今ニ尊院ニ在テ予モ亦拜見シキ又南都ヘモ送ラレケルニ興福
寺ノ中院ノ屋ニ今ニ現存セリトワ寺僧知足房某傳説セラレ

又座主ニ進しずる起請文云近日此風聞ぞいい
く源宣偏いニ念佛の教ををす久々餘乃教
法をそる諸宗ニ此りらわて凌夷ま諸行
ニ此よるをて滅亡たと云この旨は傳聞し心神
驚怖おそと此の緯山門よささるえ議衆徒は

緯山門よささるえ議衆徒

及て炳誠を加へざる一貫首へ申送らるる事
 此條一よの衆勸戒をそとせ。一よの衆恩をよるるこ
 ぬ。にそととて誨い。貧道此身をりらして忽よ山
 洛のいもとるにをよぶ。喜よるるハ。謗法の名誠
 づいて。ばく花夷此謗をそとめ殊ま一衆徒此
 糾断よあしゆん。争貪道乃慙歎をそとめん
 や。九弥隆の本願云。唯除五逆誹謗正法と念佛
 をすめん輩。ひる正法誠そらんや。僻説戒
 もて弘通し。虚誕をそとて披露せし。を糾断あ
 へし。炳誠あへし。望とくふなり。孫ふ不承ら。此
 等此子細先年沙汰の時起請を進平。其後
 だ變せし。さうひて陳じらるにあり。いへど
 巖誠とてくり重きれあひし。誓言状又再三よ
 をよぶ。上件乃子細。一事一言。虚言をそとて
 會釋をもちけん。毎日七萬遍此念佛。心なり。其
 利誠うしれい三途よ墮在して。現當二世乃
 依身法ひに重苦小沈てたぐ。楚毒をうけん。
 伏乞當寺此諸尊。滿山乃護法。證明知見し。た
 ちへ。源宣敬白取

元久元年十一月七日 源宣

畫圖

○座主ニ進セラル、起請文漢語燈錄ニ私云執筆宰相法印性覺也
 卜アリ一本ニ作○凌夷凌ハ陵ニ作ルヘシ漢書ノ成帝本紀禮樂志王簡

栖カ頭陀寺碑、文皆陵夷ニ作レリ漢書ノ師古カ注ニ陵ハ丘也夷ハ平也ト。山ノ漸マク崩テ丘トナルカ如ク物ノ漸々滅亡ニ及フヲ云ナリ。○管子ニ禮義廉恥謂之四維。四維不張國乃滅亡。○緯ノ事也。ト、ヨメリ。揚子雲カ甘泉賦ニ上天之絳查祖舟兮九卷傳及漢語燈ニ事ノ字ナリ。○議衆徒ニ及トハ議ハ會議ナリ上ノ三塔會合ノ評議ナリ。○炳誠ハ明ラカナルイニシメナリ。○貫首ハ座主ヲ云。一山ノ棟梁ナレハナリ。孔安國カ孝經序ニ顏回閔子者孔門三千人弟子貫首也ト。○衆勸トハ大衆ノ檢考ナリ。說文ニ勸校也。又勸ハ勸當也。大衆其罪ノ穢ヲ勸テ輕重ノ法ニ當ルナリ。唐書ニ軍中不暇勸當。○衆恩ヲヨコフトハ衆徒ノ評議ニ未第ノ非ヲ改メラルハ恩惠ノ至リナレトツ。○山洛ハ山上洛中ナリ。イキトホリハ漢語燈ニ禁ノ字也。○華夷ハ京イナカナリ。唐狄仁傑傳云天限華夷。○糾斷ハ明ラカナル判斷ナリ。糾ハ同糾察也。周禮ニ大司徒糾萬民。又云小宰糾禁。註云糾猶割也。察也。疏曰糾舉其非事已發者依法斷割之事未發者審察之。○僻說ハヒカメル邪說也。○虛誕ハ不實ノイワハリ也。劉越石詩序云知聃周之為虛誕嗣宗之為妄作。○陳ストハ敷告也。申述ルノ意ナリ。日本紀ニウストヨメリ。○嚴誠ハ急トシタルイニシメナリ。○重疊ハイヤカ上ニカサナル義ナリ。宋モリ高唐賦云交加累積重疊增益。又程方進傳ニ出タリ。ハロニ首尾ナルヲ云ハ善カ上ニ善心ナリ。○誓狀ハ先ノ起請文ナリ。誓狀ト云ニ同誓言ノ様ヲ書アラハスヲ云ナリ。再三ハ書ノ多方云。至于再至于三度度ノ心ナリ。○上件件ハ條件說文ニ分也。已上段々ノ子細ナリ。○依身ハ身ハ諸根四大五欲五苦等ノ依トコ也。○楚毒楚ハ鞭撻也。○當寺ハ獻山ヲ延曆寺トイハナリ。諸尊ハ中堂藥師佛ヲ始メ護法ハ山王七社等ニ至ニテト。満山ハ一山ヲスヘテナリ。

月輪殿ニハ事以歎終テ座主大僧云進せらる御消息云念佛弘通の間此事源宣上人の起請消息等山門ニ披露後動靜如何を不審如風聞者餘行をどうしべき。勸進ハ條不可然云此條よをきてハ善導ハ意此旨をのぶるに似たり。然而有趣甚深也。行者ねるふ趣。

○動靜如何ト今ニ躁動スル與靜謐ニ成タルニヤトナリ○風聞ハホノ
カニキト訓ス丈選沈休文奏彈玉源云風聞註善曰漢書尉佗曰
風聞老夫父母墓已壞削國語晉語曰風聽臚言於市註賈逵曰
風采也采聽商旅之言也此註ノ如クナレハ風聞トハトリキト云意
ナリ又公羊莊公元年傳風肯解曰風猶放也此注ニ依レハ風聞ハ放
意也九卷傳ニ風聞ノ事ニアリ一念佛ヲ勸進スル總シテ然ヘカラス
口稱ノ權說往生スヘカラスル故ニト二三餘行ヲ毀破スルアリ經論ヲ焚
燒シ章疏ヲナカシ失ヒ又餘善ヲモテハ三途ノ業ト稱シ犯戒ヲモテハ九
品ノ因トスト二三念佛ノ行人餘行ヲ停止スヘキ由ヲ勸進ノ條ナラ然
ヘカラスト云今ノ傳文要ヲ取テ記セラル此中ニ然ヘカラストハ山徒ノ
詞ナリ

抑諸宗成立の法をのく自解を專りして
餘教をなむこと世所私行の常也習先徳也故
實也これを異域よりとてへん月氏よハすれハ
護法清辨宜有也諍論震旦よハ又慈恩トレ

國ヲ疎ニテ異國異朝ト云
○月氏トハ西域記云天竺此云月也佛日既没諸教諸聖如月其五印土北廣南狹形如半月
○護法梵云達磨波羅清辨梵云波毘吠伽
○震旦或云真丹旃丹東方屬震是日出之方故云震旦
○慈恩妙樂ノ傳宋高僧傳及佛祖統

樂權實此立破是を我國よ尋せん弘仁の
代よ戒律大小乃ありとていありき天曆乃御宇
よ諸法淺深の談ありハ宗なきをいいて定準
あり。三國傳て軌範え。まづれどもありトて
末世の邪乱をかきて諸宗の對論をとりめ
れてよりこのり。宗論たゞく跡をけづら佛
法とれうために安全たり就中浄土の二宗よを
まてハ古來此行者偏よ無染無著此浄心法
して專修專念の一行よ住と。他宗よ對して
執論をこのり。餘教に比して是非を判せ
獨出離を秘とい。好く此往生をとり直道也

○有性無性
ノ論太平記ニ
此事ヲ載ス釋
書ト相違アリ

○ナレトモセストハ餘教ヲ何ノ事トモセス是諸宗ノ人師宗義ヲ成立
スルノ常ノ提ナリトワ○月氏ハ天竺ナリ地理ノ中ニ注ス○護法ハ法相
有宗ヲ弘メ清辨ハ三論空宗ヲ立兩宗互ニ諍テ終ニ止サリケレハ彌
勒ノ出世ヲ待テ此事タニスヘシトテイテ決斷ナカリシトナシ西域傳
ニ具ナリ僧尼ノ中ニ出セリ○震旦ハ大唐ナリ地理ノ部ニ注ス○慈恩
ハ法相ノ祖トシテニ乘真實一乘方便ノ教ヲ弘メ具ニ法華
玄贊ニテリ妙樂ハ
天台ノ師トシテニ乘方便一乘真實ノ旨ヲ示ス具ニ法華
記中ニテリ其二法華
ヲ釋シテ立破互ニ成シヌ大藏綱目指要錄云灌頂尊者為玄義文
句行于世謂之天台教宗也唐基法師述法華玄贊夕製畫講謂
之慈恩教宗也然春蘭秋菊各播清香今有傳習者各黨其宗不
本淵源互相破斥得不取西有道德者乎中又佛祖統紀ニ粗此義ヲ述
ラル○嵯峨天皇弘仁十年三月傳教大師大乘戒壇ヲ山ニ建シト欲
ス護命等ノ南都ノ諸師コヲ拒メリ第五卷並次上卷ニ粗注シヌ○村
上天皇應和三年八月二十一日ヨリ廿六日ニ至テ南北ノ諸師
清涼殿ニ集テ有性無性權實淺深ノ論談アリキ釋書ノ第二十五卷
ニ具ナリ○キラヒハ競ノ字ニテ我サキニナト諍フヲ云ナリ禪法此時ニ
イテ々宗ヲタテズサレ今ノ十宗ノ中ニ淨土ヲ除テ八宗トハ云ナリ淨土
ハ今ノアラワフ所ナレハナリ定準ハ定テレル作法ナリ○アノカシメ

ノ字ニテヘカタノ意ナリ○對論ハ宗々クラヘ合セテ勝劣ヲ論ス
應和ノ論談以來コレヲ禁制セラルトイヘリ是當ニ僧徒ノ諍論ノミニ
アラス顯負ノ檀家ニタ己カ患トシテ終ニ俗事ノ確執ヲ起ノ此アリ
藤文範南都ヲ荷擔セラル釋書資治表
及忠算ノ傳ナト即其事ナルヘレサレハ此
後宗論永止ラレケルトワ大原見聞ニ此時ヨリ天下ニ宗論ヲ禁斷
セラルト○雜染ノケカラハシキ執著ヲ拂テ清淨ノ一心ヲ澄シ我慢
偏屈ニ心ヲ散ササルヲ無染無著ノ淨心ヲ凝スト云ナリ善導大師正
雜二行ヲ判シテ十三ヲ得失ヲ舉テ禮讚
序云淨土ノ行人ハ雜緣亂動シ
心ニ輕慢ヲ生シ自障障他スル等ノ失ヲ離ル事ヲ得タリ略トハ即斯
謂歟○執論ハ偏執ノ諍論也異學異見ニトリアハサルハ善導ノ教亦
慈恩ノスメナリ

但私教歎法のたつゝい聊又其心たつゝありあ
らるゝの所謂源信僧都其往生要集乃中に三
重の問答をいづて十念に勝業をほひ念佛に
至要なる事これ釋よ結成なり。禪林に永觀德

○永觀姓源
氏ハ歳師事

禪林寺深觀
僧都十二出
家十八歸念
佛日課一万
後增六万日
別三時修弥
陀供養法四
十二歸洛東
康和之間撰
往生十因一
卷天永二年
秋疾十一月
二日沐浴而
念佛異香芬
郁中夜頭北
面西而寂紫
雲垂室
○勝如上入
教信沙弥事
粗釋書二載七
具二十因二注
サル

惠心よなるはつとていふとを。行淨業をせしむる。
撰とて後此十因其心あり一なり。普賢觀音
悲願をうんぐ勝如教信が先蹤を引く。念佛
の餘行よすべし。彼時諸宗は草。
惠学林をたう。禪定水をうめ。志つていへ
らる。惠心をもちめ。永觀をも罰。諸
教も滅する。これ念佛をさめたるなり。是
則世とれはよふなり。ゆへ也。

○聊公苟些ナト云意ナリ。第一卷二見エ。大底教ヲヒロメ。法ヲホムニ是
非得失ヲ辨シツノ勝劣ヲ沙汰スルモ又法門ノ習ナリ。サレハ念佛ノ法門
ヲ明スモ其心ナキニモアラストナリ。○彼集ノ下卷ニ諸行ノ勝劣ヲ判
スル意ノ云。只往生ノ業ニハ念佛ヲ最上トス。是一重ナリ。次ニ諸行ニ相
對シテモ念佛又最上ナリヤ。是二重ナリ。後ニ法華ノ一ノ言。佛ノ
德ハ偏教ノ禪定諸三昧ニ勝タリ。念佛三昧亦爾ナリヤ。是ニ
集ノ文相問答ハ只二重ナリ。委シク分別スレハ義ハ三重ニ勝劣ヲ示サ
レタリ。或ハ第八念佛證據門ノ解釋ヲ指ナラン。記ノ第七ニ三重ノ問答
六義ノ相對委シク分別セリ。又臨終ノ念相ヲ明シテ重々二問答シテ
十念ノ勝業ヲ顯ハセリ。○惠心ノ德行。本朝ニ溢異域ニ聞フ。其盛ナル
コト。上古ノ先聖ニモ恥ヘカラス。永觀又一時ノ名匠ナレト。其德イテタ
惠心ノ如クニアラサルトナリ。○行淨業ヲツケリトハ。德ハ惠心ニシカス
トイヘトモ。所修ノ行法ハ淨業ヲ專ニス。僧都ノ先蹤。相嗣ニ人ナカリシ
ヲ律師コレヲ戀テ。法脉相續リトソ。○普賢觀音ノ悲願ハ十因ノ中
第一ノ因ニ見エタリ。○勝如教真カ先蹤又第一ノ因ニアリ。先蹤ハ昔
ノアトナリ。揚雄カ文ニ。驚先蹤。梁簡文帝詩ニ。終夜慕先蹤。○慧
學林ヲナシハ。第五卷ニ見エ。○禪定水ヲタフハ。禪定ノツカナルコト水
ノ湛然タルカ如シ。經論ノ中ニ此説往々ナリ。

今代澆季よをよび。時鬪諍よ属して能
破所破とてに偏執よりたらし。正論非論とれ
喧嘩よをよぶ。三毒よりらに催し。四魔ほつてあ

りしつらひの流るるなり

○任彦升王文憲集序二百王澆季注二翰曰謂末世浮薄也○如來ノ滅後二千五百年ニ諸ノ執見オコリテ互ニ非ニ互ニ是又鬪諍コニ起テ時ニサカニナリ當時ソノ節ニアタリテ其時ノ内ニ入ルラ屬スト云也此等ノ説大集經ノ賢護分日藏分月藏分ニ見エタリ○宣華ハ日本紀ニナリドヨギト諱リ字彙ニ喧哀泣不止也又與諍同諍罵也華同諍々諍諍コレ物ノカシカマシキヲ云今俗ニ鬪諍ヲ云ハ物イヒアラフヒテカマヒスレキ故ニヤ蜀都賦ニ諍諍再沸○貪欲瞋恚愚癡トナ人ヲ損スル事毒ノ如シ○煩惱五蘊死天四トナ佛道ヲサヘテ行者ヲチヤテスラ魔トハ名ツクルナリ大論ノ第五ニ見エタリ

爰小僧幼年ノ昔より衰暮れ今よひしるすて自行をろそつれといふも往生後福よくうまひを罪業にそそいふも往生後福よくうまひをそそいふも四十餘廻れ星霜ををくりいふも

そそいふもいふもいふもいふも數百萬遍れ佛歩はたさる。頃年よりこれ。病せより命あやうし。歸泉らうまにあら。浄土の教迹。此時よあつて滅亡しんら。これをえんとも。地をささ。たへいそそいふもいふも。三尺れ燧乃霜肝をささ。一寸の赤燭じひ。天よあよきて鳴咽。地をたさきて慈念。何況上人小僧よをさきて出家の戒師たり。念佛乃先達たり。罪なるを。刑をよひま。たとめあつて重科より處せは法れ。身命を惜へ。小僧らりて罪をうく。師範のまら。後法くのりんとわらふ。

て浄土に教をまゝとて人にとれまふやくのゝ死

罪死罪殺白 取詮

十一月十三日專修念佛沙門圓證

前大僧正御房

○凡受戒シテ五夏ヲ滿スルヲ大僧ト云是ニ對シテ四夏ヨリ以下ハ小僧ナレハ律中ニ阿難攝衆無法迹葉訶言年少名義集第五殿下建仁二年御出家アリケレハ僧トハ云ナリ今此ニ小僧トハ御卑下ノ詞也強ニ律ノ大小僧ノ沙汰ニ及ハス○曲禮ニ人生十年曰幼○衰老ノ晚トテ四十以後ヲ云ナリ四十ヨリ血氣始テヲトロ素問ハ二十ノ後ヲ衰老ト云頌疏也心地觀經六云我觀身心念念衰老其息出已更不復入沈休文別范安成詩云及爾同衰暮此時殿下御年五十六系圖ナリ禮記ノ内則云五十始衰釋要鈔ニ五十已去並曰衰年ト白氏文集第五五十已後衰二十以前癡ト○四十餘回ノ星霜トハ星霜ハ序ノ中ニ見ユ此時御年五十六ナレハ十歳ハカリヨリ計レハ四十餘年ニナルナリ廻ハメクルトヨミテ度ノ字ノ心ナリ一年ヲ一廻トシテ云○頃年ハ近年ト云ニ同意也○冥途ヲ黃泉ト云

泉無相見也注ニ天玄地黃泉在地中故言黃泉總シテ人ノ死ト云ナリ白氏文集七云舊友零落半歸泉○史記ノ韓安國傳云提三尺劍取天下又漢高祖本紀ニ見ユ文選ノ注ニ吳季札劍三尺如雪霜如冰ト劍ヲ喻ルニ雪霜相ヲ用ユルコト其慄乎トシテ懼ルヘキニトレリ殿下イタク悲シ思召コト劍ノ肝ヲサスカ如シトワ○俗書ニ心臓寸ハカリニシテ其色アカシトイヘリ大部補注沈休文力鐘山詩ニ寸心於此足ト云是ナリ觀佛經ニモ肉團心トテ其形ニロクテ紅蓮華ノ如シトアリ第廿七禪問イキトホリ思食テ心ノホムラ色ヲテ赤キホノホ消ヤラストナリ○天ニアフキ地ヲタキハ悲シ切ナルカ顯ヒテナリ嘆天俯地叩頭打胸ナト云類ナリ嗚咽ハナキムセフトヨメリ陸士衡弔魏文帝文云氣衝襟以嗚咽涕垂睫而汎瀾注云嗚咽謂悲多不得言也愁悶ハウレヘモタユトヨメリ司馬長卿力長門賦序ニ別在長門愁悶悲思ト云ナケキテ絶入ナリ○濫刑ハニタレカハシキニラキナリ○科ハ條也品也ツミヲ斷罰ヲ加フルニ輕重ノシナアリ今若ツミナキニ重罪ノ科ニ行ハトナリ或ハ科ハトカト訓テ罪ノ深キヲ重科トモ云○死罪死罪トハ言トコ口過アラハ死罪ヲ賜ハレトナリ文選ニ上書並ニ表狀ノ類トナ此例アリ何レモ卑下ノ詞ナリ○前大僧正眞性座主ナリ

上人誓文りをよひ。禪問會通をまうけむ
まゝにせむ。衆徒に訶詔をまわにせり

畫圖

○會通ハト、コホリナク言開カレタルヲ云也。易云觀會通以行其典
禮

○公繼公實
定公ノ長男母
ハ西門院ノ女
房也。建永二年
四月右近衛
大將元大納
言貞應三年
十二月廿五
日左大臣トナ
ル

其後興福寺に鬱陶猶やま。同二年九月は蜂
起を以。白疏を以て彼状をくく。上人は
ひよ弟子權大納言公繼卿を重科の處でる
へきり訶申。これよはきて同十二月廿九日。宣
旨を下して云。頃年源室上人都鄙よあまひく
念佛をすむ。道俗に多く教化よれをいじく。而今
彼門弟に中。邪執の輩名を專修よこる
をらて。咎を破戒ようらんば。是偏り門弟
浅智らわたりて。かへりて源室が本懐よそ
じく偏執を禁遏乃制よ守といぬを刑罰
を誘諭に輩よまうするれと云。取詮
君臣の歸依あさかぬはり。このも門徒に邪
説を制して。どを上人よりけり。まはり利

畫圖

○白疏公上へ申達え訶狀ヲ云ナリ。和俗ノ文章ニ申狀ト云カ如シ。廣
韻云。疏記疏也。○禁遏ハフセキト、允ナリ。制ハ偏執ノ輩ヲ禁止スル
ノ勅命ナリ。官符ナトニ制可ト云制ノ字ノ如キ歟。○刑ハ戮也。人ヲ
戮ノ法也。罰モ同意ナリ。誘諭ハシラヘサトストヨメリ。涅槃經云。
若有罪咎善言誘諭不加其惡。白氏文集第三誠由陛下休明德亦
賴微臣誘諭。以此三言心ハタトヒ偏執ノ輩ヲ禁スルトモ。人ヲ進メテ善
ナラシムルヲハサト罪スヘカラストナリ

圓光大師行狀畫圖翼贊卷三十二

事義

傳本第三十二



專修念佛此事。南都北嶺の鬱陶^{うつろ}なりしをきく
 上人のへ申らるるじひ。それ謂^いある歎乃^{なげ}り謳^{うた}
 歌。衆徒^{しゆと}れいさなるに次第^{しだい}にゆるをたなり
 しくい。上人惣^{そう}じては生死^{しじう}をいひ佛道^{ぶつだう}よ入^い趣^すま
 いと此^{こゝ}別^{べつ}しては無智^{むち}れ道俗^{だうそく}男女^{なんにょ}れ念佛^{ねんぶつ}するにあり
 て諸宗^{しよそう}のちりしげとちるべし。聖^{せい}
 覺法^{くわくはう}系^{けい}に筆^{ふで}をさるる。先^{まづ}旨趣^{しゆすい}をのべられ
 たる状^{しやう}云^い

○鷲峰中天
竺王舍城東
北ニアリ。梵語
ニ耆闍崛此
方ニ雲鷲ト
云。山形勢鷲
ニ似。又靈仙
ノ所住トハ
名ツクト云
○舍衛正音
云室利羅筏
志底訛云舍
衛持言開物

謳歌八世ノ口遊ナリ。孟子ノ万章ニ謳歌者不謳歌堯之子而謳歌舜ト
と云流浪三界のうら。いひまれさうひよにまじ
まそく。釋尊れ出世よあはざり。輪廻四生のあ
ひまじつまの生後うけり。如來れ説法を
まのばらま。華嚴開講れじりるよまあど
らぬ。般若演説の座よえはくたうたう。就鷲峯
説法れよまのそま。鶴林涅槃のこぎりよ
まの。羅漢の舍衛の三億の家よやなごら
ん。去り地獄八熱のそこり。やとまごん
まの。くわいむべく
摠ニテ講説ヲナスヲ開講トイヘト。此ニテハ如來成道ノ最初ニ始テ
華嚴講説ノ會座ヲ開キ給フヲ云ナリ。○諸部ノ般若。一時一
アラス。サレハ演説ノ座ト云。○鷲峰説法ノニハトハ法華經ノ重
ニテトカレシヲ云ナリ。○鶴林ハ沙羅林ナリ。佛入滅ノ時此林樹
枝ヲ垂テ。如來ノ牀ヲ覆ヒ。其色憂フルカ如ク。變ニテ白キコト。鶴
ニ似タリ。サレハ鶴林トハ名ツク。後分涅槃。後拾遺ニ。法橋忠命。薪ツ
キ雪降ニケル鳥。へ野ハツルノ林ノ心コソス。續拾遺ニ。雙林入滅前大
僧正慈鎮。イカニセンツノ望月ツクモリヌル鶴ノ林ノ夜ハノ煙ニ。○舍
衛國王舍城ニ九億ノ家アリ。三億ハ佛ヲ拜シ。三億ハ只佛出世アリ
ト聞傳フ。三億ハ佛ト云名ヲタニキカサリキ。止觀四之
大論第九

新翻豊徳中
卯土北橋薩
羅國都城名
まはにいま多生曠劫をへても。びやれごま
人界よびやま。無量億劫をへてま。あひが
れ佛教よあへり。釋尊れ在世よあはざる事ハ。あ
まらりこくとも。教法流布の世よあは事。得
たらん。これよ。びな。たらん。同志あたる
かめ。うまよ。あは。へる。く。

○阿含經云。如大海中有一盲龜壽無量劫。百年一出。出頭有一浮木。只有一孔。漂流海內。隨浪東西。盲龜百年一出。擬遇此孔。其木西浮。龜或東出。圍繞亦亦。雖復差異。或復相值。凡夫漂流。五趣之海。還得人身。甚難。於此大莊嚴論云。我昔聞有一小兒經中說。龜值浮木。孔其事甚難。時此小兒故穿一板。作孔受頭。欲望入孔。水漂板。故不可得。值即自思。惟極生厭惡。人身難得。佛以大海為喻。浮木孔小。盲龜無眼。百年一出。實難。可值我今池小。其板孔大。復有兩眼。日百出頭。猶不能值。況彼盲龜。而當得值。即為說偈云。云是皆人身。得力多。今此二佛法流布。世二值力多。轉用。若心地觀經。第二依。八今見大聖。牟尼尊。猶如盲龜。值浮木。ト説ケリ。法華妙莊嚴等ノ經説亦亦也。法華二八一眼ノ龜ト云ヘリ。要集達玉葉集ニ。高辨上人。メシ井タル龜ノウキ木ニアフナレヤ。メメタエタル法ノハニ舟

ワ朝^{つう}ノ佛法ノ流布^{りゅうふ}ワ事^{こと}ヲ欽^{おん}明天皇^{てん}御^み人^{にん}乃志^のたを志^しり。めして十三年。乙卯のえさる。此^{こゝ}ハ冬十月一日。くつめて佛法^{ぶつぽう}より

志^し。それよりさきよ。如来^{にがひ}ハ教法^{きょうぽう}を流布^{りゅうふ}せり。い^い。昔^{むかし}提^{だい}の覺^{かく}路^ろいよき。ゆるゆるにり。つ^つい^いれる宿^{しゆく}縁^{えん}よ。了^{りょう}る^るい^いれる善^{ぜん}業^{ごう}よ。りて。佛法^{ぶつぽう}流^{りゅう}布^ふハ時^{とき}よ。じや。れて。生死^{しんじ}解^げ脱^{だつ}の^ごら。をき^をく^く事^{こと}を^をら^らる^る。ま^まあ^あひ^ひく^くて。あ^あハ事^{こと}得^えた^たら。い^いづ^づく^くに。い^いづ^づく^くや^やこれ^{これ}ん^ん。と^とら^らる^る。今^{いま}此^{こゝ}或^{ある}ハ金^{きん}谷^{こく}の^の花^{はな}を^をま^まて。あ^あそ^そび^びて。遅^{おそ}こ^こた^たる^る。春^{はる}は^は月^{つき}を^をむ^むし^しれ^れ。と^とら^らる^る。或^{ある}ハ南^{なん}樓^{ろう}よ。月^{つき}を^をあ^あら^らる^る。漫^{まん}こ^こた^たる^る。夜^よは^は夜^よを^をいた^{いた}づ^づに。あ^あら^らる^る。或^{ある}ハ千里^{せんり}の^の雲^{うみ}よ。く^くせ^せて。山^{やま}の^のう^うき^きを^をと^とら^らて。歳^{とし}は^はな^なら^らる^る。或^{ある}ハ萬里^{まんり}ハ^ハな^なら^らる^る。

くひくぐとれいるるびをとりて日哉と云ひ。或ハ
巖寒よこなり哉志のまきて世路をもちし。或ハ炎
天よあせをのぶひく利養哉と云ふ。或ハ妻子
眷属に纏ハ社て恩愛乃きびなきわかつて
或ハ執敵怨類よあひて瞋恚ハはじりやし
事なり。惣としてかくれくくして晝夜朝暮
行住座卧時としてやし事なり。たゞほしき
ありありあくまて三途ハ難の業をくまぬ。ま
まいある文よハ。一人一日中八億四千念念中
所作皆是三途業といへり。かくれくくして昨日
まひくぐにまぬ。今日ま又まひくぐにまぬ。

いまいたひくぐにまぬ。いまたひくぐにまぬ。
す。とまあしたよひくぐにまぬ。棠花ハよべの風
よらりやとく。ゆよべよびと命露ハあした乃日
にまぬ。をくくしてはひりさう
えん事哉と云ひ。こまぬさうさうして久く
あ〜ん事をねまぬ

日本紀ニ御宇ノ宇ヲアメノシタシロシメストヨマセタリ。○十三年三ツ
ノエサルノトシ等トハ水鏡ニ天竺ヨリ。モロコシニ佛法ツタハリテ三百
年ト申シ。百濟國ニツタハリテ。百年アリテソコノ國ヘワタリ給ヘリシ
ト云。推古天皇三十二年勸勒奏セラル。詞同之。日本紀釋書並平氏
傳ニ見エタリ。○法性ノ一理ヲ覺ル其智惠ハ涅槃ニ至ルノ道路ナリ。菩
提トハ梵語此方ニ八道ト云。即佛智ノ異名ニシテ。又覺路トモイフ。○
朗詠集云。金谷醉華之地。華毎春勻而主不歸。南樓翫月之人。月
與秋期而身何去。管三。金谷ハ晋書ニ石崇カ家ニ金谷園アリ。此園

貴シテ金ヲ布テコレヲ買ト。苑植梅樹求ケレハ又金花苑ト云初學記
曰金水流出故曰金谷大明一統志云金谷園河南府在府城西
一十三里地有金水自太白原南流經此谷晉石崇因川阜造園
館文選ノ善注鄴元水經注ヲ引リ其說同之遲々ハ春ノ日ノツ
ク旋リテ永キヲ云万葉ニ宇良宇良ト訓ス歌ニ宇良宇良余照
流春日余比婆理安我里トヨメリ詩經ノ出車ニ春日遲々傳云遲
遲舒緩也新古今ニ紀貫之ワカ心春ノ山ヘニアクカレテナカナカレ日
ヲケフモクラシツ南樓ハ晋庾亮字元規南樓ヲ起テ月ヲ翫ヘリ
文選謝觀詩ニ夜登庾公之樓月明千里劉元叔詩ニ南樓月下
擣寒衣一統志中南樓有二一在黃鵠山頂名白雲樓一在武昌
縣今縣城樓是也晋庾亮領武昌時佐史殷浩輩乘秋夜共登南
樓俄而亮至諸人將避亮曰諸君少住老子於此興復不淺便據
胡床與浩等談詠唐李白詩ニ清景南樓夜風流在武昌庾公愛
秋月乘興坐胡床漫々ハ秋ノ夜ノナガナガシキヲ云魏文帝寡婦賦
ニ歷夏日兮苦長涉秋夜兮漫漫○カセキトハ錄ニ鹿ノ字ナリ日
本紀ニ白鹿ヲシラカセキトヨメリ拾玉集ニ隆寬律師尸レハテカ
セキカワノトミエマヘキ草ノ中ヨリワシノ山風山家集西行法師
山フカニナルハカセキノケチカサニ世ニトヲサカルホトツニラル
○イロクツハ鱗ノ字魚類也和名鈔云鱗和名伊呂久須ハ伊
呂古○或ハ嚴寒ニコホリヲシノキ等トハ大經云結衆寒熱與痛共
居○キツナハ絆ノ字ナリ絆ハ馬ヲツナク綱也繫足曰絆繫首曰羈
○恨ステカタクテ怨ヲナスヲ執敵ト云ニヤ錄ニ讐敵トアリ讐
ハ仇也怨類ハアタスルヤカラ一ニアラヌナリ○アル文ハ十疑論ニ
惟無三昧經ヲ引リ安樂集ニ淨度菩薩經ヲ出セリ其說一同
ナリ○榮花ノ字ハ素問ニ出彼第一卷云春三月此謂發陳天地
俱生万物以榮夏三月此謂蕃秀天地氣交万物華實班孟堅力
答實戲ニ朝為榮花夕為顯類拾玉集厭離百首ノ中ニ春慈鎮夕
夕才モハ風ニツホトノ露ノ身ハ何カハ花ヲヨ野ニニルラン秋ハカナキニ
カサ子テ物ノハカナキヤ風ノマヘナル權ノ露○ユフヘニスフ命露ハ等ト
ハ大集經云今日已過明日已來今生已過後生已近身如燈火隨
風易滅命如朝露向日易消涅槃云觀是壽命如朝露李陵云人
生如朝露何久自苦新古今ニ前大僧正慈圓ヨモキウニイツカシ
クヘキ露ノ身ハケフノタクレアスノアケホノ續古今粟田閑白朝
顔ノアシタノ花ノ露ヨリモ哀ハカナキ世ニモフルカナ○ツ子ニサ
カエノ事ヲオモヒ常ニアラン事ヲオモフトハ是上ヲ承テ花ツ子
ニサカヘ命ツ子ニアレカシト思フトナリ

あるあひび。無常は風ひらきびふきて有為は
はゆたぐくまえぬまひ。これを曠野とす。これ
をことを此山にをくる。かぐひはあまこけの
まゝりうけを我たま志る。獨たびけうにま
よふ。妻子眷属の家よあ我らもこのれは七珍
萬寶はくろにこそまごも益もたなり。まご身
よまごぶまのハ後悔乃涙也。はあま閻魔の
廳よひらぬまご。はこれ浅深をさるめ。業は輕
重をうんがへる。法王罪人よこひていく。たん
ら佛法流布れ世にびよれて。だんを修行せし
ていざに歸りきたるや。この時よまごまご
いざこころをんとする。とこやうり出要はと
めて。びなり。と三途よ歸る事れ。此

○守屍之鬼。
夫木民部為
家イツミテカ
カタチニヤトル
ミシ井ノハナレ
ヌホトラアリト
タノミン

○無常ノ風ハ三教指歸云無常暴風不論神仙○有為ノ露ハ金剛
經云有為法如露扶木他阿上人草ノ葉ノ露ニコノ身ヲクハラレハガ
セノミナルイノチナリケリ新古今蟬丸秋風ニナヒク淺チノスエ
コトニヲク白露ノアハレ世中○曠野ハ日本紀ニアラノト訓ス西行
法師ノ宮川百首歌合ニハカナシヤアタニ命ノ露キエテ野ヘニヤ
タレモヲクリヲカレン○カハ子ハツ井ニコケノレタニウツモレ等トハ
往生因云形無常主只有守屍之鬼神無常家獨躰中有之旅大
經下云轉質其身改形易道所受壽命或長或短魂神精識自然
趣之拾玉集ニ答ヲヨメルニ慈鎮昔人ウツモレ名ヲウレシトヤ答ノ
下ニモ今日ハミルラン千載集ニ民部卿成範鳥部山思ヒヤル
コソ悲シケレ獨ヤ答ノ下ニクナニ○悲華經云妻子珍寶及
王位臨命終時不隨者大集經心地觀經又此說アリ○廳ハ屋
也古者治官處謂之聽事毛氏曰聽事言受事察訟或云今稱
遣非違使居所也○法主罪人ニトヒテイハクトハ正法念經ナト
ニ見エタリ

ともく一代諸教れうら。顯宗密宗大乘小乘。權
教實教論家釋家部八宗より此義萬差
り法くわらく或ハ萬法皆空乃宗をとき
或ハ諸法實相れ心をあし。或ハ五性各別の義
を了して或ハ悉有佛性乃理を談し。宗こよ究竟至
極れ義をあしそひ。各こよ甚深正義れ宗を論じ
これこそ經論れ實語れ也。如來の金言也。或ハ
機をさうのへくこ此をさ記。或ハ時をさうてこそ
成をさうへ給へら。いつれあうといひさうよ。こそ
よ是非をりきよへか。うこそ教こ此も教。た
ぐいり偏執をいづく事なり此說れごとく修行
せし。え那ししくも生死をさ度とべし。法
のしく修行せし。こそになりも菩提を證得
とへし。修せ所しついでに是非論じ
たさへし同志ある人のいふれ淺深を論じ
志ある人れ。志乃好惡をいふんごとく
たぐすべし。修行とべし。いひまも生死解脱
のこらなり。あつるよ。いひまも此を學する人の
こ此をさし。こそ。こそ。法誦とら。人いひ此をさし。
愚鈍のそれら。此うためによ。いひまも。淺
乃身こそ。あつるよ。いひまも。一法
よ。これをさし。切をいひまんとす。此れ。すれ。は。諸

○蓬萊平州
記云蓬萊山
對東海之東
高一千里周
遍五千里外
別有圓海繞
山海水正黑
而謂之冥海
無風而洪波
百丈不可得
往來上有九
天真王宮蓋
太山真人所
居惟飛仙能
到其處耳山
海經云蓬萊
山在海中上
有仙人宮至
皆以金玉為
之鳥獸盡白
望之如雲在
渤海中也方
丈瀛洲皆海
中ノ仙居ナリ已
上ノ三山或同
處或異處處
々ノ説不同ナ
リ

宗れあつそひたぐひよきとるひろく諸教よ
りりて義を談さんとなりへハ二期乃いのちこそ
やと。これ蓬萊方丈瀛洲といぬなるこの
山よこそ不死のくもりありときけ。れを服
してまれいのち波のべて漸た習々やと思へ
らる。たけぬぬまきこまねえはさるつよ
秦皇漢武ときさるる御門。れをきて
かみの孫りはかりたり。かとも童男水女
ふよれうちにして年月波をらるき。彭祖の
七百歳乃法びり。ごりにていまれ時りは
ふん

○万法皆空ハ般若ノ所説ナリ。三論宗サカンニ此旨ヲ談ス。諸法
實相ハ天台華嚴等ニ廣ク此旨ヲ明ス。五性各別ハ法相宗ニ此義
ヲ述ラル。悉有佛性ハ涅槃經ニ此趣ヲ説○過度ハ度出也大經 苦
海ヲ起出ル也○目シ井耳シ井ハ盲聾ノ字ナリ○蓬萊方丈瀛洲
地理ノ中ニ注ス海中ノ仙居ナリ○カレヲ服シテモア
レトナリ。録ニハシテモアレトアリ。竹河ニトモレカクモ。古今ニ藤原ノ
タノユキ。君トイハハ三ニレミスレフ子ノメツラレケナク萌ル我コヒ
○白氏文集第三云。海漫々直下無底旁無邊雲濤煙浪最深處人
傳中有三神山山上多生不死藥服之羽化為天仙秦皇漢武信
此語方士年々采藥去蓬萊今古但聞名煙水茫茫無見處海漫
漫風浩浩眼穿不見蓬萊嶋不見蓬萊不敢歸童男水女舟中老
徐福文成多誑誕三秦記拾玉集ニ慈鎮ワカ戀ハカメノ上ナル山ナ
レヤ。名ヲ八聞トモ見ルコトモナシ。ハ今ノ兒ワゲニ結タル頭ノ如ナル
ヲ云ナリ。詩經國風甫田ニ總角北兮。注聚兩髦也。史記始皇本紀云。
齊人除市等上書言海中有三神山名曰蓬萊方丈瀛洲仙人居
之請得齋戒與童男女數千人入海求仙人。注云。太原曰真人茅
盈內紀曰。始皇三十一年九月庚子盈曾祖父蒙乃於華山之中
乘雲駕龍白日升天先是其邑謠歌曰。始皇聞謠歌而問其故

父老具對此仙人之謠歌勸帝求長生之術於是始皇欣然乃有
尋仙之志本紀云三十七年方士徐市等入海求神藥數歲不得
費多恐譴乃詐曰蓬萊藥可得然常為鮫大魚所苦故不得至願
請善射與俱見則以連弩射之始皇夢與海神戰如人形問占夢
博士曰水神不可見以大魚蛟龍為侯今上禱祠備謹而有此惡
神當除去而善神可致乃令入海者齋捕巨魚具而自以連弩侯
大魚出射之自琅琊北至榮成山弗見至之眾見巨魚射殺一魚
遂並海西至平原津而病云七月丙寅始皇崩於沙丘平臺漢武
內傳云漢武帝好長生之術求道西王母遣使為帝報曰七月七
日我當暫來帝至日掃宮掖之內設坐殿上王母即至也云神仙
傳云蓬萊山黃金白銀以為宮闕王母居之史記孝武本紀云孝
武皇帝初即位尤敬鬼之祀用李少君之語遣方士入海求蓬萊
仙乃不能至得云焉又封禪書載其事繁滋白氏文集第四有反魂
香降李君魂事○列仙傳曰彭祖服菊長壽其年七百餘歲顏色
壯而如十七八歲也

曇鸞法師也申しし人々そ佛法のそと後
まゝ先づいふ人のいふらあゝ後期一が

○菩提流支
此云道希唐
高僧傳第二
二見エタリ

そそ佛法をなすらんがために長生の仙の法を
けしとたよひなき時よ菩提流支と申三藏
ありくま曇鸞のれ三藏の御もへよ南うて
申給へうハ佛法れ申よ長生不死の法これと
乃仙經（三）よすぎたるあやとよひ給ふれん三
藏地にはたなき後らまきての給くこの言よ
いづれ處よる長生の法あらんたよひ長年後
得て志んく志れ給もはるよ三有り輪廻
すとの給てよれら観無量壽經をばけりて
大仙れ法也これよらて修行すまらんばつれよ
生死を解脱とてよとの給き曇鸞これをばた

へて。仙經をくらしやしらに火よやまてこれをすし。
觀無量壽經よもきて浄土此行をきく。後ま。
そのくらし曇鸞道綽善導懷感少康等より
いりやまて。これをくらしをくらし。後ま。くらしを
わらひて。いのちをのべて大仙の法候らしんこ
れまぬ。又道綽禪師乃安樂集にも。聖道浄土
此二門をききて。後ま。くらし心やま。

○佛法ヲナラハンガヌメニ等トハ拾五集厭離百首歌雜五十首ノ
中ニ慈鎮タツチ入ミコトノ道ヲシラスニ雲井ノ鶴ニノルヨシモカナ
續高僧傳六ニ鸞曰。欲學佛法。恨年命促減。尋致書通問。陶及屈
山所接對。欣然便以仙方十卷。用訓遠意。行至洛下。逢中國三藏
菩提留支。鸞往啓曰。佛法中頗有長生不死法。勝此土仙經者乎。
留支嘆地曰。是何言歟。非相比也。此方何處有長生法。縱得長生
少時不死。終更輪迴。三有耳。即以觀經授之。曰。此大仙方也。依之
修行。當得解脫。生死鸞尋頂受。所贊仙方。並火燒之。自行化他。流
靡弘廣。略取瑞應傳新修傳等亦同 ○コノ方トハ穢土ヲサシテ云○佛ヲハ仙ト云コ
ト經論ノ中ニ往々ナリ。佛經ニナ大仙ノ法ナル中ニ無量壽經ヨリ真
ニ不老不死ノ道ナリ。此經ヲ授給ヘル。良ニユヘアルニヤ。禮讚中夜偈
云。阿彌陀仙兩足尊。○ソノ三千ハ鸞道綽等ノ古德ノ遺風ナリ。末世ニ
ソレヲ思ヒテトナリ

その聖道門といぬし。穢土ありて煩惱を斷し
て菩提よきも也。浄土門といぬし。浄土にいま
れてくこりて煩惱を斷し。菩提よきも也。
いまこれ浄土宗にたみえてこれをいへ。又觀經よ
あふ。くらし業因一よあり。三福九品十三
定善。それ行志れくこりわのまて。その業
くらしくよはくこりわのまて。くらし定善十三觀と

一、日想。水想。地想。寶樹。寶池。寶樓。花座。像想。
 真身。觀音。勢至。普觀。雜觀。之也。此は散
 善。三福といふ。一、孝養。父母。奉事。師長。慈心
 不殺。修十善業。二、受持。三歸。具足。衆戒。不
 犯。威儀。三、發菩提心。深信。因果。讀誦。大乘。勸
 進行者也。九品の内の三福は業を開してその業
 因にあつたはぶさしての觀經よ見えたは惣として
 こまをいへい。定散二善れ中にを我も往生の
 行はあるべし。此よありて或はいひまに
 あれ。有縁の行よたをむきて功をさして
 心のいふ法よありて行をさしていひ。これこそ
 を往生はさるる。此にこそいひをたす事
 ちうま。いまもさるる。自法よはきて。此を
 いふ。よまよい。由定善れ觀門はすくにつくあり
 て十三あり。散善の業因はちうま。よつこ
 九品あり。その定善れ門よい。衆人こそ此れすれハ
 ち意馬あましく六塵の境にたす。のれ散善の門よ
 のぞもんとす。又心猿あまんと十悪れえ。これ
 ち。此れをさして。此れも得ど。此れを
 さめんこそすれ。此れもあま。下三品の業因
 をえんこそ。十悪五逆れ衆生。臨終よ善知識よあ
 いて。一聲。十聲。阿弥陀佛れ名号。これへて往生

一、日想。水想。地想。寶樹。寶池。寶樓。花座。像想。
 真身。觀音。勢至。普觀。雜觀。之也。此は散
 善。三福といふ。一、孝養。父母。奉事。師長。慈心
 不殺。修十善業。二、受持。三歸。具足。衆戒。不
 犯。威儀。三、發菩提心。深信。因果。讀誦。大乘。勸
 進行者也。九品の内の三福は業を開してその業
 因にあつたはぶさしての觀經よ見えたは惣として
 こまをいへい。定散二善れ中にを我も往生の
 行はあるべし。此よありて或はいひまに
 あれ。有縁の行よたをむきて功をさして
 心のいふ法よありて行をさしていひ。これこそ
 を往生はさるる。此にこそいひをたす事
 ちうま。いまもさるる。自法よはきて。此を
 いふ。よまよい。由定善れ觀門はすくにつくあり
 て十三あり。散善の業因はちうま。よつこ
 九品あり。その定善れ門よい。衆人こそ此れすれハ
 ち意馬あましく六塵の境にたす。のれ散善の門よ
 のぞもんとす。又心猿あまんと十悪れえ。これ
 ち。此れをさして。此れも得ど。此れを
 さめんこそすれ。此れもあま。下三品の業因
 をえんこそ。十悪五逆れ衆生。臨終よ善知識よあ
 いて。一聲。十聲。阿弥陀佛れ名号。これへて往生

○雄俊、唐高僧傳廿四及瑞應戒珠等往生傳三載アリ

此と云く我をいひて我をいふと我らにあらざるにあらざらんや。その釋の雄俊といひて人ハ七度還俗の悪人なりといひのちをいひてのち獄卒閻魔の廳庭より升りてゆきて南閻浮提第一の悪人七度還俗乃雄俊ありといふなりと申しも我れも雄俊申すといふく。いま在生の時觀無量壽經を三讀しん。五逆六罪人阿弥陀ほらけの名號を十聲とて入て極樂に往生すと云ふこと。いま我れもいひて我れ七度還俗といふともいひて五逆をいひて我れ善報すくぬといふこと。念佛十聲よすぎたり。雄俊も地獄よたらん三世に諸佛

○楞嚴先徳ハ惠心僧都ヲ云ナリ。明匠記云是有前後前惠心後都率覺起云

妄語のいふに我ら我れと高聲よはけびりん。法王ハ理り我れてたよのうち我れが母とて我れをいひて我れをいひよらて金蓮よのせていひて我れをいひんや七度還俗りをいひて我れをいひんや一形念佛せんをいひ男女貴賤行住座卧臥え我れをいひ時處諸縁を論じて我れ修すりにくかきと乃至臨終よ往生を願求するにそのたよらなるなりと。楞嚴先徳のうまを我れ我れをいひんや。又善導和尚これ觀經を釋しての我れをいひて娑婆乃化主。その請よらるゆへよ。ひろく浄土に要門をひらき

安樂能人別意の私願をあらはす。その要門と
いふは、これらに觀經に定散二門是也。定は
れられたるをひきかきやめてきて心をこらぬ。散は
すなはち悪を廢して善を修治。六の二行を
ぐくむ。往生をのみめ候ふ也。私願といふ。大經
よらぐくむ。一切善惡乃凡まじひありて
減らざるを。これ阿彌陀佛に大願業力に乗じて
増上縁とせ候といぬことなり。又ほこれの密意私
深みて。教文にあらざり。三賢十聖をこらぬ
てうらぬ。如くもよあはれいんや。わまは信外の
輕毛也。はらに肯趣を志んや。あひいてはん
これハ釋迦のこれ方りて發遣し。弥勒はうれ
きよより來迎し。如くもに居わうことによ
る。あより來迎し。今んやといへり。これん定善
散善私願の三門をたて候へり。その私願といぬ
ん。大經云。設我得佛。十方衆生。至心信樂。欲生我
國。乃至十念。若不生者。不取正覺。唯除五逆。誹謗
正法。といへり。善導釋し。ての如く。若我成佛。
十方衆生。稱我名号。下至十聲。若不生者。不取
正覺。彼佛今現在。世成佛。當知本誓。重願不虛。
衆生稱念。必得往生。云。觀經に定散二門をこら
をいりて。佛告阿難。汝好持是語。持是語者。即

安樂能人別意の私願をあらはす。その要門と
いふは、これらに觀經に定散二門是也。定は
れられたるをひきかきやめてきて心をこらぬ。散は
すなはち悪を廢して善を修治。六の二行を
ぐくむ。往生をのみめ候ふ也。私願といふ。大經
よらぐくむ。一切善惡乃凡まじひありて
減らざるを。これ阿彌陀佛に大願業力に乗じて
増上縁とせ候といぬことなり。又ほこれの密意私
深みて。教文にあらざり。三賢十聖をこらぬ
てうらぬ。如くもよあはれいんや。わまは信外の
輕毛也。はらに肯趣を志んや。あひいてはん
これハ釋迦のこれ方りて發遣し。弥勒はうれ
きよより來迎し。如くもに居わうことによ
る。あより來迎し。今んやといへり。これん定善
散善私願の三門をたて候へり。その私願といぬ
ん。大經云。設我得佛。十方衆生。至心信樂。欲生我
國。乃至十念。若不生者。不取正覺。唯除五逆。誹謗
正法。といへり。善導釋し。ての如く。若我成佛。
十方衆生。稱我名号。下至十聲。若不生者。不取
正覺。彼佛今現在。世成佛。當知本誓。重願不虛。
衆生稱念。必得往生。云。觀經に定散二門をこら
をいりて。佛告阿難。汝好持是語。持是語者。即

是持無量壽佛名。云云。此とれはらるるの私願の
るるなり。又た好しき經の真身觀よ。亦隨身
色如金山。相好光明照十方。唯有念佛蒙光攝。當
知本願寂為強。云云。又此とまの私願のゆへなり。
阿彌陀經よいよく。不可以少善根福德因緣得
生彼國。若善男子善女人。聞說阿彌陀佛。執持
名号。若一日。若二日。乃至七日。一心不乱。其人臨
命終時。心不顛倒。即得往生。云云。此とまの文より。
六方よをのく。恒河沙の佛あり。あつて。廣長れ
舌相をいづて。あまよひく三千大千世界にたふし
て。誠實れとたり。信ぜよと證誠し。強へり。此とれ

○寶篋三昧經三卷一名
十方現在前
立定經後漢
月氏國三藏
支婁迦讖譯
佛說般舟三
昧經一卷同
譯

○五臺山大
聖竹林寺山
ハ嘉興府内
ニアリ大明
○清凉山如
諸文者五臺
清凉同處異
名ト聞エタリ

又此とまの私願のゆへ也。又般舟三昧經よいよく。
跋陀和菩薩阿彌陀よといひていよく。いづれも法
を行して。かれとまのまじりて。阿彌陀ほ
とけの終る。わがまのまじりて。來生せんとなせりんも
たはよに我名を念ひて。居ひしとれ。まじりて。乃
て。いづて。わがまのまじりて。來生せんとなせりんも
終る。又五臺山の大聖竹林寺に記りいよく。
法照禪師。清凉山よのぼりて。大聖竹林寺に
いづれ。二人の童子あり。一人を六善財とい
ひ。一人を八難陀といぬ。これ二人の童子。法照

若依大明一
統志者清涼
山在府城安
府東北

禪師をくらびきて寺乃くちよいきて漸く
講堂よりりてこれハ普賢菩薩無數乃
眷属り圍繞せりて座一孫ハ文殊師
利ハ一萬ハ菩薩ハ圍繞せりて座一孫ハ
法照礼してといひてよんりて云未法の九支
ハいかに法を修すべき文殊師利答ての孫
くくらんぢらすぐよ念佛せよいよはくくく是
時也と法照又といひて申らくもまにいはれを
念ずべきと文殊又のうはくくこれ世界後す
て西方り阿弥陀佛ありはくくこれ孫ハ
ちらん願うくありやんぢらすぐよ念

すへーと大聖文殊法照禪師よまれありの
孫ハ事也すくひろくこれをしん諸教
よあまひく修する法門也はぶさにあまひ
いよあまひ

○安樂集ニ諸凡夫心如野馬識劇猿猴馳騁六塵何曾停息大
般若五百六十八云飄忽不停如風野馬心地觀經八云心如猿
猴遊五欲樹不暫住故云○井テハ將字ナリ日本紀等万葉二章トモ書
タリ詩經ノ氓ニ以爾車來以我賄遷トモアリ伊勢物語ニ井テイキ
ケリ又源氏ニ往々ナリ○理ニオレテハ第二卷ニ注シヌ○横川ヲ首
楞嚴院ト云源信此ニ居給フ故ニカクハ云ナリ往生要集下卷ノ本ニ
書置給ヘリ○觀經ノ釋ハ玄義分也○娑婆ノ化主トハ此土教化ノ
法主釋迦也○安樂ノ能人トハ浄土能化ノ大人弥陀ナリ能化ノ二
字對映シテ互ニ顯ハセリ○密意ハ心ノワコイナリ○菩薩ノ位階五
十二位アリ最初ノ十信ニサへ入給ハサルヲ信外ノ凡夫ト云ツノ境
界心ノ定マラヌ事カ口キ毛ノ風ニ隨テ東西ニ飛カ如シト瓔珞
經ニ説レタリ王子淵力得賢臣頌ニ翼乎如鴻毛遇順風○發遣ハ

ヤリツカハスナリ。使ヲ差テ馳ヤルヲ發遣ト云コト。諸書ニ往々ナリ
○經ノ真身觀ニトハ。此文日中ノ讚文ナレトモ。真身觀ノ意ヲ讚述
セラル。故本ニ從ヘテ經ト云ナリ。此例處々ニアリ。或ハ真身ノ釋ニハト
云ヘキヲ。字ノ落タルニヤ。○法照禪師一旦僧堂ニ於テ食ニ給ニ
鉢中ニ五色ノ雲アリ。雲中ニ寺アリ。金柱ニ大聖竹林寺ト題セリ。
聖衆莊嚴淨土ノ勝相アリ。後ニ五臺山ニ上テ。彼寺ニ至ルニ。前ノ
所見ニ露差ハサリキ。晩年ニ彼寺ニテ見給ニ梵僧來テ。汝カ見シト
コロノ竹林諸寺何為羣生ヲシテ。共ニ知ラレメサルトアリニカハ。禪
師聞給ヒテ。昔ノ所見ヲ石ニ刻シテ。前ノ所見ノ處ニ置給フ。是ヲ竹
林寺記ト云。此ノ事三寶感應錄等ノ諸文ニアリ。今文ハ高僧傳及
戒珠傳ニ依ルト見エタリ

あるをこぼれり念佛乃らたひるすらるるに
らして佛法うせぬとす。諸宗の学者難破を
いひたり。らして。人おほく念佛乃行を廢し
きこゆ。いぢご心んぬら。佛法ハこれ萬

○守屋大臣
物部弓削尾
興之子也

年也。うれし神とたりよきも。佛法擁護。諸天善神
も。より強ゆへよ。人の力にてハ。うらふべし。守
屋大臣が。佛法を破滅。んとせり。うらむ。法命い
ま。は。ま。ず。す。て。い。ち。に。は。は。る。る。い。ん
や無智。道俗。在家の男女。力にて。念佛を行はる
に。らして。法相三論。を。隱没。し。天台華嚴。之。廢
退。する。事。れ。ら。あ。る。ま。念。佛。を。行。せ。し。
て。る。た。し。ん。こ。れ。ご。り。ご。ハ。一。宗。を。も。興。隆。と。し。ま
う。し。ま。し。了。げ。に。念。佛。業。を。廢。した。る。ご。ら。か
り。り。して。ま。う。ご。と。我。諸。宗。を。ぎ。ろ。復。せ。ら。く
あ。う。た。ま。う。我。い。こ。ま。は。は。ま。る。損。り。あ。る

次や。諸宗代りつちがれをとりて。南都北京に
学者。两部の大法をほしりて。本寺本山の禪
徒。百千萬れ念佛世よひるまじりたりとも。本宗は
あつたじびきにあつた。又佛法をせむるに。佛と
て念佛を廢せん。念佛い。我佛法よあつて。や
たとへん。虎狼の害はよごとく。師子よひて
り。いんご。餘行を謗。念佛を謗せん
おれ。い。我逆罪也。とれにほつて。に害せり
まん。師子よ害せり。我んどもに。かたう。死と
し。我をも謗すべから。佛も。を。も。ひ。ひ。ひ
る。佛も。い。佛法也。た。い。偏執する。これら

○像法決疑
經一卷法華
疏九之三。結
成涅槃云。或
此經疑偽部
ニ入り。弘決六
之二云

も。像法變疑經よい。三。學。行。人。た。ぐ。い
ふ。毀謗して。地獄り。い。る。と。れ。や。れ。し。し
といへり。又大論にい。く。自法を變染するゆへに。
他人の法は毀皆す。とい。持戒乃行人なりとい
へ。地獄に。苦。法。ま。ぬ。も。次。とい。又。善。導
和尚乃の強く。
世尊說法時將了
五濁增時多疑謗
見有修行起瞋毒
如此生盲闡提輩
超過大地微塵劫
慇懃付屬。殊。陸。名。
道俗相嫌。不用聞
方便破壞。競生惡
毀滅頓教。永沉淪
未可得離。三途身

といへり。念佛を修せん之れい餘行をそくするべ
し。そくすは。稱陀れ悲願にそ
ひくぬきゆへ也。餘行は修せん者之念佛をそ
くすべし。又諸佛の本誓本誓よたふゆへ也。

ナシカハアルヘキハ。ナニシカハナリ。○本寺ハ。東大興福等ノ大寺ナ
リ。本山ハ。叡山高野等ナリ。禪徒ハ。大抵佛教ニ依テ出家シ。世間
ノ擾乱ヲノカレテ。心ヲシツメ身ヲツシムヲ云。昔ハ諸宗ナヘテ
此ノ名アリ。日本紀ナトニハ。禪師トイヘリ。智證大師教相同異云。
佛弟子有。三類謂禪師律師法師也。今諸宗中以何宗為何師。答
禪宗天台宗真言宗悉為禪師也。自餘諸宗皆為法師也。然此三
類師見。昉法師十輪經略疏者也。第廿七卷ニ注シヌ。○紀納言賦
叔孫通曰。他日。遂逃秦虎口。暮年初。謁漢龍顏。○トキヤト。疾矢
ノ字ナリ。○大論第一卷ノ偈頌ナリ。○善導和尚ノ給ハクトハ。法事
讚也。此文心津戸入道ニ示レ給フ中ニ。大師談ニ給ヘリ。第廿卷ニアリ
あるをいす。真言止觀。此窓乃ちもへよ。念佛此

行をそくする。一向專念。此床のうへよ。諸餘此行
は。そくす。に我。偏執。乃心をそくして。義理を
たて。おぼ。びよ。な。の。く。是非。れ。れ。も。ひ。り。任
て。會釋。を。た。た。あ。に。ま。正。義。り。の。れ。の。れ。や
これ。を。に。佛意。より。び。くら。は。ぎ。よ。又。難。者。の
い。く。今。來。れ。念。佛。者。私。の。義。は。た。て。惡。業
は。れ。そ。く。ハ。稱。陀。乃。本。願。を。信。ぜ。ら。る。也。數。遍。を
そ。め。る。ハ。一。念。の。往。生。は。た。る。也。行。業。は。い
へ。し。一。念。十。念。よ。ち。り。め。へ。し。か。る。が。ゆ。へ。は。數。遍
を。い。び。ぬ。く。は。惡。業。を。ハ。四。重。五。逆。を。し。ゆ。る
故。ゆ。へ。は。諸。惡。を。そ。く。る。ゆ。へ。は。と。い。へ。り。こ。れ。義

まじりてあはるべし。釋尊此説法よえん。善導の釋よえ。諸佛の御心よたごへ。別しての。稱陀本願よかたふべし。五逆十惡の衆生れ。一念十念よらりて。いぬい。こも觀經のあはるる文也。五逆をけくして十念をとれ。十惡をくして一念を申せ。十念をとれ。四十八輕を。至て四十八願をたのびん。心よ。所たひはる。心よ。行を。

心よ戒行をたそらして。身此威儀よ油鉢をく。行として成就。たはといぬ。戒行を具。た者ハ。諸惡莫作。諸善奉行。二世諸佛の通戒也。善法修する。善趣此報をえ。惡を行す者ハ惡道の果を感。因果此道理をさけ。たはる。たはる。

よき業をさすめよ。縁よきして念
佛を行へ。往生候期すへ。悪人をさすくも
はく善人たんとす。人法ををれり。本
願候ふ。これ宗なり。まろく存ぞ。此の
ころ也。決し。一念十念に。これより。往生
す。といぬ。釋尊の金言なり。觀經のあき。これ
る。文なり。善導和尚の釋。い。下至十聲業。
定得往生。乃至一念無有疑心。故名深信といへり。
又。い。行住座卧。不問時節。久近。念こ不捨者。
是名正定之業。願彼佛願。故といへり。まろく此
を信候。一念よ。い。ころ。わて。行をこ。一形よ
い。げ。い。い。す。い。也。弥陀の本願を信して
念佛の功候は。なり。運心年ひ。い。い。なんぞ
願力を信です。といぬ。まろく。と。べて。薄地の九支
弥陀の浄土に。い。ま。れ。人。事。他。力。よ。あ。い。い。れ。道
た。え。い。い。い。事。也。

浮囊ハ今ノウキグワト云類ナルベシ。涅槃經十一ニヒトツノ皮囊アリ。コレヲ浮囊ト名ツク。海ヲ渡者。帶テ水波ニ浮ヘリ。守コトヲロソカナレハ終ニ死ヲイタス。持戒ノ人モ亦如此ト。孟蘭盆新記云。浮囊謂熟皮。為囊以鳥毛貫之。或以氣吹之。度海用之。菩薩處胎經ノ偈。二彼犯罪ノ人。鉢ニ滿ル油ヲ擎持テ。若一滴ヲ棄サハ死罪ニ入。左ノ右ニ伎樂ヲ作トモ。死ヲ懼テ顧ス。行者モ亦如此ト。又涅槃經第二十三ニテリ。四重ハ殺盜姪妄ナリ。又後四重ヲモ云ナリ。諸惡莫作等トハ。增一阿含ナリ。大經下云。不肯為善。得善為惡。得惡又云。開示生死善惡之趣。自然有之。而不肯信之。諸經通說三世通戒ナルコト如此。釋ニイハクトハ禮讚也。又イハクトハ散善義也。薄

地ハ補注十一ニ云博廣多也。下凡之地廣多故耳。諸書ニ薄ニ作ルハ借音ナルヘシ

ては、十方世界に諸佛善逝、穢土に衆生を引導せんがために、穢土よりして正覺をとりて淨土に衆生を化せんがためよ。淨土よりして正覺をかり給ぬ。阿彌陀佛ハ淨土に、正覺をかり給ぬ。志も穢土に衆生を引導せんといふ願をたて給へ。その穢土に、正覺をとり給ぬ。是ハ隨類應同に、相を志め給へよ。いのちたゞ、穢土よりして、涅槃よりぬき、淨土よりして正覺をとり給ぬ。報佛報土よりして地上の菩薩の所居也。未斷惑の凡夫は、たゞらりしよ、事あることす

オホヨクハ。大沓ノ字ナリルノ字ハラヨクナリ。○阿彌陀佛淨土成佛トハ。大乘同性經ノ説ナリ。乃彼經下云。復有阿彌陀如來蓮華開敷星王如來龍主王如來寶德如來有如是等清淨佛刹所得道者。彼如來得初佛地。○隨類應同。第六卷ニ見ユ。○報佛報土。第六卷ニ注シヌ

志あるをいよ、淨土に在、嚴し。佛道を修行する。本意ハ之と造惡不善れともぐり。乃。輪轉する。かりたり人を引導し。破戒淺智れを、出離の期たり人をあり給ぬ。ため也。久行の聖人。此三賢を證す。十地をさしめんたる。久行の聖人。深位の菩薩。六度萬行を具足し。諸波羅密。修行して、此大悲れ本

意よあつゆ。乃酬因感果乃こつちを。大慈
大悲れ御心のこらに思惟して年序を
はらりて星霜五劫よをよむ。あつに善巧
方便をめぐりて思惟して終へり。あつもわき
別願をえて浄むよ居して薄地底下れ衆生
を引導すへ。それ衆生れ業力よらりてじ
やうとつゆかつゆあつ。それとつゆ衆
生のためんよ。永劫の修行法をくら僧祇の苦行
をめぐりて萬行萬善の果徳圓滿。自覚
覚他の覚行窮満してその成就せんところ
れ萬徳無漏れ一切の功徳をりてつが名號

とつゆ衆生よとつゆあつ。衆生よと
れよをいて信をりて稱念せつが願り
こつゆじやう事をうべ。名號をそれへん
じやうべき別願をおこしてれ願成就せし
佛よれあべきつゆへたつ。その願も満足せ
ゆん永劫をらつ。つよ正覚をとつゆ。たつ
未來惡世れ衆生憍慢懈怠して。れよをい
て信をたつ。事かつてへ。一佛二佛のとき終
つんよをらつ。つゆ心をつん事法縁
つらつ。つよ十方れ諸佛よとつゆ。これ願
稱揚つれつゆ。つんとらつ。つて第十七れ

願り設我得佛十方世界無量諸佛不悉咨
 嗟稱我名者不取正覺若生起心起心者
 第十八の願也乃至十念若不生者不取正覺
 と申して起へりとのひひ無量に諸佛を稱揚
 せらまてたてまつらんとなして起へり願成就す
 ゆへり六方よなるく恒河沙の諸佛あり
 くて廣長の舌相を出してあまのく三千大
 千世界におおひてこれおなりく此事を
 して起へり證誠して起へり善導の起を釋し
 ての起へりくこれ證よあつて起へり事成
 得といふ六方諸佛の起へり舌口ありてを

つめて乃ら起るよ口に起り起りして自
 然よやが起る起んとの起へりて起信で
 起んもの起り起り十方恒河沙の諸佛の御
 舌を起る也。よく信じて一佛二佛此
 御舌を起る起んだよを起り起り起りや十
 方恒河沙の諸佛を起り大地微塵劫を超過す
 いま起り三途の身を起る起り起り起り起り
 ○ワラト不覺ノ義ヲモハスシラスナト云ニ同シ暗ノ字ナリ白氏文
 集五廿二林園閣換四年春○善巧方便ハヨクタクミテ種々ニ教化ス
 ルナリ方便ハ手ヲテナリ○底ハ下也シモツカタノ賤ヲ云○スヘカラク
 ハ須ノ字也待也用也必カクアラニスルト云詞ナリ○僧祇ハ天竺ノ詞ナ
 リ具ニハ阿僧祇ト云此方ニハ無數ト云シカレトモ全ガキリナキニアラス
 只クノ多キヲ顯ハシテ無數トハ云集義ナリ○自證明ラカナルヲ自
 覺トイヒ他ヲ悟ラシムルヲ覺他ト云是自證化他ノ二行ナレハ共ニ覺

行ト云ナリ。是イマタ極メテ圓滿セヌヲ菩薩トイヒ。圓滿成就スルヲ
佛ト云。サレハ佛ハ此覺行ノ至極ヲツクシテ缺ル所ナケレハ窮滿ト
ハ云ナリ。是經論ノ中ニ佛ノ字ヲ釋スルノ文又善導觀經ノ佛ノ字
ヲ釋シ給フ文ナリ。○佛ハ一切ノ煩惱コトコトク斷盡シ一切ノ功德ヲ
具足シ給ヘハ。万徳无漏ト云ナリ。漏ハ煩惱ヲ云。第六卷ニ注シヌ。○
コノ證ニヨリテトハ。コノ證據ヲ依用シテトナリ。○ヤフシタレシトタ
マヘリトハ。觀念法門ニ給ヘルナリ。本文壞爛トアレハ。ヤブレタレシト云
ヘキニヤ。○三途ノ身ヲハナルハカラストノ給リトハ。法事讚_下テ給ヘリ
彌陀_レ四十八願_{といふ}。無三惡趣_{不更惡趣}。乃
至念佛往生等_レ此願_ニ。此_レなり。すべて四十八願の
中に。づも_レ乃願_ニ。一_つして成就_シ。此_レの願
あるべき願_ニ。一_つに不取正覺_とし_らひて。い_ます_ずで
一_つ正覺_をな_らり_終へ_る故也。然_を無三惡趣_レ。此
願_を信_ぜば_はく_して。此_レ國_ニ惡道_{あり}とい_ふ者_ハ
なり。不更惡趣_乃願_を信_ぜば_はく_して。く_れく_よ
の衆生_ハの_らを_らり_ての_ら。又惡道_ニか_へる_と
い_ふ者_ハなり。悉皆_{金色}の願_を信_ぜば_はく_して。
く_れく_よ衆生_ハ。金色_{なり}を_{あり}。白色_{なり}
を_{あり}とい_ふ者_ハなり。無有好醜_レ願_を信_ぜ
ば_はく_して。く_れく_よの衆生_ハ。く_らく_よを_{あり}。
く_らく_よを_{あり}とい_ふ者_ハなり。乃至天眼_{天耳}。
光明壽命_をよ_ひ得_{三法忍}の願_よく_らく_よて_こ
ま_らを_いて_くら_くよ_をな_ら者_ハい_ます_ず傳_へ
く_らく_よ第十八_レ願_ヲを_いて念佛往生_レ願_ハ
く_らく_よを_信ぜ_ばら_る也。この願_をく_らく_よ。餘_ノ願

をも信ずべし。餘の願は信せんと。此一願を
うたふべけんや。法藏比丘。いまはさけよ。なり
給はば。いんご。さき。謗法よ。なり。ぬん。う。し。り。
又。なり。給へり。と。い。ん。ご。い。ん。ご。い。ん。ご。これ願をう。ご。ぶ。る。
さ。や。四十八願の。弥。陀。善。逝。ハ。正。覺。法。十。劫。よ。と。れ。
へ。給。ぬ。り。六。方。恒。沙。乃。諸。佛。如。來。ハ。舌。相。を。三。千。世。
界。よ。の。へ。給。へ。り。た。ま。り。こ。れ。を。信。ぜ。る。べ。き。也。善。
導。こ。れ。信。を。釋。し。て。の。給。ん。く。化。佛。報。佛。若。一。若。
多。乃。至。十。方。よ。徧。し。て。ひ。ろ。く。を。か。や。り。と。る。を。
と。ま。り。て。あ。ま。よ。ひ。く。十。方。よ。れ。な。ら。ず。こ。れ。事。虚。妄。
なり。と。の。給。ん。よ。も。畢。竟。し。て。一。念。疑。退。の。心。

○波羅奈西
域記云舊曰
波羅奈訛也
新曰波羅疍
斯中印度境
婆娑云有河
多波羅奈去
不遠造王
城或翻江連
城亦云鹿苑

をねこさうどとの給へも。あ。う。家。を。い。ま。行。者。た。ち。
異。学。異。見。の。た。め。よ。も。や。と。く。さ。き。後。や。あ。う。家。
いつに。況。や。報。佛。化。佛。の。給。ん。を。や。と。ま。り。と。い。
此。行。成。す。て。は。い。ん。ご。乃。を。こ。た。ひ。よ。ら。に。ま。む。
き。給。へ。き。智。恵。た。ら。れ。ん。聖。教。を。ひ。ろ。く。に。ま。れ。こ。
く。財。寶。た。ら。れ。ん。布。施。を。行。ど。る。に。力。な。り。
ひ。ろ。く。波。羅。奈。國。よ。と。子。あ。り。き。大。施。と。子。と。
申。き。貧。人。を。あ。い。ま。さ。て。か。ら。ん。後。ひ。ろ。く。を。
ろ。く。給。ぬ。る。を。出。し。て。あ。う。給。よ。た。ら。ん。は。は。く。
さ。ら。も。や。う。し。き。者。い。つ。く。べ。し。後。こ。に。と。子。う。
と。れ。あ。り。て。如。意。寶。珠。あ。り。と。さ。り。海。よ。ゆ。き。て。を。

と死んでまづ一き身は寶をあらへんとらひ
て龍宮よゆき給よ。龍王おどろかされあやうして
たがろけり人よあしほといひくまづつらむ
らひてたうしれゆよとくたてまらりて家た
まころ給ふまづ。何事を作りてあ給そあはら
ん。お子の給うく。闇浮提の人まづつらして
む事たはし。王のまらされ中の寶珠をこ
うがためにたしむまこの給へん。王れいんくま
らば七日こころあらりてつら供養給うけ給
へ。其後たう後ましてまらんといぬ。お子七日
後給へぬまらえぬ龍神とまらりあは

たくとまらすれつら本國のまらつらにあらぬ
まらまらくは龍神たげまらいらん。おれたま
ら海中たあらせ。あまららあつてぞ。まらる
ぬまらこはらむ。海神くらりなりてお子乃海
まらまらつらつら。君世よ海ま成玉を
え給くあらつらまらに見せ給ふら。お子こそ
後まら給ふまらまらつらつら。お子
たらまらつらつらつら。お子
返さずんまらつらつら。海神いで
つらつらつらつら。お子
ん。お子乃日まらつらつら。お子

世をばんとせんを志してこのまじをいはくを
なつてはといふ。太子の病はく恩愛れん
れをもたは後らめんと思ぬ生死のはくが
をこそは後らめんと思ふいんやうそれ水
れりごとくぬれぬるあやうそれ世よこそ
はくは後らめんと思ぬ生死のはくが
らんごとくして見のうをたわしてそれ
後らめんと思ぬ生死のはくが
の天人ごとく思ふいんやうそれ
それごとく思ふいんやうそれ
太子一度二度のうは後らめんと思ぬ生死のはくが

十かぐ八かといふせぬ龍はらにまありてくわすまか
ひなくはわらんと思ふいんやうそれ
てまらる。太子それらをらめて都に歸てまら
くれぬるをらめて離浮提のうらにた
くは後らめんと思ふいんやうそれ
て退せらる。太子それらを精進波羅密といふ
○疑退ハ法ヲ疑フテ信ヲ退スルヲ云○波羅奈國ハ天竺ナリ事
ハ大論第四第十六ニアリ○鉄圍山ハ須弥ノ四洲ノ外ヲカコミテ鉄
ノ山アルヲ云地理ニ注セリ
しりれ太子ハ萬里乃たは後志のまじ龍王
の如意寶珠を得給へいんやうそれハ二河乃水
火海らる。孫陀本願ハ寶珠を得たもくそれ

龍神のく井くがためにうんごい異学
異見乃ためにうんごい。かれい貝のくはを
て大海をくうくうく。六欲四禪れ諸天来て
おれくくくく。これい信の手をくく疑謗
の難をくく。六方恒沙乃諸佛きくく。わて
くくく。龍宮れいれくあくく。如意寶珠
をくくく。これい疑難れあくく。くく
はきたく。謗家乃いれくあくく。本願の寶
珠をくくく。閻浮提く
て。貧窮れたく。極

樂よじやれて薄地乃くく。返くく。ひく
由く。稱くく。行者。称随本願の
寶珠。返くく。信
心れくく。深信れ手返く。疑謗れく
返く。手をくく。志てゆる
事。十念の悲願を
く。十方れ衆生を攝取く。三輩れ往生をく
ら。六字の名号返く。永劫の修行。く。切を
未來の衆生にゆづく。超世乃悲願。又れ

人乃断そ。心さう。彼未法のりま。諸よをくら
ねぬ。まねく。さう。往生をくら。ぬく。ゆへ。ほ
らげ。あに。正覚を。成。終。ぬ。や。り。ま。ら。又。往生
らげ。ま。や。ら。ぬ。く。往生。は。ほ。ら。げ。の。正覚。よ
ら。の。ほ。ら。げ。乃。正覚。ハ。り。ま。ぬ。が。往生。よ。ら。ぬ。若
不生者。れ。ら。ひ。ま。ね。け。て。志。わ。不取。正覚
乃。し。ま。か。ま。り。ある。を。や。ま。

畫圖

二河白道ノ喩散善義ニアリ○六欲四禪ハ第十八ニ注ス○信ノ手大
論ニ出タリ第十七ニ注シヌ○イラカハ録ニ覺ノ字ナリ。字彙ニ屋
棟也。釋名ニ屋脊曰覺也。蒙也在上覆蒙屋也○不取正覺ノコトハ
カキリアルヲヤトハ。往生スレハ。ソノ正覺ヲ取タ。ヒタレ。サレハ。不取トハ
十劫以前ニ。テ。ノ。限リ。ナリトシ

卷三十二終

圓光大師行狀畫圖翼贊卷三十三

事義

傳本第三十三

う。て。南都北嶺の祈詔次第よ。ら。あり。專修念
佛乃興行無為よ。す。く。る。と。ころ。よ。翌年。建永元
年十二月九日。後鳥羽院。熊野山乃臨幸あり。ま
その。ら。上。人。此。門。徒。住。蓮。安。樂。寺。の。と。ころ。に。
東山。麻乃谷。う。て。別時念佛を。う。め。六時礼讚
を。し。ま。し。ゆ。ら。ぬ。ら。拍子。た。く。な。の。く。哀
歎。悲。喜。の。音。曲。を。な。し。と。は。め。づ。く。し。く。せ。う
ら。ら。ら。ら。と。こ。ん。聽。衆。に。ほ。く。め。は。よ。ら。て。發心



○住蓮房ハ
系圖云。蒲仲
頼光頼親頼
房頼俊頼風
頼安信實玄
實實。遍。住。蓮
上。考。三。倍。實
以下代々興
福寺ノ衆徒
僧綱ニ任シテ

武勇ノ精兵ナリキ。一書ヲ俗名信國。白河院北直藤兵衛尉ニ任スト。未詳所出。○安樂房ハ上北面穀倉院別當。大外記師茂カ孫。外記入道師秀カ子也。

○秀能ハ秀卿將軍ノ末孫。大和守秀宗カ二男也。本ハ土御門内府通親公ノ家。社後。後鳥羽院ノ北面ニ召レテ堂上ヲ許サレ和歌所ノ寄人武者所。瀧口左衛門尉主馬首延尉出羽守承久乱後熊野山ニ於テ出家ス法名如願

する人々あまのさきさき中にて御所の御留主
此女房出家此事あはるる程。還幸せし。あ
はまのに諷し申人やはらぐ。おほきに逆鱗
あはて翌年建永二年二月九日。住蓮安樂を
庭上よりめりて。罪科せらるるとき。安樂見
有修行起瞋毒。方便破壊競生怨。如此生盲闡
提鞞。毀滅頓教永沉淪。超過大地微塵劫。未可
得離三途身の支派誦し。逆鱗いよく
らりりり。官人秀能はおほく。六條川原
にて安樂死罪よれ。たつ時奉行此官
人よ。いせまを。むらり日没の禮讚を行
す。紫雲うらら。諸人あや。い
なすところ。安樂申ける。念佛數百遍のし。十
念を唱へんをす。合掌。いひて。
て。右よ。本意を。知。いひて。
高聲念佛數百遍のし。十念のし。時
さ。いひ。合掌。いひて。
いひ。見聞の諸人。隨喜。波を
いひ。念佛。歸す。人。おほり。

畫圖

○熊野山ノ臨幸。建久二年ヨリ二十八箇度ナリシヨシ。彼山ノ舊記
第九卷ニ見エタリ。○史記。呂后本紀云。呂后年長。常留守。希見
上留守ハモト官名ナリ。事物紀原云。車駕不在京。則置留守。日本
紀云。持統六年三月。以紀朝臣弓張等爲留守官。續日本紀云。元

明天皇和銅三年始遷都于平城以左大臣正二位石上朝臣磨
爲留守女房ハ秘傳抄ニ松蟲鈴蟲二人ノ女房ト發心ノ因縁
ナト具ニ載タリ彼抄及一書ニ清水寺ニテ上人ノ說法ヲ聞テ
御弟子トナルトイヘリ○見有修行等ハ法事讚ノ文ナリ○逆鱗
ハ天子ノ忿ナリ韓非子云夫龍之爲蟲也可擾狎而騎也然其喉
下有逆鱗徑尺人有嬰之則必殺人。人主亦有逆鱗說之者能無
嬰人主之逆鱗則幾矣○六條川原ニテ安樂ヲ死罪ニオコナ
ハルトハ或傳云上人ノ門徒或ハ死罪或ハ流罪ノ人ト淨圓房備
後國禪光房澄西伯耆國好覺房伊豆法本房佐渡成覺房幸西
阿波國俗善信房越後國府罪善惠房俾無動寺前善紳房西意
攝津國ニ於テ誅ス性願房住蓮房安樂大僧正申預馬淵ニ於テ
佐々木判官カ沙汰肥後國十卷傳云隆寬律師奥州成覺房伊與
云云正信房湛空ト云云空阿弥陀佛ニテモ配所定メラル善惠上人ハ屬東塔西谷持教房
僧都非專修之由捧狀之上開天台六十卷印板可爲山門流通
物之由有宿願之旨令披露于山上之間被宥流刑畢一書ニ住
蓮安樂二人共ニ佐々木判官吉實奉行シテ馬淵ニテ首ヲ切ト
九卷傳及十六門記ニ二人トモニ沙汰ナシ秘傳抄ニハ上人ヲ六
條川原ニテ切ベキニ定マリケルヲ住蓮上へ申訖テ代リテ七條

ノ事カ罪ヲ負死刑ヲウケテ江州馬淵ニテキラル時二年三十九
佐々木丸即吉實承ハルト兩人一處ニテ死罪アルヘキヲ江州ニテ
召ツレケル事子細僧尼ノ中ニ注シヌ

罪惡生死れどぐい愚癡暗鈍れどもがく志り
たぐり上人の化導よよりてひとへは弥陀の本
願をたのせとこころよ天魔やきをひらん安樂
死刑よをよびてのちこそ逆鱗なをよほけりて
かきひて弟子れどが師近よをよばさき度
縁をめぐり俗名越らざり遠流の科よ
らざり藤井元彦云うけ宣下状云
太政官符 土佐國司
流人藤井元彦

○清原武次
未考

使左衛門の府生清原武次從
門部二人從各一人

右流人元彦を領送れたために、くらんら此人を
さして發遣くらんのこと。國くらんを
兼知して例よらわてあき坂をこらへ路次の
國もくらんを食濟具馬參正をせまらふ
海に府到奉行

建永二年二月廿八日 右大史中原朝臣

左少辨藤原朝臣

○宗府生久
經小大系圖二
武内宿禰三
十三代ノ後

追捕の檢非違使ハ。宗府生久經領送使ハ
左衛門の府生武次ナリ。上人の勸化をあらわ

貴賤往生れ素懐をのぞひ道俗をなまら

し事たらく紙をにまの如

畫圖

隼人正久實
九代ノ孫伊
賀守左衛門
尉父世カ男
從五位下民
部左衛門久
經アリ。若此
人歟

○刑ハ罰也。此ニ五ツアリ。謂答杖徒流死也。粗次此中ニ死刑ヲ重科
トス。具ニハ令同義解集解等ニ見エタリ。○師匠ハ名義集一ニ天台
云。師者有匠成之能。學者有稟承之德。○古者出家必執治部省
之牒印而剃髮。謂之得度。當省牒印謂之度緣也。一説云。度緣者
自朝家推度者書式也。諸寺有關失則其寺僧綱告玄蕃。玄蕃記
之。告治部省治部省此告於太政官。自太政官奉勅而令出家也。
其符云。度緣私云公驗或度。玄蕃式云。凡年分度者。試業訖更隨
所業互令各論擇。翹楚者乃聽得度。其應度者正月齋會畢日令
度畢。省先遺手實申官。與民部共勘籍。即造度緣。一通省寮僧綱
共署向太政官請印。即授其身。其別勅度者勘籍度緣亦宜。准此
但沙彌尼度緣者用省印。私云試業
度緣式 玄蕃式ニ出タリ

沙彌某甲年若干其京國郡卿戶主其
右太政官某年月日符爾戶口里子某處其邑右大臣宣奉

執云云若干人例得度省察僧綱共授
度緣如件

師主某寺僧位名

年月日

僧綱

僧正位名

若無者律師以上一人署

威儀師位名

從儀師位名

玄番寮

頭位姓名

允位姓名

屬位姓名

治部省

輔位姓名

丞位姓名

錄位姓名

釋書度受志云本朝之度始於司馬氏男多須奈名德齋女嶋卿
為尼名善信敏達帝十三年善信續日本紀八云元正天皇養老
四年正月朔日始授僧尼公驗又光仁天皇寶龜二年正月紀云
自天平神護元年以來僧尼度緣一切用道鏡印至是復用治部
省印代實錄貞觀七年三月紀云僧都慧運奏謹案舊例凡得

度者先與度緣次令入寺就中年度者經二年精練沙彌行臨時
度者經三歲然後聽受戒云云文德實錄云大同五年正月十四
此始三代實錄云貞觀元年八月廿八日慧亮表請始置延曆寺年分度者二人云云釋氏舊略云唐中
宗神龍二年丙午八月詔天下試童行經義挑通無滯者度之為
僧試經度僧從此而始唐舊事宋高宗紹興八年秋八月詔賜天下
僧尼勅綾度牒釋統興廢志中興曆事物紀原云度牒自南北朝有之見高
僧傳唐會要曰僧尼之給牒自唐明皇始也度受志云李唐中宗
景龍初詔天下試經度僧山陰大義誦法華中第一自爾或五百
紙或百五十紙經目不定隨時改變肅宗至德始賣度牒謂之香
水錢納百緡得度度科大隲其後暫起至趙宋而益滋取又云此
方之度潔白精密案延曆詔十義通五非震且誦經之比矣香水
之緡等所未嘗聞也中葉以降學業冗散度選弛緩多奴之族出
稚雖而補家產窳約之民放丁壯而貪寺供或草賊迫捕逮而來
投或孽子漏舉枚而寄歸佩刀而互割褻服而不染是等之類吾
法亡矣書略按スルニ凡率土民ハ天子ノ奴ナリサレハ勅許ナクテハ得
度ナラヌ事本是佛制ニシテ又國法ナリ古ノ得度其法イルカセ
ナラサレハ人主コレヲ賜ヒ師主法名ヲ授テ遂ニ佛家ノ奴トナラレム
是故ニ昔モ私度ノ者タマクアレト僧トナリテ法名ツク事アタ

ハストカヤ。釋書云。時恩爲沙彌。勅得度。賜名報恩。靈異記云。石川沙彌。年妻沙彌。自度無名。上其類ナレハ。續日本紀云。天平勝寶元年。閏五月。私度沙彌小田郡人九子。連官麻呂。授法名應寶。入師位。賞也。黃金ト。又唐土ノ高僧傳等。本朝ノ往生傳ニ其類往々ニシテ。只字ヲ呼テ。法名ヲ告サリキ。若勅許ノ度者ハコレヲ公ニシテ。朝家ノ御帳ニモシルサルトナリ。雜令云。僧尼京國官司。司每六年造籍。三通各顯出家年月及夏薦德業。依式印之。一通留職國以下。申送太政官。一通送中務。一通送治部。所須調度。並令寺准。入數出之。又皇胤大臣等ノ息ニ無度緣ノ宣下。登壇受戒ナト云事。官班アリ。○俗名ヲクダサルトハ。僧尼令云。凡僧尼有犯准格律令。徒半以上者。還俗許以告牒。當徒一年。若有餘罪。自依律科斷。集解云。謂格者。臨時勅詔也。律云。事有時宜。故人主權斷。詔勅量情處分。是其格律者。無爲俗人設法。下爲僧尼立制。是以稱准也。徒半以上死罪以下也。告牒者。僧尼得度公驗也。依律雜犯死罪者。除名。卽知僧尼犯死罪者。亦先還俗。然後處死。其流罪者。比徒四年。以告牒。當徒一年。其餘三年。依下文。役身也。若犯加役流者。亦還俗。而配流。不得以告牒。當卽至配所。不免居作也。私云。凡刑有流死也。徒者。役使贖罪也。此中下者。上。夏野義解云。若有餘罪。依

有科斷。謂假有犯徒二年者。以告牒。當一年。徒其餘一年者。依律役身。其犯徒以上還俗之後。猶餘罪籍文。但陰應得減贖者。一如俗人之法。又令云。凡僧尼有犯百日若使經二度。改配外國寺。仍不得配入畿內。集解云。謂不論罪之輕重。皆先還俗。何者。案道僧格。犯詐稱得聖道等罪。獄成者。雖會赦。猶還俗。故先還俗。僧尼還俗。猶俗人除名。依律犯除名者。罪雖輕。從例除名。罪若重。仍依當贖法。准此言之。僧尼詐稱得聖道等者。罪雖輕。猶還俗。不可更論本罪。罪若重者。仍依以告牒。當之法。釋云。並依法律。謂與俗人同也。檢格。雖會赦。猶還俗者。故知還俗科罪也。私云。更論者。輕罪之也。西宮記。長德四年。紀云。僧犯罪。觸類有。加減。須依還俗之法。注姓名。勘僧時。犯科。或以告牒。可當徒止一年。然而年年勘文。不具載其由。只以俗法勘之。如此。監僧。偏是准凡人。職官。職便覽云。犯重科之身。有職位之時。隨罪法之所。指辭退。其職位者也。其辭退之差。有四云。云四者。除名。官位勅位悉除。課役從本色。按スルニ。凡出家ノ法。朝廷ノ勅ヲ蒙テ。法師位ヲ忝ス。俗ノ職位ニ在カ如シ。若犯罪アラハ。還俗シテ。科斷ス。是俗ノ除名ニ准スルナリ。俗ト云。僧ト云。德アテ勅ヲ忝ス。犯過ノ人。官身凡人ニ同ス。續日本紀云。天平寶字五年三月。忍壁親王之孫從四位下山前王オホキ之男葦原王アサハラ除王名。配流類聚國史。

八十云葦原王坐以刀殺入賜姓龍田眞人流多禿鳴同四年十
 二月藥師寺僧範曜博戲爭道遂殺同寺僧華達範曜還俗配陸
 奧國排生柵戸又景雲三年清曆解官除名配於大隅其妙法均
 還俗配於備後誓古略云唐高宗顯慶元年五月勅天下僧尼有
 犯國法者以僧律治之不得與民同科我朝王公深崇佛法不忍
 加罪於沙門是故依俗法坐之則還俗科斷天武十年十月大津
 皇子反新羅沙門行心參謀事覺不忍加誅配飛彈伽藍日本紀
 蓋斯謂也復是言國王大臣不許於歸我法剃除鬚髮著袈裟者
 鞭杖訶責謫罰驅使者佛之遺囑也等經律又持統天皇七年
 九月高麗沙門福嘉其才任朝廷事勅令還俗文武二年通德慧
 俊四年慧耀六年隆觀元明七年義法釋書皆是用其才不忍役佛
 子也蓋貴其法之深也竊談集云唐朝僧ヲ崇ムル儀日域ヨリモ
 如法ナラス寺ヲアレク行ヒ諸寺ノ長老ヲモ官人ノ杖ヲモテ打之ナド
 イヘリ日本ニハタトヒ流罪スル事ハ有ハ可有俗トレテ高僧ナト打
 事昔ヨリ不聞之諸寺ノ無官ノ僧ハ諸大夫ノ座ニ處セシメ有職ハ
 殿上人僧綱ハ公卿ノ座ニ坐セシムト云ヘリ粗見僧尼令孝謙天
 皇勝寶元年四月勅遣左大臣橘宿禰諸兄白佛三寶乃奴止仕
 奉流天皇羅云云ト續日本紀アルモ御敬ノ甚至レナリト○遠流ノ

科上獄令云凡流人應配者依罪輕重各配三流令義解云刑部
 式云凡流移人者省定配所申官具錄罪狀下符所在并配所良
 請內印賤其路程者從京爲計伊豆去京七百里安房一千一百常
 陸一千五百佐渡一千三百隱岐九百里土佐等國一千二百爲
 遠流信濃五百伊豫等國五百爲中流越前三百安藝等
 國四百爲近流續日本紀云神龜聖元年三月定諸流配遠近
 之程云云私云只信濃爲凡配流二處スルハ多クハ死罪
 一等ヲ減スルノ罪ナリ○藤井ノ元彦ハ十六門記九卷傳ニハ源
 元彦トアリ平家物語ニ明雲座主流罪ノトキ度緣ヲ召返シ還
 俗セサセ奉リ大納言大輔藤井盛衰記ノ松枝ト云俗名ヲツケ
 ラレケルト此類ナリ○宣下ノ狀トハ或云凡天子有命則召藏人
 宣之藏人受勅命達之於上卿此藏人文案云口宣上卿以口宣
 達之外記外記受之則署云之宣旨故口宣案之與書藏人名也
 又宣旨與書外記名也ト○太政官符土佐國司トハ太政官ハ天
 下ノ政ヲ執ノ所ナリ符ハ宣下ノ證文ナリ此符彼官ヨリ出故ニ太
 政官符ト云土佐國司ハ國守ナリ令義解云獄令云凡流移人太
 政官量配謂量罪輕重配其符至季別一遣謂大政官錄配流狀
 具錄應隨家口及發遣日月使下配處謂刑部及國司依大政官

流人者。太政官^兼。差^兼。專使^兼。領送也。遞差防援。專使部領送達配所。符領^兼。訖速^兼。報^兼。元送^兼。處並申大政官刑部式云。凡流移罪人者。省申官遞請。左右兵衛。為部領。即授省印。路次若加防援。令達前所。其返抄從官下省。公式令云。

符式 次

大政官符其國司 其事云云符到奉行

大辨位姓名

年月日

史位姓名 使人位姓名

鈴冠傳符亦准此

右太政官下國符式省臺准此若下

在京諸司者不注使人以下云云

令集解云。疏云。使人謂此止送書之使。非檢校事之使也。穴云。使位姓名。謂或專使或專使使同。若隔日付者。更註付日月。下計會式文。備為知行程師云。年月日使人位姓名者。令付送文書之使。是但可行事之使得官符行者。件云云之前耳云云。府生八由。下使宜旨。險非違使ノ府生ヲ云云。從ハ衛門式云。凡檢校在京非

違者。佐一人。尉一人。志一人。府生一人。火長九人。二人。都督一人。案主四人。佐尉

從各二人。志從一人。人府生從一人。ト門部ハ衛士ヲ率テ。諸門ヲ守リ。監當ノ處ヲ

禁察シ。配流杖ノ事ヲ掌者。令集解江ナリ。○領送ハ。請取テ配

所ニ送ルナリ。○發遣ハ。タテヤルトヨメリ。○食濟具馬ハ。食糧ト水

濟トノ具ト。傳馬トヲ給トナリ。或ハ濟ハニギハレト訓テ。只糧食ノ事

ナリ。職負令ニ。主馬署首一人。掌供進乘馬鞍具之屬ト。獄令云。凡

流移人在路。皆遞給程糧。每請糧停留不得過二日。其傳馬給不

臨時處分。義解云。謂流移之人。所經由處。每國給糧。令過當界也。

水驛條云。凡水驛不配馬。處量閑繁驛。別置船四隻。下二隻。釋云。一放

也。日隻。隨船配下驛長。准陸路置集解云。謂船有大小。故隨船配人

令。應堪行。若應水陸兼送者。亦船馬並置之。置驛馬條云。凡諸道

置驛馬。大路廿疋。中路十疋。小路五疋。又其傳馬。每郡各皆用官

馬。集解云。謂國司向任及罪人令乘官馬者。皆傳馬。○追捕ハ

トリコニシテ。追タツルナリ

門弟等^ト。げさめ^ハ中^ニ。法蓮^ハ房申^ス。此^ハ任^ト。蓮安樂^ハ。すぐ^ニ。罪科^ト。此^ハぬ。上人^ノ。流罪^ハ。

一向専修興行^{こうぎょう}行^りけ故^{ゆゑ}と云^い云^いふに老邁^{らうまい}の御身^{ごみ}。
 遼遠^{れうえん}北海波^{ひかい}に心をむかひて、御弁^{ごべん}安^{あん}全^{ぜん}。
 我^{われ}等^ら恩^{おん}願^{げん}儀^ぎ拜^をし、嚴^{げん}旨^しをうけ、強^{たか}くも。
 承^{うけ}べし。又^{また}師^し匠^{じやう}流刑^{りゅうけい}の罪^{つみ}、如^{ごと}くは。のこら
 らぬ。門^{かど}弟^{てい}面^{めん}目^{もく}あ^らんや。うら^らい^の勅^{しつ}命^{めい}、如^{ごと}くは。一向専
 修^{しゆしゆ}、興行^{こうぎょう}をむかひ、ま^まを奏^{そう}し、たまひて。
 内^{うち}に御化導^{ごけどう}、實^{じつ}に也^{なり}、や。侍^{わいてい}さんと申^{まを}はせ、我^{われ}をたて。一座
 此^{こゝ}門^{かど}弟^{てい}に、ま^まこの義^ぎ、ま^ま同^{どう}とす。

○法蓮房申上ハ一書ニ善惠房トアリ。○邁ハ老也。廣雅ニ邁、歸
 街也。謂壯力已往也。序分義ニ世尊年將老邁。○遼ハ遠也。ハルカ
 トヨメリ。王子端力頌ニ萬里一息、何其遼哉。○ウケ給コトハ、ウケ
 給ハルコト、ナリ。○嚴ハ威嚴、ウツタカキ、若旨ナリ。○罪ニフシハ、伏
 罪ノ字也。○面目ハ、第廿七ニ見ユ。○内々、御化導上ハ、源氏ニウチ
 ウチトアルハ、柱トミナ、隠密ノ心ナリ。

上人の強^{たか}く流刑^{りゅうけい}に、如^{ごと}くは。ま^まことすへう。
 それゆへ、齡^{とし}すて、ま^ま向^{むか}ひてありぬ。たらひ師弟^{しだいに}
 になし、ま^まこ^こに住^{すま}すも。娑婆^{しやば}乃^{すなは}離別^{りべつ}ら^りま^ま。
 あらへ。た^たらひ^の海^{うみ}を、魚^{うい}づ^いに^もも。浄土^{じやうと}の再會^{さいくわい}
 なるぞ。うら^らい^の人^{ひと}。又^{また}い^いら^らひ^もも存^{ぞん}と^も、人^{ひと}
 の身^み如^{ごと}くは。むかひ^て、死^しとも^も、人^{ひと}のい^いれら^れぬ。
 なるぞ。うら^らい^の人^{ひと}。ま^ま向^{むか}ひ^て、死^しとも^も、人^{ひと}
 なるぞ。念佛^{ねんぶつ}の興行^{こうぎょう}。洛陽^{らくやう}より、年^{とし}ひ^ひ。邊^{へん}
 鄙^ひりに、むかひ^て。田^{でん}丈^ぶ野^や人^{しん}を、ま^ま向^{むか}ひ^て。年^{とし}
 来^くれ^る、本^{ほん}意^いなるも。時^{とき}いた^たら^して、盡^そ

意いしむししははいし事此縁よりりて年来の
本意をぞらん事すことる朝恩をいひてく。此
法の弘通ハ人々をめんとするも法は死よと
するをゆるし諸佛濟度れらるひめを冥衆
護持の約秘んごりたり。其の秘は人々世間の
機嫌をいひかりて。經釋の素意をのこると
まや。あしむしむじとらる。深空を興とる
浄土は法門ハ濁世未代ハ衆生此変定出離
の要道なるゆへに常随守護ハ神祇冥道と
たえて無道の障難をとりつたまりん。命
あらんことを。因果はむかしかりける事

此再會なりんやとてにほせしむる

○八旬ト六十日ヲ旬ト云又十年ヲ一旬ト云師古曰滿歲若十日
之一旬八旬ハ八十也○洛陽トハ漢高祖雍州ニ都シテ長安ト云
後漢光武東ニ移テ河洛ニ都ス是ヲ洛陽ト云帝王編年記云延曆
十二年正月十五日始造平安城東京愛宕郡又謂左京唐名洛
陽西京蕪野郡又謂右京唐名長安南北一千七百五十三丈除
大路小路東西一千五百八十丈除大路小路通計東
西兩京○田夫野
人ト庶人往役曰夫野鄙也ミナ下賤ノ愚人ヲ云涅槃經六云
田夫種植稻穀耘除稊稗大論ニ愚人ノ鹽美ナリト聞テ多食ヒ
シヲ田舍人トイヘリ又作田父潘岳賦云談話不遇農夫田父之客
呂氏春秋ニ野人芥ヲ美也トシテ天子ニ獻セントス衆人ミナ愚ナリ
トイヘリト列子ニ此事ヲ舉テ田夫ト云云白氏文集四ニ不如村
婦知時節解爲田夫秋擣衣孟子ノ滕文公ニ無君子莫治野人無
野人莫養君子太經云市里愚民野人○スコフルハ榜嚴注一第云頗
猶可也亦語辭也又少也文選又差多曰頗多字ナトアリテヨホト
ト云意ナリ○朝恩ハミカトノ御恩ナリ○諸佛濟度ノ子カヒフカクハ

諸佛ノ誓深重ニシテ。未世ヲ本トス。○真衆護持ノ約子ニコロトハ。諸
天善神。佛法ヲ護持セントテ。佛前ニシテ。契約重シ。般若ノ十六善神
等其類ナリ。諸經ノ會座多クハ如此。

○西阿。若毛
利。入道西阿
ナルニヤ。此ノ
道ハ藏人本
夫ト号シテ。
鎌倉將軍家
ノ近臣ナリ。
時ニ六波羅ニ
在テ。本ヨリ
大師ノ弟子
ナレバ。今此事ニ
及ケルニヤ。

一人の弟子ニ對シテ。一向專念ノ義を乃
ゆるり。御弟子西阿弥勒佛推奉してかく
のこし。御義ゆえに有へし法儀をのこく
御返事を申張へし。此と申せ。上人のしは
く。汝經釋乃文。汝見法やと。西阿申は。も
經釋れ文いふりといへし。世間の機嫌を存
し。もろりなりと。上人又のゆるり。わきたる
死刑よをこれこそ。此事いふ法いあるべし
此とを誠乃いろきとも切なり。んしてまう

人の後をぞれり。一々家

畫圖

○モトモ切ナリトハ。切ハ親切ノ意ナリ。論語ノ子張ニ。切問近思ト。迫也
急也ト訓ス

○法性寺の
紀伊郡九條
河原ニアリ。
貞信公 太政
忠平ノ建立
或云天其後
慶二年
長元五年十
二月八日開
祿ス。其後冬
安四年七月
十七日攝政
惠通公再興
シ給

官人小松谷。御房よび。いひて。いと。配所へ
り。里。ゆるり。後責申。分れ。も。は。る。よ。こ。や
こを。い。て。た。ま。ふ。月輪殿。御餘波。を行。え。法性寺
小御堂。よ。一夜。と。免。た。て。ま。う。ま。う。ま。う。禪
定殿。下。忠仁公。十一代。の後胤。累代。攝録。の。臣
として。朝家。れ。憲政。詩歌。乃。才幹。君。これ。を
ゆるり。世。を。あ。ま。さ。た。て。ま。う。る。榮花。重職
の。豪家。よ。あ。ま。さ。び。ゆるり。へ。も。偏。よ。順次。往。生。れ。御

○小御堂又
西御堂ト号ス

本尊彌陀今
村氏ノ墓所
トナル

○忠仁公ハ
贈太政大臣

冬嗣公ノ二
男母ハ大庭

王ノ女也齊

衡四年二月

十九日太政
大臣トナル

時二年五十四

天安二年十
一月七日攝

政從一位貞

觀十四年九
月四日或云

豊ス年六十九
四日正一位ヲ

賜ル白河殿

ト号シ或ハ
深殿ト号ス

諡シ忠仁
公ト申ス美

乃國ニ封ラル

のぞきぬくりたり。御出家後ハ。數年上人を屈

請して出離の要道をたづひ。浄土法門を談

したまふ。上人の頭光後まのりあつり拜見し

てのらひ。一向に生身佛のたまひを仰ぎ

あつるを。かづばり。勅勅を。あつたまふ

り。後まのり。御たげまを。ら

り。

○官人公宗。府生又經等ナリ。○餘波ハ。第廿七卷ニ見ユ。○累代攝

祿ノ臣ト云セラカサ子家ツ、キテ攝政關白ノ職ヲ嗣給ル忠臣ナリト云

忠仁公。良房。御子基經公。父子相續シテ。攝關相國タリシヨリ。朝家ノ

權柄ミナ藤原氏ニ歸ス。忠仁公ハ五攝家ノ御祖ナリ。近衛殿其嫡

流ナリ。分レテ鷹司家アリ。九條殿ハ庶流ナリ。分レテ一條二條ノ兩

家アリ。兼實公ハ九條ノ元祖ニテオハシマストソ。○天下ノ政ヲ行給ニ

憲法ニシテ私ナキヲ憲政ト云。唐詩和歌其道ニ長シテ。其才龍萬

事ニ善ヲ才幹ト云。易乾卦ニ貞固足以幹事。本義云。言事之所依

以立。蓋正而能固。萬物依此而立。如木之幹。白氏文集。五十二。才幹

可以掌務。東鑑ニ。文治二年二月廿七日。安達新三郎飛脚トシテ

上洛ス。仰送ラル。條々ハ當右大臣殿コソ。法性寺殿ノ三男ニテ。和

漢ノ才智人ニユエ給フ間。攝政ノ詔ヲ下サルヘキナリトイヘリ。○凡

人臣ノ中。官爵祿位攝關相國ニ過タル者ナシ。其榮花實ニ比類ナシ

重職ハ大事ヲ掌ルヲ云ナリ。淮南子云。智過百人謂之豪。文選注云

才過萬人曰英。千人曰豪。今言心ハ威勢ツヨク。種姓タトキヲ。豪家

ト云ナリ。白居易詩云。貴公主豪家。即太經云。長者居士豪姓尊貴

ト云ナリ。去年建永元年三月七日。後京極殿よんらに

かゝれさせ給き。御らりりり三十八よそなり

給き。これよはまていよく今生れ事候

れほり。あつすす。いとすらに後生菩提の御

いれ。まのり。上人よはひより御對面あつて。生死

無常此とつらば後をもつてめられた。往生浄土は御法とあつたをわづらひし。御御心をもちたか免れざるに上人を遷の罪よあり給ぬる事。いづれ宿業よてかかへんは後えささるんとて勅勘ばつたもへる上人の御歎いとなりや。禪閣の御悲あつたをわづらひてつらさる人をも心けをささるるも程ぬきこの事後申さめさる事。いさて世りあるしつらさるも御勅氣れつらえたり。左右れく申さんもつら恐ろし。連く御氣色をうかひて勅免を申をこたふゆらえ。おほせらさるる。

畫圖

○後京極殿ハ月輪殿ノ男。建仁二年ニ攝政ノ勅ヲ蒙給ヘリ。カクシハ死ノ字日本紀ナリ。帝王編年記ニ三月廿日ノ夜頓死アリシヲ。次ノ日己尅ハカリニ見付申セリ。夫木抄ニ前中納言定家卿。戀ワフルハナノスカタハカケロフノモエシケフリラムチニタキツ。此歌ハ建永元年三月後京極攝政ニハカニウセ給テユメノ心チシ侍ケルアル日家隆卿トフヲヒタリケル返事ト云云。○左遷ハ史記韓信傳云漢魏以上。右ヲ貴。左ヲ卑ニス。罪アル者ハ高官ヲ解テ下官ニ降ス。コレヲ左遷ト云。漢書周昌傳婆沙論ハニモ左者不吉義ト。○忙然トシテ圖方ナキ躰ヲ心ヲキトコロナシト云ナリ。白氏文集九。慚惶若無所措。○イキテ世ニアルカヒナケレトモトハ夕霧ニイケルカヒナク思ヒツケ給テトアリ。カヒナシト云事ハ竹取物語ニ石上ノ中納言ツバクラメノ子。ヤス貝ヲモトメソコナヒテ。アチカヒナノワサヤトノ給ケルヨリソ思フニタカフ事ヲカヒナシト云ケルトナリ。○左右ナクハ第四卷ニ見エタリ。○御氣色ハ天子ノ御機嫌ヲ云ナリ。

圓光大師行狀畫圖翼贊卷三十四

事義

傳本第三十四

○三月十六日八王御門院
建永二年ナリ
承元ト改ム
○信濃國角張郡郷未考

三月十六日、花洛^{くわらく}にいでて夷境^{いまくら}に在るに
信濃國^{しんのう}の御家人^{ごけにん}角張^{かくぢやう}の成阿^{なりあ}跡^{あと}隨^{したが}佛^{ぶつ}
カ者^{かもの}棟^{むね}梁^{はり}ボ^ぼとして、最後の御^ごもたりとて
輿^{こし}に上^{のぼ}りて、^いちよ^ちに志^{こころ}す^まつてま^つる僧^{そう}
六十餘人^{むそじゆにん}たり

○夷境ハ邊土ノエビス國ナリ ○成阿ハ九卷傳ニ角張ハ俗姓モイマシ
カラス、王家ヲモリ、朝敵ヲ平クトイヘトモ、本師上人ニ仕テ、奴トナリ
僕トナルト、十卷傳ニ清和後胤六孫王苗裔伊州玄孫ナレドモト云リ
○カ者ハ今三井ノ專當山門ノ供人ナド云妻帶法師ノ神輿ナド昇
或ハ威儀メキタル法席ニ臨テハ、兵杖ナド持テ警固スル者ヲ云ナリ、承

仕法師ト云モ此類ナリ。又天子ノ御駕輿丁ヲモカ者ト云事アリ。○
オナレサテニシタカヒトハ角張ト同様ニナリ

をト云上人の一期の威儀。馬車輿ト云この

強つ。金剛草履ト云步行ト云。強ま。ま。つ。れ。も

老邁ト云。長途ト云。歩か。ら。る。に。よ。り。て。乘。輿

あ。わ。る。に。し。て。御。は。ご。わ。儀。行。と。前。後。左。右。よ

ら。し。り。志。す。ぶ。人。幾。千。萬。と。い。ぬ。事。を。志。す。所。

貴賤ト云。の。け。じ。と。あ。ら。ま。る。に。し。ら。道。俗。の。志。す。

ぬ。渡。地。を。と。し。る。不。所。が。此。儀。い。う。人。強。ま。る。

と。柔。よ。い。驛。路。ハ。こ。こ。大。聖。れ。ゆ。所。也。漢。家

ト云。一行阿闍梨。西域ト云。ハ。役。優。婆。塞。請。居。ハ。又

權化ト云。す。じ。所。也。震。旦。ト云。白。樂。天。吾。朝。よ。ハ

管。差。相。ト云。在。纏。出。纏。ト云。火。宅。ト云。真。諦

俗。諦。ト云。れ。れ。水。驛。ト云。お。ほ。り。と。れ。る。

と。て。禪。定。殿。下。土。佐。國。ト云。ハ。あ。ま。り。に。し。る。

た。る。程。な。り。知。行。乃。國。ト云。れ。と。て。讚。岐

國。ト云。り。た。て。ま。つ。と。れ。る。御。な。ら。わ。る。

と。れ。お。ほ。り。め。と。ま。る。や。禪。閣。御。消。息

を。送。ら。ま。る。に

ゆ。わ。ら。し。め。い。り。の。し。と。れ。と

あ。ま。り。の。志。す。と。な。り。と。れ。ま。よ

と。け。れ。ん。と。人。の。志。す

○管丞相ハ
天穗日命十
七世孫是善
朝臣ノ子也諱
八道眞元姓ハ
土師古人天穗
日命
十五始賜菅原
姓

露の身は...ここにきえぬと
...花のうらな

畫圖

○ヲヨソハ凡ノ字也○金剛州履公世傳安然和尚イタク貧カリケレバ
草履ツクリテ世ノイトナミトシ給ケルヲ人來テツレハ何ニカト問申
セシニ金剛ノ性體トコタヘ給ヘリサレハコノ時ヨリ州履ヲハ金剛ト云
ヘルトカヤ○步行ハカチニテトナリ○老邁ハ上卷ニ見エタリ○長途ハ
ナカミチトヨメリ司馬長卿ガ上林賦ニ步欄周流長途中宿○驛路
驛ハ旅舎ナリ万葉ニムヤチトヨム孔德璋ガ北山移文ニ馳煙驛路執
移山庭○漢家ハ大唐ナリ○盛衰記及寶物集等ニ一行阿闍梨玄
宗皇帝ノ爲ニ勅勘ヲ蒙リテ火羅國ヘ流サレ給フトイヘリ然レドモ一
行ノ傳ハ宋高僧傳神僧傳佛祖統記及通載開天傳信記西陽雜
俎雜錄ナトニ載タレト流罪ノ事ハ未考○日域ハ日本ナリ○續日本
紀云文武天皇三年五月役君小角流于伊豆島鬼神ヲ役使シ一
言主神ヲ呪縛シ及歸洛以下ノ神異ノ事ハ不載此等ノ巨細公景戒ノ
靈異記釋書等ニ見エタリ僧尼ノ中ニ注シヌ○謫處ハ謫ハ罰也ツミ人ノ
スム處ナリ○白樂天江州ノ潯陽平ノ江ニ流サレタル事新唐書列傳四

十四舊唐書百十六ニ見エタリ灌化ト云事ハ帝王編年記及拾玉集
ニ文殊ノ應迹也トイヘリ佛祖統紀及珠宏往生傳ニハ商人海中ニ浮
テ仙居ニ到シ此所ハ樂天カ來ルヘキ所ノ由仙人沙汰シケル此由ヲ樂天
ニ告ケレハ仙居ハ我願ニアラス歸ラハ彌勒ノ淨土ヘコソト云シガ後ハ西方
ヲ願テ極樂ヲ自行化他トスト云事文集六ニ見エテ商人即李浙東也
トアリ列仙傳ニ李太白仙トナテ樂天ガ後孫白龜年ニ語云汝祖樂
天見在五臺掌功德所ト云トイヘリ文殊ノ應迹トハ是ヨリ云ニヤ此
等ノ事跡又第四十四卷ニ注シヌ○菅丞相ハ醍醐天皇昌泰四年藤時
平ノ讒ニ依テ筑紫ニ流サレ給キ世ニ傳ヘテ十一面觀音ノ靈應トシテ
跡ヲ北野ニ示シ給フトワ釋書等ニ見エタリ○在纏出纏トハ火宅ナリ
眞諦俗諦シカシナカラ水驛ナリトハ迷中ニアル眞如ヲ在纏ト云衆
生所具ノ佛性ナリ悟前ニ顯ハレタル眞如ヲ出纏ト云聖者所證ノ一
理ナリ眞如ノ理性ヲ眞諦トイヒ恒沙ノ諸法ヲ俗諦ト云在纏出纏
眞諦俗諦言ハ異ニシテ意ハ一ナリサレハ此穢土ノナラヒ上ノコトクノ纏
縛ヲ解脱シ給フ聖人眞理ヲ證悟シ給フ權者トシテ恩愛ノホタルアル
俗務ノ勞ヲマヌカレサル輩誰カカクノ如キ難ヲノガレシヤ是火宅水驛ノ
所ニヌメハナリトワ火宅ハ法華經ニ見ユ水驛ハミツムヤトヨメリ源是旅
ノヤトリナリ常ニ留ムルハカラストノ心ナリ白居易詩ニ水驛路花船棹

○隨蓮傳第九卷云載

ナト對シタリ○祕傳抄ニ土佐ノ國ハタト云所一書ニ波多ノ明淨ノハ流シ奉ルヘトアリシヲ殿下ノ御ハカラヒトシテ兵衛入道隨蓮ハカタチ上人ニ似奉ル間御代官ニ彼所ヘ流サレ上人ヲ我所領ナレトテ讚岐ノ國ニラキ奉リキト云

○鳥羽南門

鳥羽乃之れえれ門より川船りのわく

門ハ廢絶シテ今一念寺トテ小堂アリ渡海場ト云所此邊ニアリ

○九卷傳ニ同日ニ正信房湛空同シク西國ヘ流サレ侍リケルカ律師ノ船ハ前ニ出ケレハ暫オサヘテ上人ノ御船ニノリウツリテ泣哭セラル云サテ律師ノ船ヨリトククト申ケレ本ノ船ニノリウツリケルトアリ若此傳ノ船中ノハリ御影ノ所ニ依ラ公同船ト聞エタリ

○攝津國經島ハ俗ニ兵庫ノ

攝津國經乃嶋よりつぎ娘よちわがれ志やうい

禁島ト云是也平相國清盛公攝津國八郡郡福原輪田濱始築島石面畫一切

平相國安元の寶曆より一千部の法華經を石の面より書寫して漫たる波れ底り

經即以其石得禁固故號經島

志川に鬱たる魚鱗をすくつんがためれ里村里れ男女老少そのすおほくあつちわて上人よ結縁あつてちつちわ

○平相國清盛正四位上刑部卿忠盛之一男也仁安二年二月十一日太政大臣從一位

畫圖

○經ノ島ハ地理ニ注セリ十卷傳ニ三月十八日此島ニツキ給テ同オ一日テ逗留シ給トアリ○平相國ハ清盛入道ナリ安元ハ高倉院ノ年號ナリ寶曆ハ其年曆ノ正シキヲホメテ云詞ナリ鳳曆ナト云傳ニ同シ魏文帝祭河文ニ朕承寶曆克纂乾文○漫々ハ水廣犬貞字也李白詩云一覽吞數州山長江漫漫○鬱々ハナクサキ氣ナリ字彙ニ鬱臭也禮記内則鳥鰯色而沙鳴鬱ト○魚鱗ハ水中ノイロクズナリ和名鈔ニ鱗和名伊呂久須俗云伊呂古廣韻云魚甲也蘇子瞻力稼說ニ相尋於上如魚鱗ト

播磨國高砂の浦より長き娘よ入れほく結縁

々の中より七旬あつちわれ老翁六十あつちわ乃

○安元六年代

處々異説帝
王編年記云
承安三年平
家物語云三應
保元年二月
上旬二築始
同三年三月
下旬二成就
應保元年ヨリ
承安三年ニ至
テ凡十三年ヲ
經テ明後五
年安元ト改元
セリ
○高砂浦ハ
賀古郡ナリ

老女。夫婦たりたるが申なほい。つゞきハこれ浦
のあまふたりたさくよりのすれぢぢを業らう。
あしたゆふべよ。いろも川の命をたらし。世を
了るるらり。こゝに。その命返こら。とを
れ。地獄にたらし。と。も。か。つ。く。侍。た。り。
に。い。い。て。さ。ま。は。ぬ。も。は。さ。く。た。た。け
さ。せ。強。へ。ら。う。と。も。あ。つ。せ。た。ま。わ。上。人。あ
ら。せ。て。汝。ら。と。く。成。を。れ。も。南。無。阿。弥。陀。佛。と
と。れ。ぬ。ま。い。佛。の。悲。願。よ。乗。じ。て。淨。土。に。往。ま
す。べき。じ。ひ。強。く。ら。に。を。し。入。強。を。れ。ん。二。人
と。も。こ。候。よ。じ。ひ。強。く。ら。に。を。し。入。強。を。れ。ん。二。人
候。け。た。ま。ら。う。と。う。候。い。ひ。浦。よ。い。で。く。
手。よ。す。れ。ら。り。と。も。事。や。ま。づ。も。あ。れ。と。も。口
よ。い。名。号。を。と。れ。く。よ。い。家。よ。う。へ。り。て。二。人。こ
を。に。と。を。あ。げ。て。終。夜。念。佛。と。も。事。あ。り。れ
人。を。お。と。れ。ら。り。た。る。ま。わ。ら。る。よ。臨
終。正。念。あ。り。て。往。生。を。と。り。げ。よ。と。う。い。ひ。と。う
き。く。強。く。機。類。万。品。た。れ。と。も。念。佛。す。れ。し
往。生。す。る。現。證。た。り。と。も。た。は。せ。と。れ。と。う。

畫圖

○高砂ノ浦二十輪寺トテ。大師ノ開基トイハル淨家ノ寺アリ。今東山禪
林寺ノ末流也。村民等彼寺ノ檀越トシテ。其先祖大師ノ化導ヲ蒙リ
者ノ末アリト云。○スナトリハ漁ノ字ナリ。コレラスル者ヲ漁父ト云
同國室れ泊りけり。小船一艘ちのた

また。これ遊女がらひなりたる。遊女申
はく上人の御船れうけたまわて推
付たり。世にわさる道よりあは。いふは
はとありて。かゝる家より侍はん。これ罪業
にまき。いふて。のち乃世たす。り
能へきと申。これ

○泊舟附于岸。曰泊。此室泊昔ヨリ遊女アル所ニテ。江口神崎ノ如ク
ナリトソ。○詩經ノ國風ニ漢有遊女。洛神賦ニ從南湘之二妃。攜漢濱之
遊女ト。順和名ニ遊女ヲウカレト云ト。夫木集ニ源仲正。河ノ瀨ニ浪ノ
ウキ草ウカレアリク。ソノタハメライカ、タノシ。後京極攝政。タレトナクヨ
セテハカヘルナニ枕。ウキタル舟ノ跡モトメス。九卷傳ニ遊女申ケル昔小
松ノ天皇。八人ノ姫宮ヲ七道ニ遣ハシテ君ノ名ヲ留メ給キ。コレ遊君ノ濫
觴ナリト。一書ニ遊女カ家ノ長カ先祖ヲ注シテ。小松ノ天王ノ娘宮。玉判
加陵風芳ト云有ケリ。江口神。至兵庫ノ傾城ハコノ末ナリト

上人ありての遊女。くぐよをらやりにて世
をわら。遊女。人罪障より。に。う。が。れ。は。
酬報より。う。が。り。が。こ。き。か。れ。ず。て。世。を
わ。ら。ひ。給。ぬ。べ。し。う。ら。い。あ。は。い。ま。や。に。
う。れ。い。は。い。て。給。へ。し。餘。れ。り。し。
を。た。く。又。身。命。は。い。ら。い。は。い。の。道。に。い。ま。い。
お。た。ま。い。は。い。ま。い。よ。て。ま。い。念
佛。と。へ。し。弥。陀。如。來。に。や。う。れ。る。罪。人。の。し。め。に。ま。
私。誓。を。ま。た。て。ま。い。事。に。て。信。託。し。ま。い。
本願をたのまて。あ。て。卑。下。す。事。に。れ。本願を
憑。て。念。佛。せ。い。往。生。し。ま。い。あ。い。ま。い。福。ん

くるまをくへ給ふれ。遊女随喜れ涙をたぐり
 ぐりあらしに上人の給なる。これ遊女信心堅固なる
 けづめて往生候とくへと。歸洛のこともくにて
 たづみ給ふれ。上人の御教訓をうけしむらり
 てのら。これあらしに山里にともて。一とら
 に念佛し侍り。いくほとれ。臨終正念ありて
 往生候とげ侍り。人申ふれ。まのくんく
 とぞおほせられ。

畫圖

○此御教訓ノ趣キ。龍舒淨土文ニ勸風塵者文ニ全同ナリ

圓光大師行狀畫圖翼遊卷三十五
事義

傳本第三十五

三月廿六日。讚岐國塩飽の地頭駿河権守高階
 保遠入道西忍館に侍る。孫よら。西忍去夜
 の夢。満月輪れ。ひら。赫変たるが。や。し。に。や
 ころ。や。見。て。あ。や。し。思。ひ。な。る。に。上。人。御。あ。り
 々。れ。し。こ。れ。事。な。り。な。る。と。思。ひ。あ。せ。ら。る。薬湯
 を。よ。ふ。け。羨。膳。を。と。の。へ。は。ま。く。に。ま。り。た
 て。ま。の。り。

○地頭ハ文治元年頼朝卿奏聞ヲ經テ。宣下ヲ蒙リ。諸國ニ地頭ヲ
 置テ。政務ヲ沙汰セシム。東鑑ニ見エタリ。○高階保遠ハ太平記ニ高階

○鹽飽ハ扇嶋
 小豆島ト相
 並ル小嶋ナリ
 ○入道西忍
 未考。東鑑嘉
 禎元年寛喜
 二年ノ紀ニ駿
 河入道ト云
 アリ。太平記ニ
 鹽飽入道高
 階時遠ト云
 あり。若此ト
 族ナク歟

時遠ト云者アリ。是其祖ト聞エタリ。○赫奕ハ火盛也。赫火赤貌奕盛也。藥湯ヲマフケ。九卷傳ニ温室ヲイトナミトアリ。藥湯ハ五木ハ草湯ノ類ナルベシ。又九卷傳ニ此時上人詠歌ニシテセルトテ。極樂モカクヤアルラシアラフタノレハヤマイラバヤ南無阿彌陀佛。○モテナシハ。饗ノ字アリ。日本紀ニミアヘスト訓リ。詩經ノ彤弓ニ鐘鼓既設。一朝饗之ト

上人念佛往生此道に由りてはがき給たり。中よそ不輕大士は。杖木瓦石を志のびて。四衆の縁をむすび給。いづちもさうり事候。めぐりては人をすめて念佛せしめんたよへ。あへて人のよめに候ぬぞと。うへはく附属一給を給。ぬくおほせのむしを中とさへまよ。をぞ申さる。うへはく自行化他念佛のほり。他事候りたり。

畫圖

○不輕大士ハ一切有情ニナ佛性アリ。サレバ男女貴賤。牛馬六畜ヲエラハズ。禮拜シテ過サセ給ケルニ愚人コレヲ慢リテ。此大士在亂セルヤトテ。杖ヲアテ石ヲナゲケレド。猶モヤミ給ハザリシトナシ。法華經ノ中ニ見タリ。秘傳抄ニ入道ガ家ニハ。旬ニアマリタル老尼ノ念佛ニオヂテ。何トス。メテモ申サヌ難化ノ者アル由ヲ申テ。見衆ニ入奉リケルヤアリ。サテ此仰アリト聞エタリ。○附屬ハ第三卷ニ見ユ

○子松又小松トモ書ケリ。那珂郡ナリ。○生福寺ハ弘法大師ノ建立觀音靈驗ノ地ナリ。兵亂ニ侵サレテ今ハ其舊跡ガカリ殘レリ。大師御自作ノ影同彌陀ノ像以下真

讚波國子松庄に在りてはがき給たり。當庄に内生福寺といふ寺に住して無常候。とらをとり。念佛の行候す。免給々候。當國近國の男女貴賤化導し。志のび給。市に。或ハ邪見放逸。事業をあらめ。或ハ自力難行の執情をす。念佛に歸り。往生をこころ

福寺ト云寺ニ
傳持セシラ當
國ノ太守源
頼重朝臣寛
永年申彼生
福寺ヲ移シ眞
福寺ノ尊像
影像ヲ迎テ
創佛生山法
然寺來迎院

これおほりたる。邊に利益をねのへ朝恩
たりとふる。こび強なるを。やうとにことなわよ
ぞおほえ侍る。のれ寺の本尊。まことし阿弥陀
の一尊にており。よりたる。汝在國のあひの。脇
土をほくくくく。勢至をい。上
人。の。法然本地身大勢至
菩薩為度衆生故。顯置此道場。我毎日影向
擁護歸依衆。必引導極樂。若我此願念不令成
就者。永不取正覺。とぞ。此をうれたる。勢至れ
化身として。とづ。その躰をあ。の
に。とぞ。たうとま事

畫圖

○子松生福寺地理寺院ノ中ニ出○此文ノ心ハ一切衆生ヲ利益センガ
爲ニ我本地ノ實ヲアラハレテ。此寺ニ造置ナリ。我本地ノ神カラ以。毎日此ニ
來テ。歸依ノトモガラヲ守リ。後生ニ必極樂ニミチビクベシ。是即我願ナリ。
若此願ムナレクハ。我永成佛スマジトナリ。サテ此文ヲ書給フコトハ。大師其
コト當國遊歴シ給ヒテ。アミノ浦綾川ノ水面ニ臨テ見給フニ。自ノ頂トニ
寶瓶アラハレテ見ヘケリ。即其影像ヲウツシテ。今ノ文ヲ書給ヒケル。歸洛
ノ時。當寺ニノコレヲキ給ヒケレバ。所人置文ノ御影トゾ申ケル。其後泉
州境ノ長泉寺ノ開山十萬上人。夢ノ告アリテ感得シテ。長泉寺
住持説今現ニ
彼寺ニマシマスト云○凡三世ノ應現。密因ヲ泄サズ。嚴本地ヲバフカク
隱密スル事ナレド。時ニ臨テ利益アルニ。顯現スルモ亦善巧ナリ。サレバ
自ラ其體ヲ現ハシナリ申サレケシ。散善義ニ上來所有。靈相者。本
心爲物。不爲己身。既蒙此相。不敢隱藏トアルモ。此類ナリ。

上人を遷れ。月輪の禪問朝暮の御歎あ
さか。と。日來の御不食い。く。に。せ。び。て

○光親卿ハ
權中納言光
雅卿ノ二男
母ハ入道右太
辨重方朝臣
女也承元五
年正月十八日
權中納言ニ
任ズ兼室ノ
庶流堀川ト
号ス承久三
年七月五日
出家法名西
觀

大漸の期らるるにせ給ぬ藤中納言光親卿を
めりて侍をうけたるは法然上人年来歸依の
よりけりめりて存知ある人今度の勅勅を
申ゆるさしめて請所へつておぼゆる事いさ
て世よある甲斐ふた似たりさうおぼゆる
ゆるかたは左右に申さんことをおぼゆる
る遊へよ後目を期してすぐるさうよとて
よ終焉よのぞめり今生れうとこの事に
あり我他界よおぼゆるも連る御氣色
をうらひして恩免を申をこたはるへと
まことこれ侍らば光親卿位のひの更よ如在

御存すへうらひのしめて涙をたぐはるる
同四月五日御臨終正念ありて念佛數十遍禪
定よいるるうらひして往生をさげさせ給ぬ
御らう五十八たり

○左遷ハ第三十三卷ニ見ユ○書經ノ顧命ニ嗚呼疾大漸惟幾病日
臻既彌留易序卦傳ニ受之以漸漸進也進必有所歸得其所歸
者必大文選注補淵ニ太漸謂疾漸重將死也○光親卿ハ是後鳥
羽院ノ寵臣ナリ○嚴旨ハキトシタル慮ナリ○他界ハ第三十三卷ニ
注シヌ○カキクトクトハ打口説ナリ○如在論語ヨリ出テ本ハ事ヲ
慎テ大切ニスルライヘリ今ノ俗イルカセナルヲ云來レリ是アルカナキ
カノ様ニスルト云意ニテカラハ云蓋トフ或云神ハ聲色ノ見聞スベキ
無レコレヲ祭ルニ如在人ハ實ニ見在る如ノ字ヲ付ヘカラス今見在スルヲ如
在ニスルハ疎略ナルナリ○御トシ五十八系圖ニ五十九東鑑公卿補任亦
同文治二年三月攝政氏長者時二年三十八同之トアルニ依ハ五十九
ナルベレ傳文筆ノ誤ナルニヤ九卷傳又五十八トアリ

○東山禪閣
道家公嘉
禎四年四月
初五日法性
寺ニテ出家ス
法名行祐号
光明峯寺殿

上人尤遷びらびくく程たくてこの御事さここえ
たり御ありれをしらるるる處へ後京極殿ハ
しきだくせ給ぬ其御子東山の禪問家督にて
御ありけつつせ給ま月輪殿御歸依れ餘慶
をうけおれく上人れ勸化を御信作ありたり
して六方恒沙乃諸佛の證誠をたうとんて
阿弥陀經十萬卷摺寫れ之願ををらくからま後
異朝よひらくせられて摺寫の私通をひらくせら
るるれ經れほく吾朝よ流布せり發願の志趣
經れ奥にのせらるれ状云十萬の寫切よらりて
萬德れ尊容を禮し称陀れ說法をまうらりて普

○承久三年
四月廿日攝政
同廿六日氏
長者及牛車
元安貞二年
十二月四日關
白寛喜三年
七月五日關

賢の願海よい里隨類の形を化現しく舊去
乃後を慈愍しあまく長夜の寐らり夜を
とらりてひらく覺悟乃曉よらりめん
衆生無始の身宴坐たる眼よあり塵點劫數
乃業ころを志しらるに念をいてと長哉こ
れ筆舌をめらせてれ言語をいらり人事を祈り
くハ紫金の毫光白骨の微功をてらら後へ望
れり于時文曆第二歲し未仲春第二日後一
位藤原朝臣道家敬白云發願のしの自他を
しの異朝よをよほりてれ願ををらりられ
る御と後ごらりたうとくも傳れ

白ヲ辭シテ
男左大臣ニ讓
同從一位ニ叙
文曆二年三月
十八日重攝政
氏長者隨身
兵仗ヲ賜ル事
元ノ如シ

畫圖

○後京極殿良經公ハ月輪禪閣ノ長男ニテ建永元年三月廿日ニ薨ス
年三十八ニナラセ給シカ。夜ノ中ニ頓滅シ給キトソ。次上ノ卷ニ見エタリ
○史記ノ越世家ニ家有長子曰家督也。世嗣トナリテ家業ヲスベツトル
ヲ云○易ニ積善家ニ有餘慶○カタ木ハ板木ヲ云。形木ノ字ナリ。是文
字ヲスリ出ス範ナリト云義ナルベシ。此板木ヲ大唐ニテホラセ流シ行セ
給ヘルナリ○普賢大士ハ一切ノ行願ヲ掌シサレバ一切ノ佛菩薩ノ
發願ヲミナ普賢ノ願ト名ツクルナリ。華嚴經ニ見エタリ。海大其廣大無
邊ナルニ喻テ云ナリ○機ニ應ジテ童男童女等ノ形ヲ現スルヲ隨類ノ
形ト云○舊土ハ娑婆ノ舊里ナリ。古栖ナト云ニ同意ナリ○宴坐公ニ
ツカニサルトヨメリ。又燕坐トモ書テ安息ノ貌ナリ。要月燈ニ昧經ニ宴
坐ニ十種ノ勝利ヲ説ケリ。坐禪ト同意ナリ。此ニ言心ハ閑ニ坐シテ能ク
觀スレハ無始生生ノ苦患ノ身眼前ニウカヒテ其ツキセヌ有様ガ一心ノ
中ニ現スルゾトナリ○塵點劫ノ事法華經ニ出テ常ノ如シ。限りモナク時
節ノ長キヲ云ナリ。此劫數ヲ經テ造リシ罪業モ心ヲ靜メテ觀達スレバ
只一念ノ中ニツクニレリトソ○上ノ二節ニ悟前ノ境界ヲ迷ラレタリ。衆
生其心ヲエズレテ迷迷トレテ永ク流轉シ冥冥トレテ恒ニ業ヲ造リテ
卽是端的ノ一念心中ヲ不出ト開覺スル事アタハズ。此ニコレヲ歎息トテ

哀哉トハイヘルナリ。サレハ今此筆ニテ物イハセテ漸ク此詞ニ打驚カサシ
歎トナリ。揚子雲カ解嘲文ニ得信其舌而奮其筆○上ノ諸文ハ此
功德ヲ他ニ及ボス事ライヘリ。此一節ハ自分ニ廻向スルノ意ナリ。言心ハ
今微少ノ功德ヲ此身ニツトメタリ。死シテ白骨トナラバ神光ヲ舒テ
我後世ヲ照シタマヘトナリ。毫光ハ佛ノ白毫光ナリ。微功ハ我少分ノ
功カナリ。後漢ノ班昭ガ傳ニ昭以微功時蒙重賞○文曆第二ハ人皇
八十六代四條院ノ年號ナリ

上人流刑^{るけい}せよ。遠近^{きん}よきこえり。津戸^{つのと}三
即為守^{ためも}。これをおかして遠遠^{とんとん}れはる
なりといへるも。武藏國^{むさしのくに}より讚波國^{さぬきのくに}へ書状を進
ずるとき。上人の御返事云。七月十四日此御消息。
八月廿一日よん流ぬ。このれはるいよるに
信じて流御らるご。申はくはとるらる

武藏國より讚波國へ書状を進

佛。よき事に志すべし事なりて。この世に佛。
ろくく申らるるれを佛。但今生乃事。此の世
よ法をてきよきも人をいひしる。海を事
て佛。いひてもいふ人と思食へ佛。今始あるを
志り佛。のぬ身よか。留めん。後見佛。心よ事
よて佛。へとも。はまじり。穢れたるいよ
て。ハ佛。へとも。さうく。往生をせども。やと。そ思
佛。へとも。此をこま。遠眼の事。たごい。ゆえよ
も思食へう。う。佛。ある。海を身。其宿報と申。
又穢悪充満。たごい。い。此よ。い。め。事
佛。へ。た。に。事。よ。法。を。て。も。い。う。に。く

往生。誠志。そん。思へ。ま。こ。に。佛。云。御文。れ
に。も。じ。ま。よ。に。あ。ら。れ。よ。ぞ。れ。ほ。え。伝。る。

畫圖

○遼遠。第三十三卷二見。タリ。○ニカ。ル。八。事。三。テ。ト。カ。タ。ナ。ウ。テ。叶。又
因縁。ニ。テ。ト。ナ。リ。第。二。卷。ニ。注。ス

○直聖房未考

直聖房といぬ僧あり。上人。其弟子と。始。て。
一向專念の行を修。と。ある。とき。熊野山へ。まい。り。た
里。を。つ。た。上。人。の。配。流。せ。れ。は。路。より。返。さ。て。い。そ
ま。下。向。で。ん。と。志。す。る。り。よ。ら。に。重。病。候。う。け
て。下。向。う。れ。は。わ。ら。れ。ん。福。ん。ご。ろ。り。權。現
よ。い。れ。ち。申。事。に。い。れ。僧。の。夢。に。臨。終。す。て。よ
ち。う。け。ら。り。下。向。志。す。る。べ。か。う。法。を。志。免。く

強ひて我も法然上人の御事ありにたづね
 く傳へば、よく下向してうけ給わむく
 儀と申す我も、これ上人の勢至菩薩化現なり。
 不審すへう、次とてひて志然に傳へる事
 見て夢はめぬ。其後いをもとを傳へて、臨
 終正念ありて往生候とげよと云

書圖

上人在國のあり、國中靈驗地巡礼
 院の中、善通寺といぬて、弘法大師父の
 ために、おとてられたる寺なり。これ寺乃
 記文よ、ひとてひをもつて、たんに、のりて

一佛浄土とて、さるるあり。このさるる
 思いて、この事なり。さるるあり。ひにせら
 れ、これ

書圖

○善通寺ハ寺院ノ部ニ注ス。○コノ寺ノ記文トハ四國靈場記ニ道範阿
 闍黎ノ記文アルヨシラ載ラレタレド。是ハ吾舅大師ヨリ後ノ記録ト聞エタリ。
 サレバ弘法大師自ラノ記文アリテ、カクハ記サレケルニヤ

父ノ家園ナリ。御父姓ハ佐伯氏名ハ善通ヨテ寺號トス。又行狀記ニ父佐伯真氏釋書云。父田公。智證別傳云。又廣傳上。三。房云。弘法大。師俗姓佐伯直源。出天尊。表。姓氏錄云。景行天皇皇。子。稱。皆。入。夢。命。之。孫。阿。都。那。命。男。豐。皇。孝。德。天。皇。時。初。賜。佐。伯。直。姓。矣。時。御。名。真。魚。其。父。曰。田。公。田。公。父。男。足。男。足。父。根。波。

郡。波龍父。
本從八位上。
大人。大人父。
伊能也。子孫。
相續為縣令。
母。阿刀氏。

